

鹿児島国際大学
社会福祉学会誌

ゆかり

第10号



鹿児島国際大学社会福祉学会編集

2011(平成23)年3月18日発行

目次

巻頭言	社会福祉学会長 天羽 浩一……	3
2010年度社会福祉学会・自主研究助成による研究報告		
ドイツ最低生活保障制度の給付と扶助基準に関する一考察	大学院福祉社会学研究科博士前期課程 大野さおり……	4
児童デイサービス（療育）利用者の実態について－利用者のグループ化－	大学院福祉社会学研究科博士後期課程 有村 玲香……	6
世界で一番幸せな国はどこか～「幸福」概念および測定法の検討～	3年高木ゼミ：グループA ○上加世田真一，相星孝明，大山桜子，橋本修平， 馬場健久，前野友希，泰江 誠，安田弥生子，山迫 希……	9
「幸福・不幸」観と社会福祉実践	3年高木ゼミ：グループB ○松尾隼人，大迫宏貴，田代真二，中村勇樹，二ノ宮龍之介， 橋口謙龍，松久保克洋，松本恭介，溝上友香，三谷章悟……	11
社会保障分析（Teil①）－生活保護の日独比較	3年・田畑ゼミA班：加世田真理，千歳 学，衛藤和也， 井上知美，倉山紀彦，中村 愛，上野達宏，山下愛里……	13
社会保障分析（Teil②）－ハローワークと就労支援	3年・田畑ゼミB班：安楽昭人，桑幡雅啓，迫田佳奈， 久留千佳，分領春香，山元延介，加治佐悠衣……	15
2010年度社会福祉学会自主研究成果助成報告会・レポート	1年 安持はるな……	17
2010年度鹿児島国際大学社会福祉学会主催シンポジウム		
<社会福祉学科に求められるものは何か－卒業生と，仕事や学生時代を語る－>報告		
コーディネーター報告 「絆」を感じた社会福祉学会	鹿児島国際大学教務課 原園 佑伍……	19
報告 自分を信じること＝自信	社会福祉法人 明轍会 南さつま子どもの家 渡邊 浩信……	21
学生時代と就職活動を振り返って	鹿児島銀行 鈴木 洋介……	24
人生のターニングポイント 医療法人 全隆会 指宿竹元病院 永池 富和……		27
社会福祉学会シンポジウム参加記	3年 分領 春佳……	30
シンポジウム報告を読んで	1年 梶原 智代……	31
大学院福祉社会学研究科創設10周年記念シンポジウム		
シンポジウム参加記「大学院に学んで－修了者は語る」を聞いて思うこと	3年 久留 千佳……	32
研究ノート		
招かざる客が招かれるべき客になる時－宇宿地区独居高齢者に対する面接調査より－	特定非営利法人 福祉21かごしま 外部評価員 渡邊彩友美……	34
レポート 社会福祉入門Ⅱ・施設見学記録	1年 飯伏 琳 1年 浮田 瑞紀……	41
実習センターから		
大学での資格取得－介護福祉コースの魅力 鹿児島国際大学実習センター 中井 康貴……		47

合格体験記 (第5回)

これまで、そしてこれから

社会福祉法人 日置福祉会 障害者支援センター うめの里 森山 友美……49
 テス! 数え切れない苦しみの中で見つける楽しみ!

社会福祉法人 恵心会 特別養護老人 ホーム清溪園 橋元 龍司……51
 頑張れば感動! 鹿児島国際大学聴講生 牧角壮一郎……56

覚悟を持ってより自分らしく

財団法人 慈愛会 介護老人保健施設 愛と結の街 二田 亮……58

先輩たちは、今・ここで (第6回)

今ここで振り返ってみて 宇部西在宅総合支援センター 山本 尚志……60

3Y=やばいっ、やっぱり頑張らなきゃ、やるっきゃない

医療法人 仁愛会 仁愛会病院 池袋 広美……62

自分らしく-多くの出会いを通して

鹿児島県美容生活衛生同業組合・鹿児島県美容専門学校 山元 一輝……64

鹿児島からの福祉・最前線 (第3回)

高齢者福祉の現場から

都城市役所 堀之内 猛……66

エッセイ

私にとって、とりあえずの快挙

1年 木場 智美……69

見つけることができた新しい自分

1年 加治佐なつき……71

私が寂しがり屋になった理由

2年 蓑田 彩紀……73

やっと掴んだキャンパスライフ!

2年 下園 歩……76

私とレジー4年目の片思い

3年 瀬戸口圭佑……78

なんとなく大学生

3年 橋口 紫織……79

社会福祉を学んで考えたこと-自分史を通して

3年 有村 久美……81

幸せって何だろう?

3年 川添沙津希……83

慣れる

3年 小野 大樹……84

実習を通して学んだ事

3年 村田 亮……86

小さなきっかけによる今

3年 大山美紀子……87

スイッチ-大学は楽しいところ

3年 安留 綾乃……88

学外研修-ホームレスについて学ぶ

3年 上野 達宏……90

サブゼミに学んで

3年 倉山 紀彦, 迫田 佳奈……91

出会いとつながりと必然性と 大学院福祉社会学研究科後期課程

中條 大輔……93

白さんの学生生活~私と私とやっぱり私~

3年 川路 美紗……95

先輩や学生と「ゆうかり」を作る中で見えてきたこと

-学科学会誌と社会福祉教育の連携のかたち-

社会福祉学科 崎原 秀樹……101

2010年度演習論文テーマ	106
社会福祉学会自主研究助成の募集	109
自主研究助成成果報告会・要項	110
社会福祉学会誌「ゆうかり」への寄稿のお願い	111
鹿児島国際大学社会福祉学会会則	112
2009年度鹿児島国際大学社会福祉学会・決算報告	114
編集後記	115

イラスト……三棹(鳥丸)みなみ 8p・10p・12p・14p・68p・77p・82p・裏表紙

川路 美紗 26p・44p・46p・55p・61p・72p・75p・80p・85p

題 字……柴田麻衣子

巻頭言

『ゆうかり』第10号発刊によせて

社会福祉学会長 天羽浩一

卒業生のみなさんへ

本号で10号をむかえた『ゆうかり』をまず卒業生の皆様にお届けします。例年本誌は卒業式直前に刊行され、本誌をまず手に取るのは卒業生です。すでに進路が決定し、福祉機関や企業での研修に入っているひと、まだ思うような進路先に出会えず求職中のひと、なお専門学校や大学院での学業を続けようというひと、それに何よりも社会福祉士試験に合格したひと、残念ながら届かなかったひと、希望に胸弾んでいるひと、不安が胸いっぱいひと、悲喜こもごも、不安と希望が交錯しているというのが現状でしょう。

2月下旬「就活」に悩んでいたという県内の大学生が、バスジャック（事件自体は計画的ではなく偶発的な要素が強いようですが）を起こしたというニュースが流れました。私が驚いたのは彼が、3年生であったということです。特殊な例かもしれませんが、3年生の段階でそれほどまでに「就職活動」なるものに精神的に追い込まれる状況があるということに改めて気づかされました。

昨年秋に、「ぶっとばせ、シュウカツ」という学生デモが主要都市で自然発生的に起こりました。そう多い数ではありませんでしたが、当事者である学生自身が、「何かおかしいぞ」と声をあげ始めたのだと思います。「シュウカツ」という社会的風潮に翻弄される状況、残念ながらそれをさらにあおる風潮も見られます。就業力は「シュウカツ」ではなく「人間力」を身につけることです。本学科でいえば「ソーシャルワーカーとしての人間力」を磨いていくことによって進路はおのずから開かれていきます。目先のことに振り回される必要は全くないと私は確信しています。

『ゆうかり』10号について

前学科長の堀田さんは9号の巻頭言で『ゆうかり』創刊号から9号に至るまでの、本誌のボリュームアップの推移を詳しく述べられています。

す。わずか17ページしか組めなかった第4号（2005年）から比すれば本号は115ページという6倍強のボリュームとなっています。勿論、量があればいいというわけではありません。掲載作品の内容は豊富化され、また本誌の執筆者も飛躍的に増加しており、社会福祉学科及び研究科の教員、学生が共に読み込んでいける親しみのある内容、それでいて本学会の目的である「学術研究を推進し、会員相互の学問的交流を促進する（社会福祉学会会則第2条）」という趣旨に沿った編集となってきました。

この間の『ゆうかり』のパワーアップは社会福祉学会運営委員の皆さんの労によるところが多く、実りある収穫となったことに敬意を表したいと思います。また本誌『ゆうかり』の編集を中心に担ってきた崎原さんはこの間の『ゆうかり』の編集動向を回顧し、今後の展望について提言されています。（本誌101p）「社会福祉学会はカリキュラム等の学科教育の縛りを離れて、学科教育を活性化するためのアソシエーション組織」であり、「学科教育と社会福祉学会活動をつないで、より豊かな学科教育の場を作っていく一連の取り組みをコミュニティソーシャルワークの視点から捉える」とし、本学会の活動や本誌の編集過程をソーシャルワーク実践と捉えられています。今後ともこの提言を生かしながら学科、学会活動が展開できればと期待します。

福祉社会学部の3学科はそれぞれ「児童学会」、「現代社会学会」、「社会福祉学会」と学科学会を有し、学会誌も児童学会が『児童扉』、現代社会学会が『Kaleidoscope』と、それぞれの学科の特徴を基礎に、多様な活動を続けています。それぞれの学科はその独自性を基盤にしつつも、福祉社会を形成していく一翼を担っていくという観点からは共通の立場にあるものと思います。社会福祉学科のみならず、福祉社会学部全体の発展を祈り、巻頭言の結びといたします。

研究報告

ドイツ最低生活保障制度の給付と扶助基準に関する一考察

大学院 福祉社会学研究科

博士前期過程2年 田畑ゼミ 大野 さおり

1. はじめに

生活保護法が保障する「最低限度の生活水準」とは、憲法第25条の生存権保障を根拠とするものである。しかし、「健康で文化的な生活水準」とは、抽象的・相対的な概念であり、それを具体的にどのような水準にするかということについては大きな課題である。これについて、朝日訴訟においては「人間に値する生存」あるいは「人間としての生活」を可能ならしめるような程度のものでなければならないとしている。つまり、それは国民生活の現状に照らした、生活保護基準の妥当性が求められるということになる。

今日の経済・雇用情勢は、現行生活保護制度が成立した1950（昭和25）年の状況と比べ大きく変化し、国民の生活や労働環境を取り巻く状況もさまざまな問題を抱えている。すなわち、「健康で文化的な生活水準」とは、流動的な社会情勢に左右される国民の生活動向に着目し、国民の生活を守り、その維持と安定が持続可能な水準であることといえる。故に、生活保護制度が国民の最低限度の生活を保障し、恒久的なセーフティネットとしての役割を果たせるようにすることが極めて重要である。

ドイツにおける最低生活保障制度は、稼働能力の有無により要扶助者を区分することで、いずれにも同額の「最低生活保障給付」を行うという抜本的改革が行われた。つまり、性質の異なる要扶助者からなる「求職者基礎保障」、「社会扶助」の制度に同額の扶助基準額を給付する仕組みを取っている。ここでは、ドイツ最低生活保障制度の対象者の異なる2つの制度の給付と扶助基準について検討してみたい。

2. 求職者基礎保障

求職者基礎保障の基本理念は、「支援と要求」（Fördern und Fordern）の原則であり、これにより

求職者を労働市場に統合するための就労支援サービスを定めるとともに、求職者に対し義務の履行を強く要求している。求職者基礎保障は、就労支援と最低生活保障を行うことで、稼働能力のある要扶助者への支援を効果的かつ効率的におこない、労働市場へ送り返していくための制度である。

失業手当Ⅱの受給請求権を有する者は、「15歳から上限年齢未満の者」であり、従来の社会扶助受給者のうちの就業が可能な者にも失業手当Ⅱの受給請求権が適用される。また社会手当の対象者は、就業可能で扶助を必要とする者と同じの「要扶助世帯」で生活する世帯構成員である（SGB第2編第7条）。求職者が「就業可能であるか否か」または「扶助を必要としているかどうか」は、雇用エージェンシーにより認定される。保有できる資産の上限は、原則として成人で扶助を必要とする者およびそのパートナーにそれぞれ「年齢×150ユーロ」であり、未成年の子ども一人につき3,100ユーロである。求職者は雇用エージェンシーとの間で「再就労協定」を締結し、これに基づき就労支援サービスや現金給付を受ける。求職者には原則あらゆる就労が期待可能とされ、就労すれば手当の加算などが行われるが、反対に就労を拒否すれば現金給付の減額や停廃止などの制裁が課せられる。

失業手当Ⅱの給付は、通常給付、増加需要給付、住居と暖房のための給付、一時的需要給付等で構成されている。基準となるのは単身者の「通常給付」である（表1）。生活費保障のための通常給付には、社会法典第12編社会扶助の最低生活水準の「通常基準」に相当するもので、食料、衣服、保健衛生、家具および日常生活の個人的需要、ならびに文化的生活に参加する費用をも含むものである（表3）。社会手当（家族）の給付額は、単身者の通常給付に対する資格者のカテゴリーにより定められた100分比によって支給される。

表1 失業手当II・社会手当の基準月額

資格者(給付基準)		<2009年7月1日改訂>				
・単身者 ・単身養育者 ・未成年のパートナーのいる成人	・満18歳以上のパートナー	・満14歳以上満25歳未満の子ども ・未成年のパートナー	・満6歳以上14歳未満の子ども	・満6歳未満の子ども		
100%	90%	80%	70%	60%		
359ユーロ	323ユーロ	287ユーロ	251ユーロ	215ユーロ		

3. 社会扶助

ドイツの社会扶助は、わが国の生活保護法と福祉サービス法の一部を含んだ制度となっている。このため、その給付は最低生活保障のために主に金銭給付を行うものと、高齢者や障がい者等に対する福祉サービスを行うものからなっており、社会法典第12編では7種類の給付を定めている。7種類の給付は、①「生活扶助」、②「高齢・障害等基礎保障」、③「特別扶助」の3つのグループに区分することができる。

生活扶助は、社会法典第2編および社会法典第12編第41条から46条による給付を受給していない者で、必要生活費を自己の所得や資産によって調達できないか、あるいは十分に賄うことのできない場合に、社会法典第12編第27条から第40条の規定に基づいて給付される。生活扶助は一般的な生活費を支弁するものである。それは通常基準と各種の加算措置で構成されるが、通常基準は世帯主とその世帯構成員を区別して定められる(表2)。なお、通常基準については、連邦労働社会省が定める「基準額法令」の範囲で州政府が月額を定め、その際各州は、社会扶助主体に対して、法規に定める最低基準額を基礎として地域的基準額を定める権限を与えることができる(SGB第12編第28条第2項3項)。生活扶助が保障する必要生計費とは、食事、住居、衣服、身体衛生、家具、暖房および日常生活上の個人的需要(相当な範囲として認められる、周囲との交際および文化的生活への参加)が含まれる(SGB第12編第27条第1項)。

4. おわりに

従来の最低生活保障制度(連邦社会扶助法)の扶助基準額は297ユーロで、現在の基準額に比べ低いことが分かる。しかし、この基準給付額を中心にそれ以外の給付(一時的需要給付等)との組み合わせにより、個別の需要に対応する給付が補完される仕組みが取られていた。制度改革後のドイ

表2 生活扶助の基準月額

資格者(各州の給付基準)		<2009年7月1日改訂>				
・世帯主 ・単身養育者	・パートナー	・満14歳以上の子ども	・満6歳以上14歳未満の子ども	・満6歳未満の子ども		
100%	90%	80%	70%	60%		
359ユーロ	323ユーロ	287ユーロ	251ユーロ	215ユーロ		

表3 基準額の内訳

消費支出項目	所得下位20%の世帯の消費支出額に対する比率	基準額・基準給付に占める割合	・単身者 ・世帯主 (ユーロ)
食料品、飲料、煙草	96%	37%	132.83
衣服	100%	10%	35.9
住居(家賃を除く)、電気	8%	8%	28.72
家具、家電、家庭用品	91%	7%	25.13
保健(薬、眼鏡)	71%	4%	14.36
交通	26%	4%	14.36
電話、郵便、ネット	75%	9%	32.31
余暇、娯楽、文化	55%	11%	39.49
旅行、外食	29%	2%	7.18
その他の物品、サービス	67%	8%	28.72
		100%	359

ツ最低生活保障制度として再編された、社会扶助においては従前の制度と同様に、ほぼ変わりなくその仕組みが取られている。一方、求職者基礎保障給付の仕組みは、簡略化を推進し定型化を強化することで、「受給者の自律的生活の実現」と「行政の簡素化」を目的としている。求職者基礎保障の給付基準額が典型的性格を帯びていることに否定的な評価は強く、需要充足のもつ補完性の欠如を引き起こしかねないことが指摘されている。

ドイツ最低生活保障制度がそうであるように、わが国の生活保護制度においても保護基準は重要な役割を果たさなくてはならない。それは被保護者のみの問題ではなく、憲法25条が示す「健康で文化的な生活水準」を国民の誰もが等しく可能とすることに標準が向けられているからである。国民生活の安定と社会保障の持続的発展を図るためには、保護を必要とする貧困層への最低限度の生活保障はもとより、自立した生活へと繋がる就労支援の充実が不可欠である。

主要参考文献

田畑洋一(2009)『ドイツ最低生活保障制度研究—制度の仕組みと運用—』東北大学大学院文学研究科博士論文
 嶋田佳広(2009)「ドイツ求職者基礎保障における保護基準」『賃金と社会保障』No.1489, 旬報社, 5月上旬号, 4-24頁

研究報告

児童デイサービス（療育）利用者の実態について —利用者のグループ化—

大学院 福祉社会学研究科

博士後期課程 養毛ゼミ 有村玲香

1. はじめに

昨今の子育て支援は、従来の子どもへのケアワークと同時に保護者へのソーシャルワークの重要性が高まっている。特に発達初期の乳幼児期の支援は、人間形成や家族関係の形成の大事な時期である。その中でも障害や疾病、発達が気になる場合にその重要な役割を地域で担っているのが障害者自立支援法に基づく事業所（障害者自立支援法第5条7項）の児童デイサービス（以下；児童デイ）である。現在児童デイの対象者は、早期療育の効果の高い範囲の幼児を原則として、障害の種別や診断の有無にかかわらず市町村のサービス受給決定を受ければ利用することができる。つまり障害や発達状況の種別が限定されず、利用者への支援は多様化している。そこで児童デイの療育支援は、子どもや保護者の発達・心理状況、環境などの実態に応じて行う必要がある。

2. 研究目的

本研究は、鹿児島県内の児童デイを利用している利用者の実態をグループ化し、その特徴を明らかにすることを目的とした。

3. 研究対象

研究目的に承諾を得た鹿児島県内の29カ所の児童デイ事業所を利用する全保護者831名（平成20年12月現在）。平成20年12月中旬～21年1月上旬にかけて質問紙調査（郵送法）を行った。

4. 倫理的配慮

文書にて調査目的、内容、方法について説明し承諾を得た。また、調査票は無記名回答とし、施設名や個人名が特定されないように十分にプライバシーに配慮し、得られたデータは学術的な目的

以外には使用しないことを約束した。

5. 分析方法

対象者は「幼児の母親」とした。保護者をグループ化するクラスター分類は、①利用月数②母親の年齢③子どもの月年齢④療育手帳取得率⑤身体障害者手帳取得率⑥リハの利用状況⑦幼稚園・保育園の並行通園⑧親の会への参加の観点から行った。グループ化は、大規模ファイルのクラスター分析（最大反復回数10）で行い、A～Gの名前を付けて表示した。

6. 結果（グループの特徴）

有効回答率は40.4%（336名）であった。属性項目の①～⑧の分散分析と多重比較の結果は、全項目でグループ間に有意差が認められた。

表1 保護者の属性項目分散分析、多重比較

	A	B	C	D	E	F	G	合計	F値	P	多重比較
①	5.51	6.67	10.9	19.7	31.8	32.8	48.1	18.3	387	0.000	a, b<c<d<e, f<g
②	32.9	34.5	36.2	35.9	34.3	36.5	34.4	35.2	3.48	0.02	a<c, f
③	31.2	48	67.9	52.2	41.2	69.6	69.4	55.9	277	0.000	a<c<b<d<c, g, f
④	0.37	0.23	0.33	0.49	0.61	0.4	0.68	0.4	3.94	0.01	b<e, g
⑤	0.12	0.11	0.12	0.14	0.39	0.02	0.24	0.13	3.44	0.03	f, b, e, a, d<e
⑥	0.39	0.19	0.21	0.39	0.5	0.28	0.4	0.3	2.66	0.16	b<e
⑦	0.29	0.5	0.94	0.46	0.33	0.87	0.8	0.64	19.2	0.000	a, e, d, b<g, f, c
⑧	1.12	0.94	1.24	1.95	2.11	1.92	1.76	1.48	8.18	0.000	b<g<f, d<e

1) A グループ（12.2%，41名）

母親の年齢33歳、子どもの年齢2歳7カ月と最も若い。療育手帳の取得率37%、身体障害者手帳の取得率12%であり、リハ利用率は39%で、障害や発達の遅れが早期に発見されたグループである。だが、児童デイの利用歴が6カ月と最も短く、児童デイでの支援が開始されて間もない。幼稚園・保育園を並行通園しているのは29%と最も低

く、児童デイとリハを活用した発達支援が中心である。親の会の参加度は1.12とあまり高くない。

2) Bグループ (19.0%, 64名)

子どもの年齢が4歳0カ月、療育手帳の取得率は23%と最も低く、身体障害者手帳の取得率11%である。児童デイの利用歴は、7か月と3歳以降に児童デイの療育支援が始まっている。幼稚園・保育園は50%が並行通園しているが、リハ利用率は19%、親の会参加度も0.94と最も低い。児童デイでの単一支援が多く、母親同士の交流や情報交換が少ないグループである。

3) Cグループ (23.2%, 78名)

子どもの年齢が5歳8カ月と年齢が高いが、児童デイの利用は11カ月と4歳後半から児童デイの支援が始まっている。療育手帳取得率33%、身体障害者手帳取得率12%と全体的に低い。リハ利用率も21%と低いが、幼稚園・保育園の並行通園率は94%と9割以上幼稚園・保育園を利用しており、主に幼稚園・保育園と児童デイからの発達支援を受けている。親の会参加度は、あまり高くない。

4) Dグループ (17.0%, 57名)

子どもの年齢は4歳4カ月であるが、児童デイの利用は1年8カ月と早期から児童デイを利用している。療育手帳の取得率は49%と約半分が取得している。リハ利用率は39%、幼稚園・保育園の並行通園率も46%と幼稚園・保育園に所属しながらリハと児童デイの両者からの発達支援を受けているグループである。親の会の参加度も高く、保護者同士の交流が多く行われていることが伺える。同時に複数の発達支援を受けているグループである。

5) Eグループ (5.4%, 18名)

子どもの年齢は3歳5カ月と幼いが、児童デイの利用歴は2年8カ月と早期から児童デイを利用している。療育手帳の取得率61%、身体障害者手帳の取得率39%、リハ利用率も50%と最も高く、障害や発達の遅れが早期に明確になっていることが伺えるグループである。幼稚園・保育園の並行通園率は33%とあまり高くない。親の会の参加率は2.11と最も高く、子どもの子育てに積極的に取り組み、他保護者との交流や情報を多く持っていることが伺えるグループである。

6) Fグループ (15.8%, 53名)

子どもの年齢は5歳10カ月と就学年齢に近く、母親の年齢は36歳と最も年齢が高い。児童デイの利用は、2年9カ月で3歳以降に児童デイの療育支援が始まっている。リハ利用率は28%であるが、幼稚園・保育園の並行通園率は87%と高く、身体障害者手帳取得率が2%と最も低いので、身体的な障害より社会性や認知力、学習などの発達の偏りへの支援が必要であると伺える。また、親の会の参加率も1.92と高く、就学に向けて保護者同士の交流が多く行われていると伺えるグループである。

7) Gグループ (7.4%, 25名)

子どもの年齢5歳9カ月で児童デイの利用は、4年0カ月と最も長く児童デイを利用している。療育手帳の取得率は68%と最も高く、身体障害者手帳の取得も24%と高い。リハ利用率も40%と高く、早期に障害や遅れが明確化し長期間の支援が行われているグループである。年齢が高いため幼稚園・保育園の並行通園率は80%と高く、保護者の親の会の参加率も1.76と高い。

7. まとめ・今後の課題

本研究では、児童デイの利用者の実態に応じた療育ケアワークと療育ソーシャルワークを展開するために、複数の包括的な観点から利用者の実態を具体的に分類した。

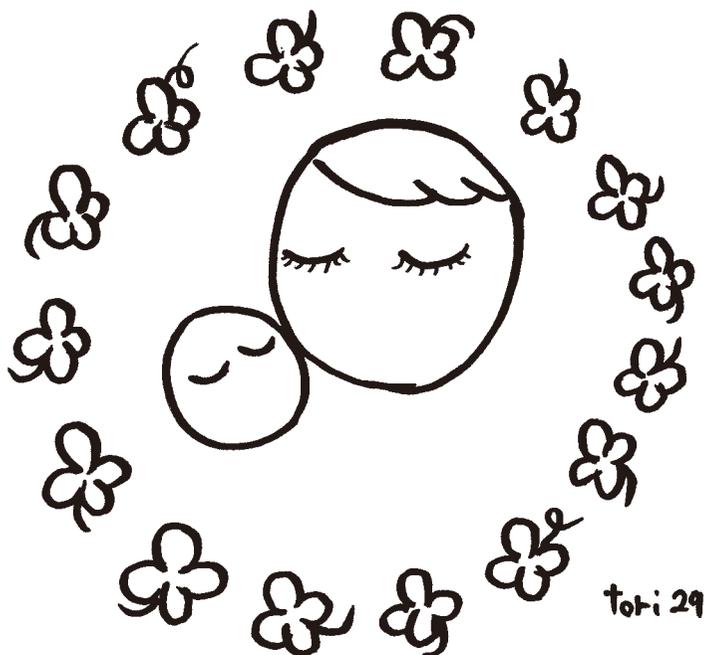
児童デイは、子どもの疾病や障害種別の区別はなく、発達が気になる段階から利用できる。同時に、保護者は障害告知を受けたり、子どもの発達に不安や悩みを抱えている場合が多い。障害受容には、個人差はあるがおよそ1年が必要である。障害受容の過程は、①精神的打撃と麻痺状態②否認③パニック④怒りと不当感⑤敵意と恨み(ルサンマン)⑥罪意識⑦孤独感と抑うつ感情⑧精神的混乱と無欲、無関心(アバシー)⑨あきらめから受容へ⑩新しい希望、ユーモアと笑いの発見⑪新しいアイデンティティの誕生の11段階の変容がある(佐々木, 2001)。当然ながら子どもや保護者(特に母親)の発達・心理状況、環境などの状態によって支援方法や内容は異なるので、児童デイの療育支援を①関係性②自律性③時間性の3次元の側面から行う必要がある(伊藤, 2010)。そこで、

今後の課題は、本研究で得られた保護者のグループを独立変数として、保護者の自己評価項目を分析し、特徴や実態に応じた具体的な療育支援を検討していこうと考えている。

引用文献

伊藤良子（2010）「障害児の母親へのケア」に関する文献展望とその分類. 京都市立看護短期大学紀要, (35) 67-76.

佐々木正美（2001）児童精神科医が語る. 岩崎学術出版社, 170-172.



研究報告

世界で一番幸せな国はどこか ～「幸福」概念および測定法の検討～

社会福祉学科3年（高木ゼミ：グループA）

○上加世田真一，相星孝明，大山桜子，橋本修平，馬場健久
前野友希，泰江 誠，安田弥生子，山迫 希

1. 研究目的

わたしたちは、幸福をどのように感じ、それをまたどのように手に入れているのか。社会福祉学習の基本テーマの一つである「幸福」概念が文化の違いによってどのように異なって理解がされているのかについて文献資料を収集し、分析・整理をすることを思い立った。

また、近年の世界各国を対象とした「幸福度」の測定結果にも当たってみる。そこでは、日本は上位にランクされていない。その原因・理解について測定法の検討を加味しながら考え、世界で一番幸せな国は果たしてどこなのかを探っていくことにした。そして、幸福度ランキング1位の国はどのような暮らしをしているのか調べることにした。

2. 研究方法

- (1) テキスト（大石繁宏著「幸せを科学する」新曜社）をゼミの学習に沿って読み込む。基礎概念等の学習を積む。
- (2) 「幸福」に関連する書籍・新聞・論文・インターネットを収集する。
- (3) 世界各国を対象とした「幸福度ランキング」を収集する。
- (4) メンバーで分担して、概要の紹介、批評を行う。
- (5) 調査結果を報告書にまとめる。

3. 調査研究結果

(1) 幸福感

人が感じる幸せは、他の人には必ずしも幸せと感じられるものではない。しかし、人が幸福を求める前提として満たされていなければなら

ない条件として、自由と福利があげられている。

(2) 幸福度ランキング（指数ランキング）

ここでは世界の幸福度ランキング・指数ランキング、そして幸福に関連するいくつかのランキングをとりあげている。まとめとして、作成した年数・作成元・内容・作成に携わった人々によって結果が大きく異なることが分かった。

(3) デンマーク

25%の消費税を課し、医療・福祉・介護・教育など無料化する。まさに高負担高福祉である。制度がしっかりしており、様々な福祉サービスを利用している。人は自由で満足しているように見えた。

(4) 日本

個人の所得や雇用、政治体制、社会保障に関する将来に対する不安があり、首相が次々と代わる政治の不安定さがある。欧州の負担率が高いが社会保障が充実し幸福度が高い。日本は、社会保障を充実し幸福度を高めるために増税すべきであるが将来にわたって安心できる社会保障制度をつくることを約束できれば国民は納得するのではないか。

4. まとめ

わたしたちは今回、「世界で一番幸せな国はどこか」について、インターネットや書籍・新聞・論文などから資料を収集してグループ研究を行った。今回は、幸福度ランキング一位の国としてデンマークを取り上げたが、まとめとして調査年度・機関・内容・対象人物によって同じ幸福度ランキングの結果は異なってくるので一概にはデンマークが世界一とは断言できない。また、幸福＝

幸せに関するランキングといっても、「幸福度ランキング」をはじめ、「国の豊かさランキング」、「生活満足度ランキング」、「住みやすい国ランキング」、「平和度指数ランキング」など多くのランキングがあった。どのランキングの結果を見ても、やはり高福祉高負担の福祉国家の代表といわれる北欧が今の時代には生きやすい社会なのかもしれない。

今回の研究の中で、国・性別・年齢を問わず、幸せの感じ方はそれぞれ異なることが分かった。人間一人ひとり個性があるように、幸せの感じ方は一人ひとり違う。裕福な国・貧困な国に関わらず、一人でも多くの人々が「幸せ」だと感じられることが最も大切なことなのではないかと思う。



研究報告

「幸福・不幸」観と社会福祉実践

社会福祉学科3年（高木ゼミ：グループB）

○松尾隼人，大迫宏貴，田代真二，中村勇樹，二ノ宮龍之介
橋口謙龍，松久保克洋，松本恭介，溝上友香，三谷章悟

1. 研究目的

わが国に限らず多くの国々の福祉施策は、そのほとんどが公共政策として現実の政治の中で合意が形成され決定されていく。個々の施策の決定に際しては国、地方自治体の議会での討議が重ねられるが、時間的制約もあってそれが不十分な場合もみられる（例えば「介護保険法」の審議など）。そして、その具体化にあたってはソーシャルワーカーをはじめ、保健医療等のさまざまな専門職がかかわっている。そのため、地域における在宅サービス、施設サービスの利用・提供場面では、利用者と提供者との間で齟齬を生じることも少なくない。幸福の実現という目標に向けての双方の努力がしっかり噛み合わないのである。その底には「幸福」あるいは「不幸」に対する考え方の相違があることが想定される。本研究では、日本人の「幸福・不幸」観に関する単行本、論文等での論述を点検するとともに、こうした観点からの医療福祉現場での援助実践の現状・課題について探っていくことにした。

2. 研究方法

- ① 幸福・不幸に関する文献資料を収集し、それらを分担して調べ、考えをまとめる。
- ② 医療ソーシャルワーカーとして病院で働いているゼミOB・3名に幸福・不幸に関するグループインタビューを実施する。

3. 結果

- (1)「幸福・不幸」関係資料・文献から検索・整理・考察したこと
- 幸福と不幸の関係：幸福や不幸というものは、心に抱くものであり、見ただけで判断することは難しい。幸福のためには、あらゆることがらが幸福でなくてはならないのに対して、不幸に

なら、ただ一つの不幸でも十分不幸になれるということである。

- 幸福感：心が疲れた時や傷ついた時には、幸せを感じることで回復力を高めることができる。悩みやつらいことがある時ほど幸せを感じる時間を意図的に持ったほうが良い。
- 幸福と自尊心のつながり：幸福には自尊心も関係している。自分を価値ある存在として大切に思う気持ち自体は、人間が生きていくうえでなくてはならないもので、自尊心が低いと無力感や不安感にとらわれ情緒不安定になりがちである。
- 不幸がもたらす幸せ：苦痛・苦悩さえなければそれでよしとする無欲の安らかな幸福は、確実に得られる幸福になる。無欲ならば、不満は生じず、痛みがなく安らかであれば、それがそのままに幸福となるのである。不幸によってつぶされることがなければ、これに挑戦することをもって、そのひとは、大きく飛躍していくことが可能になる。
- 幸福・不幸～雑感：現代の日本人は、幸福を自覚するのに鈍感である。豊かであるに足らず幸福感をいなくということが諸外国に比してかなり低いようである。
- (2)グループインタビュー結果（抄）：「医療福祉分野ソーシャルワーカー（ゼミOB・3名）に伺う」
- 医療ソーシャルワーカーのやりがい
「急性期の病院の中で患者だけでなく、家族がたくましくなっていく姿を見てやりがいを感じる。」
「ふとした時に今はまだそこまで達していないと感じるが、楽しく仕事ができている。」
- ソーシャルワーカーが与えられる「幸せ」

「幸せであって欲しいと思い一生懸命接するが、結果として相手の方が幸せを感じているかは分からない。」「患者に対し制度、情報の提供はできるが、それが幸せに置き換えられるかは分からない。」

「家に帰ることが幸せなのか、転院することが幸せなのか分からない。」

- 患者さんが望む「幸せ」とソーシャルワーカーが与えたい幸福感の違い

「患者が望む幸せはニーズなのかなって思う。」「この人たちの生活がこうであつたらいいなと思いつながら面接をしている。」

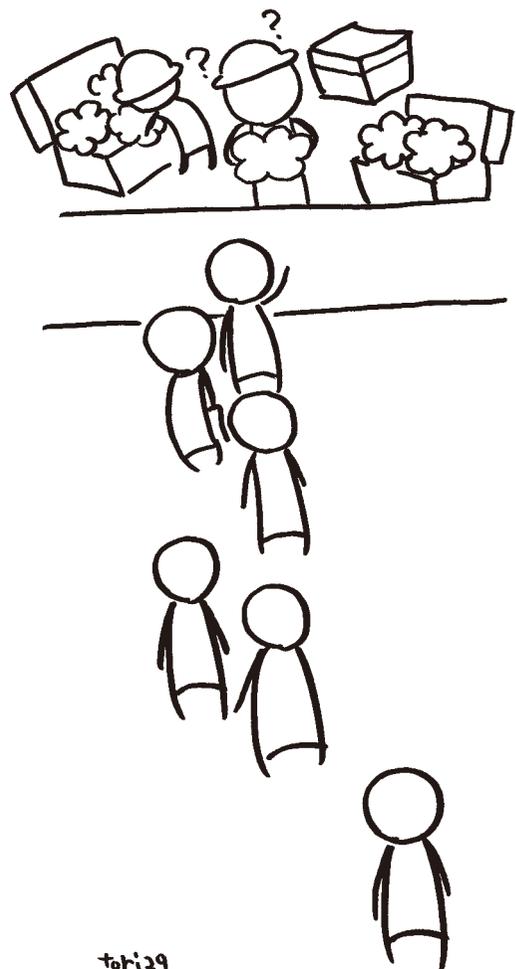
「患者の家族と病院側の方向性が一緒であれば幸せは共有できるが、介入しなければいけないケースはそれぞれ何かしらのリスク等をもつ患者が多い。」

(注)：インタビューの詳細は「報告書」参照

4. まとめ

文献資料をもとに、「幸福・不幸」の見方、とらえ方について考察した。「幸福と不幸の関係」「幸福感」「幸福の評価・判定」「幸福と自尊心のつながり」「不幸がもたらす幸せ」など、さまざまな視角から論述されていることを知ることができた。

医療福祉の分野で活躍する3名のゼミOBからは、援助実践場面で「幸福・不幸」観について、それがどのように意識されたり、省察されるかについて具体的な話を聞くことができた。また、ソーシャルワーカーとして働くことを目指す人への貴重なアドバイスが得られた。



tori29

研究報告

社会保障分析 (Teil ①) —生活保護の日独比較

3年・田畑ゼミA班：加世田真理，千歳学，衛藤和也，井上知美
倉山紀彦，中村愛，上野達宏，山下愛里

I 研究目的

ドイツの社会保障制度は保険原理，援護原理及び扶助原理に分けることができるが，生活保護制度としての社会扶助は扶助原理に基づく代表的な制度である。それは日本と同様，自己の所得及び資産によって生計を維持できない者あるいは生活困窮をもたらす特別な事情がある者に対して，民法上の扶養義務や他の社会保障給付を補足し，すべての者に対して，緊急避難的に人間の尊厳に値する最低限度の生活を保障する最後のよりどころとして重要な位置づけが与えられている。私たちA班は，ゼミで使用している文献を基に，生活保護についての両国の特徴を調べ，その差異を明らかにすることにした。

II 研究結果

A 実施者

ドイツの社会扶助法には，日本と同様，その運用や解釈についての指針となる基本原則が定められている。その原則は両国ともに共通性がみられるが，基本的な点での重要な相違もみられる。その最大なものは，制度の運用と責任主体である。日本の生活保護が国の業務とされ，保護費の4分の3が国庫負担とされているのに対し，ドイツの社会扶助は市と郡という地方自治体の任務とされ，これに州が加わって実施し，連邦政府は大枠を定めるだけで，費用についても負担しない。

社会扶助実施者には，地域実施者と広域実施者がある。いわゆる民間実施者の社会扶助実施者はない。社会扶助の実施上の責任を担う実施者について，社会法典第12編では，地域実施者と広域実施者の給付の種類に応じた「事物管轄」に関する実施者を規定し，さらに具体的な事例をどこの実施者が管轄するかに関する「地域管轄」の規定をも置いている。ここでいう地域実施者とは，郡に属さない市および郡をいい，また，広域実施者は

各州がそれぞれ定めることとされており，多くの州では州（またはこれと同格の特別市）自体が広域実施者となる。広域実施者の管轄とされない事項についてはすべて地域実施者の管轄とされるが，障害者のための社会統合扶助，介護扶助，特別な社会的困難を克服するための扶助，視覚障害者扶助は，広域実施者の事物管轄下に入る。

B 基本原則

ドイツ社会扶助の基本原則としては，①人間の尊厳にふさわしい生活の確保，②自助のための扶助，③後順位性，④個別性の原則，⑤法律上の扶助請求権，⑥需要充足の原則などがある。このうち，①は基本法の第1条に由来し，人間の尊厳にふさわしい生活を営むのを可能にすることで，給付受給資格のある者が社会扶助に頼らず生活できるようにするべきであると規定されている。②は困難な状況が後々まで取り除かれ，給付受給資格のある者が扶助を必要としなくなるように計画されるべきであるというものである。③は日本の補足性原理に対応する原則で，自助が可能な者，あるいは必要な援助を第三者，特に家族員や他の社会給付実施者から受ける者には社会扶助を支給しないと規定し，したがって社会扶助は自助あるいは第三者側からの扶助が不可能な時に限って行われるものであることを示している。④は社会扶助の支給は各々のケースや個人に応じた扶助支給であるべきであるとするもので，⑤は法律上の扶助請求権を定め，「しなければならない給付」・「するべきである給付」・「することができる給付」を明確化している。⑥の需要充足の原則は，明記されていないが，ドイツ特有の原則で，その意味するところは，該当者の現在直面している困難な状況において，具体的で個人的な需要を社会扶助がカバーしなければならない，ということである。この原則により，保護の開始が日本では申請

主義であるのに対し、ドイツでは職権開始とされていることも異なる点である。

C 給付の種類と方法

ドイツの社会扶助は、日本の生活保護法と福祉サービス法の一部を含んだ制度である。2005年の改革法の導入により、社会扶助の対象は就労が不可能な者と就労が不可能な家族に限定されることになった。日本では、就労の可能性の有無を区分することなく、生活困窮者を生活保護法が丸抱えし、就労可能な生活困窮者の保護には運用上、消極的姿勢をとっているが、ドイツの社会扶助の対象は就労不能な生活困窮者に限定された。2005年1月1日からは、15歳以上65歳未満の就労が可能な者で、自己の必要生活費を所得や資産で賄うことができない者は、社会法典第2編の「求職者基礎保障」を申請することになった。また、65歳以上の者および18歳以上の就労が不可能な者に対する「老齢・障害等基礎保障」は、独立した法律により定められていたが、社会法典第12編第4章に編入されることとなった。

これまでの連邦社会扶助法は、給付の種類を生活扶助と特別扶助の2つに大別していたが、社会法典第12編ではそうした区分を解消し、7種類の給付を定めた。この7種類の給付は、①生活扶助(SGB第12編第27条より第40条)、②老齢および稼働能力減退に際しての「老齢・障害等基礎保障」(SGB第12編第41条より第46条)、③特別な状況におけるその他の扶助(以下、特別扶助、SGB第12編第47条より第74条)がある。③の特別扶助は5種類に整理統合され、保健扶助、障害者のための社会統合扶助、介護扶助、特別な社会的困難を克服するための扶助、その他の境遇における扶助、がそれである。

社会扶助の形式、言い換えれば社会扶助支給の方法には、サービス給付(人的扶助)、金銭給付、現物給付がある。

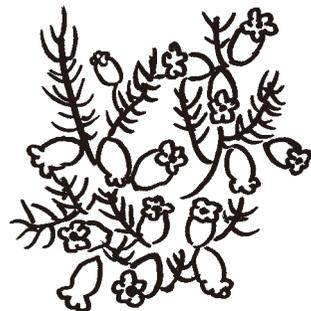
III 今後の課題

田畑ゼミのA班は、今回の研究で、日本とドイツの生活保護を比較したところ、最低生活保障と自立助長という目的は同じでも、大きく異なることが理解できた。私たちの驚きの最大のものは、

ドイツでは就労可能な要扶助者に対する求職者基礎保障と、就労不可能な要扶助者に対する社会扶助を最低生活保障制度と位置づけ、そのいずれにも同額の最低生活保障が行われているという点である。すなわち、ドイツでは就労可能な要扶助者は生活費保障給付を受けながら就労支援のための給付(「ひとつの手」による支援)を受けることになる。この点が日本との大きな違いである。日本でも「自立支援プログラム」がスタートしているが、先行ケースであるドイツの就労支援に学ぶとすれば、それは稼働能力の無い、または就労できない状況にある要扶助者には生活保護給付を保障し、稼働能力のある要扶助者については、その給付を求職者基礎保障給付と位置づけ、生活保護水準の給付内容と同一の失業給付と就労支援給付を同時に保障できるようにするための法構造を含め抜本的改革を断行することであろう。今回の研究では、ドイツの就労支援について十分の調査研究ができなかったが、その点は今後の課題とした。

参考文献

- 田畑洋一監訳(2009)『ドイツの求職者基礎保障—ハルツIVによる制度の仕組みと運用』学文社。
古瀬 徹・塩野谷祐一(1999)『先進諸国の社会保障④ ドイツ』東京大学出版会。



Erica

Tori 29

研究報告

社会保障分析 (Teil ②) —ハローワークと就労支援

3年・田畑ゼミB班：安楽昭人，桑幡雅啓，迫田佳奈，
久留千佳，分領春香，山元延介，加治佐悠衣

I 研究目的

近年不況により就職氷河期と言われており、ハローワークにおける就労支援の役割が重要視されている。ここでは、ハローワーク鹿児島の研修で学んだこと、すなわちハローワークのサービスメニュー、職業訓練制度、雇用保険、障害者における就労支援の4つの内容についてまとめた。

II 研究方法

- (1) 鹿児島市のハローワークに行き、専門の担当者から実際に話を聞く。
- (2) ハローワークの資料を読み就労支援についての理解を深める。
- (3) 書籍やインターネットを用いて情報を収集する。
- (4) 概要をまとめ、報告書にまとめる。

III 研究結果

A ハローワークが行っているサービスメニュー

職業相談・紹介、能力開発支援訓練・生活支援給付、就職支援セミナービデオセミナー、早期再就職支援コーナー求職者担当制、フリーター正規雇用支援、求人パソコンの6つがあげられる。

職業相談・紹介とは、利用者に適する職種について職員と一緒に考えることができ、希望する求人に関する条件の確認・相談、事業所への面接の申し込みや面接日時の設定も行なっている。さらに、紹介状の交付や履歴書の書き方の説明や求人・求職に関する状況の説明も行なっている。

能力開発支援訓練・生活支援給付とは、職業適性や職業能力を自己判断し、職業訓練や専修学校のコース情報など能力開発に関する応募方法の案内・相談といったことを行なうもので、その訓練期間中の生活費を支給できる場合もある。

就職支援セミナーとは、履歴書・職務経歴書の書き方、面接の受け方、自己分析などについてのセミナーで、ビデオセミナーは、ビデオにより、

履歴書の書き方や面接対策、自己分析の方法の説明を行なうものである。

早期再就職支援コーナー求職者担当制とは求職活動の方法、履歴書などの作成などについて再検討を行ない、ハローワークの職員と連携して個別援助を実施するものである。

フリーター正規雇用支援とは担当制・予約制などによる綿密な相談やトライアル雇用登録・セミナーなどの支援メニューで、40歳未満のフリーターの方への正規雇用への支援を行なっている。

なお、求人パソコンはパソコンで求人を検索することをいう。

B 職業訓練制度

職業訓練制度とは、すでに離職し現在積極的に就職活動中の方を対象にして、早期に就職できるよう、就職に必要な技能や技術を身につけるため、国、介護労働安定センター、鹿児島県が主体となって行っている職業訓練をいう。その場合、都道府県が専門学校などに委託して行う場合もある。

鹿児島県における職業訓練施設は、ポリテクセンター鹿児島・県立高等技術専門学校(始良・宮之城・吹上・鹿屋)・(財)介護労働安定センター・川内ポリテク短大・鹿児島障害者職業能力開発校・委託する民間教育訓練機関・委託事業所の7つがあげられる。

職業訓練には、ハローワークの求職者(雇用保険を受給中の者)を対象にした「離職者訓練」と雇用保険を受給できない人(パートタイマーで雇用保険に加入していなかった人や失業手当の受給が終了した人、就職が決まらないまま学校を卒業した人など)のための「基金訓練」があり、それぞれ受講できるコースが異なっている。

「離職者訓練」とは、離職者訓練は以前から設けられている制度で、再就職希望者が求職に際して武器となる知識や資格を得ることを支援しようとするものである。

「基金訓練」とは、2009年度の補正予算で導入された「緊急人材育成支援事業」の一つとして制定されたもので、最近の雇用実態からするとパートタイマーの方や新卒で就職が決まらない方など離職者訓練ではカバーしきれない立場の方が増えているという状況があり、そういった方々を支援しようという主旨から定められている。

C 雇用保険

雇用保険とは、雇用保険法に定められた雇用保険事業を行うために国が運営する保険の制度であり、1947年の失業保険法で規定された失業保険の制度は廃止され、それに代わるものとして1974年に制定された。雇用保険の保険者は国であり、ハローワークが事務を取り扱っている。

雇用保険事業には失業等給付と二事業があり、失業給付を受けるための要件は事業所を離職した場合において、加入期間等を満たし、「失業」状態にある者が給付の対象となる。ここでいう「失業」状態とは、「就職しようとする意思と、いつでも就職できる能力があるにもかかわらず職業に就くことができない」状態のことをいう。したがって、「離職」した者であっても、病気、ケガ、妊娠、出産、育児、病人の看護などにより働けない者、退職して休養を希望する者、結婚して家事に専念する者、学業に専念する者、自営業を行う者、会社の役員である者は「失業」状態ではなく、給付の対象とはならない。

再就職手当は、一定以上の残日数（1/3以上）を残して安定した職業に再就職した場合に、残日数の一定割合（残日数が所定給付日数の2/3以上ならば残日数の50%・1/3以上ならば残日数の40%）を一括で給付する制度である。早期に再就職した場合についても相当額の支給をなすことにより、再就職への自主努力を促進する制度である。

D 障害者における就労支援

障害者における就労支援として地域障害者職業センターとハローワークが協力して、就職に向けての相談、職業能力等の評価、就職前の支援から就職後の職場適応のための援助まで、個々の障害者の状況に応じた継続的なサービスを提供している。

ハローワークの紹介によって特定の労働者を短期間（最大三ヶ月）の試用期間を設けて雇用し、

企業側と労働者側が相互に適性を判断した後、両者が合意すれば本採用が決まるという制度のことをトライアル雇用という。トライアル雇用の対象者は45歳以上65歳未満の中高齢者、35歳未満の若年者、母子家庭の親、身障者、日雇い労働者・ホームレスとなっている。トライアル雇用の最大のメリットは、労働者の業務遂行能力や適性など、面接や試験だけでは全てを見るのは難しい点を、実際の業務の中で見極めた上で判断できるという点である。トライアル雇用実施期間中は労働者一人につき企業側に最長三ヶ月間、月額4万円の奨励金が支給される。

IV まとめ

今回の学外研修で初めてハローワークを訪ねたわけだが、不況を反映して、想像以上に求職者が多いということを知ったし、職業紹介だけではなく、再就職に備えての訓練やセミナーが計画的に実施されていることも分かった。そして何よりも職場環境が明るいことが印象的であった。

ハローワークが行っているサービスや活動、その他の機関とのつながりなど学ぶことができた。各担当者による丁寧な説明を聞いた後、パソコンによる検索法なども教えていただき貴重な経験をすることができた。不況が続く現代の社会において就労支援は私たちにも直接関わる問題であり、今後さらに重要となってくる。今回学び、調べたサービスメニュー、職業訓練制度、雇用保険、障害者における就労支援についてなども活用していきたいと思う。ここで学んだことは、今後の研究活動に生かしていきたいと思う。そうすることが、多忙の中、丁寧なご指導をいただいた「ハローワーク鹿児島」へのご恩に報いることだと思っている。ここで学んだことは、今後の研究活動に生かしていきたいと思う。そうすることが、多忙の中、丁寧なご指導をいただいた「ハローワーク鹿児島」へのご恩に報いることだと思っている。

参考文献

- 石橋敏郎編（2010）『社会保障論』法律文化社
田畑洋一・岩崎房子・大山朝子・山下利恵子編
著（2010）『社会福祉・社会保障』学文社

自主研究助成成果報告会・レポート

日本の幸福度ランキングーあなたは今幸せですか？

1年 安 持 はるな

1. はじめに

1月22日(土)に510教室にて社会福祉学会自主研究助成成果報告会が行われた。この報告会は去年から始まり、今回で第2回目であった。当日は風が冷たく寒い日であったが、空は快晴で布団を干してくれば良かったと思うほどの絶好の洗濯日和であった。510教室には教員・学生合わせて30名ほど集まっていた。報告を行うゼミ生や大学院生は少し緊張しているようにも見えたが、全体的に和やかな雰囲気だった。

13時から田中顕悟先生の挨拶によって報告会は始まった。田中顕悟先生は、報告会の大まかな流れを説明した後、報告者たちに激励の言葉を送っていた。報告会では5件の報告があり、壁に報告内容を書いたポスターを貼り付け、説明を受ける側が移動して話を聞くというポスターセッションという方法で行われた。

本稿では、当日の様子を振り返って報告したいと思う。

2. ポスター発表の内容

5件の報告のうち、1件は田畑ゼミ、2件は高木ゼミ、残り2件は大学院生からであった。

田畑ゼミは2つに分けて発表しており、A班はドイツの生活保障制度を調査し、詳しくまとめ、日本の制度と比較した。B班は、ハローワーク等についても詳しく調べており、日本の就労支援についてまとめた。

高木ゼミA班は、「幸福」概念について調べ、世界の幸福度ランキングを基に、特に幸福度が高いデンマークと日本を比較した。B班は、人々がどのような時に幸せを感じ、またどのような時に不幸だと感じるのかということ調べて、社会福祉実践の現状をまとめた。

次に大学院生の有村さんは、鹿児島県内の児童デイを利用している利用者にアンケート調査を行い、その実態をグループ化し、その特徴をまとめ

ていた。

もう一人の大学院生の大野さんは、ドイツにおける最低生活保障制度の特徴をあげ、日本の制度と比較し、これからの日本の課題について述べていた。

どの報告も分かりやすく説明しようとしている報告者の様子が見てとれた。少人数なので質問もしやすく、その場で先生が報告者に説明の仕方についてアドバイスする姿も見受けられた。アドバイスを受けた報告者はすぐに改善することができていた。そのような点にポスターセッションの良さが表れていたように思う。

3. 全体会、そして参加しての感想

1時間経過後、ポスター毎に発表者が説明した後、質問を受け、先生方の講評を聞くスタイルへと移行した。

すべての発表が終わった後、高木先生は総評として「それぞれのグループ、発表者、本当に中身の良い発表ができたと思う。苦しんだだけの結果は得られたのではないか。いろいろな困難の中でよくこれだけまとめられた。ここに参加した皆さんにお疲れ様と感謝を伝えたい。」と述べた。

最後に田中先生が閉会の言葉を述べ、無事に報告会は終了した。

報告会終了後、参加した学生からは「まだ勉強したことのない分野の内容だったが、先輩方に分かりやすく説明していただいたので、よく理解することができた。」という感想を聞くことができた。

自分自身も、先輩方が私たち1年にも丁寧に教えてくださって、すごうれしかった。報告の中で特におもしろいなと思ったのは、幸福度ランキングである。ちなみに日本は90位だそう。興味を持って話を聞いている時に、田中安平先生が「自殺率が幸福度ランキングにどう関係するか調べるともっと面白いかもしれない。」と発表者に

おっしゃっていた。確かに日本は自殺者が年間3万人ととても多い。自殺者が多いのはある意味幸福を感じられないからだ。少しでも幸せを感じられるなら死のうと思うこともないだろう。そうなるとうやはり自殺率は幸福度と関係していそうなので、実際に調べてみたら面白そうである。こんなふうに考え方を広げていくとよいのかと思った。

4. おわりに

1年生である私は、今回このような報告会に参加するのは初めてで、少しドキドキしていた。大学院生や3年の先輩方から間近で話を聞ける機会

はめったにないので、参加できてよかったと思う。今まで知らなかったことや考え方も多かったのでとても勉強になった。これから福祉の勉強をしていく上で、この経験を役立てていきたい。

今回参加して、私は報告会に参加する価値はともあると思った。次回からは広報を増やすなどして、参加者がもっと多くなればいいと思う。

最後に、自主研究助成に応募して研究を進めて報告して下さった学生、大学院生の皆さん、そして報告会に参加して協力して下さった学生、大学院生、教員の皆さん、本当にありがとうございました。



2010年度鹿児島国際大学社会福祉学会シンポジウム

社会福祉学科に求められるものは何か — 卒業生と、仕事や学生時代を語る —

コーディネーター報告

「絆」を感じた社会福祉学会

鹿児島国際大学教務課

原園 祐伍

2004（平成16）年3月卒業

1. はじめに

2010（平成22）年7月3日（土）に社会福祉学会シンポジウムが今年も開催された。毎年、社会福祉学科シンポジウムが開催されていることは知っていた。そして、シンポジストは各職種で活躍されている社会福祉学科の卒業生、コーディネーターは本学職員の社会福祉学科卒業生が、年の大きい方から順番にさせていただいていることも知っていた。

卒業生は皆理解しているキーワード「自己覚知」。私は人前で自分の経験談等を話すのは苦手ではないが、人の話をコーディネート・援助・促進する、ましてや、主観を入れずにコメントするなど荷が重過ぎることを自覚していた。だから、どうやって態の良い御断りをしようか、若干真剣に悩んだりしていた。その一方、出番を覚悟していたそんな時、学生時代に大変お世話になり影響を受けた崎原先生よりその依頼があり、当然、お引き受けすることとなった。

2. シンポジウム開催

夏の日差しが降り注ぐ中、雑木林に近い7号館を会場にして、蝉の鳴き声を聞きつつ100名弱の参加者とともに、社会福祉学科シンポジウムが始まった。

1) 渡邊 信浩さん

自分の経験を基に学生時代を回帰し、そこから現在までを時系列・具体的に語られた。その中で

特に印象深かったのは、サークルに必死に打ち込んだ、それがよかったということである。

入職してからこれまでの自分の様子や立場、さらに、海外へ研修された経験談を話され、最後に、自信を持つことの大切さを訴え、自信を持ってほしい、自信が持てることに気づいてほしいとの士気を高める言葉で締めくくられた。

2) 鈴木 洋介さん

4年間の大学生生活があっという間だった……そう振り返り、学生生活、就職活動、現在の仕事の様子を語られた。大学でサークル、学術文化会に熱中した。その中で、先輩から就職活動の話聞いて、自分も意識を持つようになり、サークル等もこなしながら教職・資格取得に力を注いだことなど、人との繋がり的重要性を含めて体験談が話された。現在では、大学で学んだ「傾聴」が大切であると感じた場面や仕事の業種では異種となる社会福祉士を取得、自己啓発をしながら行動力を伴っている様子を軽快な口調で話された。

私が妙に印象に残っているのは、電話で仕事のやりとりをする父親をみて感銘を受けた出来事の話で、その情景が頭の中で思い浮かび、話し手の感性の鋭さを感じた一瞬であった。

最後に、鹿児島国際大学の学生生活に感謝しているとの、とにかく本学に関係する学生・教員・職員全員にとって色んな意味で最高といえようコメントで締めくくられた。

3) 永池 富和さん

はじめに、大学受験での失敗談から受験失敗で引き起こったその時の状況について、抑揚をつけた話口調で話された。

大学受験で浪人を経験したこと、おいてけぼりと感じるようになった友人関係、自分の価値観についての葛藤など迷走した時期の話から、社会福祉学科とは無縁の建築士を目指していたことなど具体的な体験を述べられた。そして、精神保健福祉士との出会いを通じ、少しずつ自分をみつめながら立ちあがっていく生きざまを赤裸々に話され、自分の思い悩んだ経験から人の痛みを察せられるようになった様子はその話される姿からからひしひしと感じられた。

弱さを語れることが強い、とのまっすぐな発言に感化されながら最後のシンポジストの話が終了した。

3. まとめ

就職難のこの時代、それだけでなく学生は希望する就職先に就こうと躍起になって努力している。「少しでも勉強して内諾をとるぞ!」と一人で考えていて。保護者の方や周囲の友達と話をしながら「就職できるようにがんばって!」。大学側からも「授業に出席しなさい!」と再三言われる。

そのサイクルを繰り返し、いざ、就職活動をしても、えっ!! …求人がない…。

これが現状で、追いつめられるばかりで心休める余裕がないのが、学生の本音のように思う。

全学生がこのように思っているとは考えていないが、3名のシンポジストの話を聞いて、サークル等自分の特技・趣味に必死に打ち込むこと、あるいは迷走して必死に悩んだそのこと自体が就職に役立つこともあるとの発言に幾分か肩の力が抜ける心地よさが残ったのではないかと。

シンポジウムを通して、私自身強く感じたのは、社会福祉学科で学んだこと、例えば、発表の中でもでてきた「受容」「傾聴」というキーワードが、福祉の分野だけでなく、社会全体で必要不可欠なことであり、その重要性については、年代問わず卒業生の間で共感でき、生き続けているということである。本学での「学び」が、社会福祉学科在校生・卒業生を共通認識で結んでいることは、ひとつの絆であると言えるのではないかと。

最後に、ご多忙の中、貴重なお時間をいただきました3名のシンポジストの方々には、心から感謝いたします。

学生を含めて参加者に有意義な時間を創っていただき、率直に今後につながるものであったと感じております。



シンポジスト報告

自分を信じること=自信

社会福祉法人 明激会 南さつま子どもの家

渡邊 信浩

2001(平成13)年3月卒業

1. はじめに

現在の仕事や学生時代を振り返りながら話をしますが、「何を求められるのか?」は、皆さんが自分の現在の学生生活と将来の展望に照らし合わせて考えていただくものだと思います。それは、皆さん1人ひとり違うように考え方も違えば、受け止め方も違うため、「これが求められていることではないのか。」と探ることで自分のものになると思います。与えられるものだけではなく、そこを出発点として先にあるものを見つけてみてください。

2. 現在の仕事

私は現在、南さつま市にある児童養護施設「南さつま子どもの家」で児童指導員として働いています。子ども43名が生活し、職員は約20名が働いています。大学卒業後、勤めて10年になります。肩書きとしては、副主任と家庭支援専門員で処遇全体、処遇というのは子どもを支援するというところで、支援全体の総括をしています。その前は、グループに属して担当する子どもがいたので、子どもとの関わりが多かったのですが、今は、担当する子どもはいなくて、特に関わりが困難な子どもの対応や職員のスーパービジョンなど処遇全体が運営されるように、まだまだ模索の段階ですが、日々やっています。

勤めてから3年目までは、とにかくがむしゃらで、やらなければならないことをこなすことに必死でした。4年目になり施設のこともだいたい分かってくると、そのなかに矛盾や個の力ではどうしようもないと思うことも出てきて仕事のことで悩むことも多くなりました。そんなとき、イギリス研修に行き、そこで自分の視野が狭かったことを痛感し、また、あらためて頑張っていこうと思えるきっかけとなりました。

イギリス研修は、ちょうどこの時、テロ事件が勃発しているときに、出発直前まで中止になるかもしれない状況で、同僚からも「本当に行くの?」と言われながら出発しましたが、無事に帰国できました。本当に無事に帰国できたのでして、帰国前のロンドン観光当日に滞在していたホテルの近くで地下鉄爆破テロがあり、そのときは何が起きたのかほとんど分からないまま強制待機でしたので、正直怖かったです。

研修は、日本より10年先を行くと言われる児童福祉の現状視察でした。まだ、日本の児童福祉も分かっておらず、日本の児童福祉をどうにかしなければならぬと言われている他の方々と比べて、私にはスケールの大き過ぎる内容でした。

宿泊はホームステイで、小学校の校長先生をされていたビル氏にお世話になりました。キッチンを使い方や洗濯も洗濯機をお借りして使い方を教えてもらわなくてはならなかったです。研修よりもホームステイが大変だったかもしれません。

そんな研修を終えるころ、私は自分を振り返ってみて目の前のことしか考えていなく、「自分に何ができているのか?」、「まだあるかもしれないのにそれなのに限界を感じているのか」と、周りを見渡せばやれることはもっとあるはずだと自分を奮い立たせる気持ちになりました。帰国してから「行って本当によかったな」と思いました。それをきっかけに、社会福祉士資格取得後、忙しさを理由に全く活動していなかった社会福祉士会の研修会などに参加するようになりました。私にとってはいろいろなきっかけを与えてくれました。

昨年の9月には資生堂財団主催のアメリカ研修メンバーにも選ばれアリゾナ州とマサチューセッツ州に2週間行ってきました。虐待予防や脳とトラウマの研究や治療の仕方を学びました。

3. 児童養護施設で働こうと思ったきっかけ

それは、大学3年の施設実習でした。私は、東市来にある「友愛学園」で実習をさせていただきました。就職をどうしようかと考えているとき、「児童養護施設のことの何が分かったのだろうか?」、「ほんの表面を見てきただけなんだろうな」と考えるようになり、子どもたちの笑顔が浮かぶようになりました。実習後、また子どもたちとボランティアで屋久島までキャンプに行ったり夏祭りに行く機会があり、さらに関心が高まり、やってみたいと気持ちは強くなりました。

4年の夏頃に福祉施設合同のガイダンス参加し、秋に当園の募集があり面接とレポートの採用試験を受けました。1年間は正規職員ではなく非常勤扱い採用が条件でしたが、私はやってみなかったの、あまり後のことは考えずに決心しました。施設長にあとから聞いたのですが、その時は、男性職員の募集はしておらず、採用するか迷われたそうです。非常勤だと、仕事は他の同僚と変わりませんが、給料は日当計算ですので、月10万程度だったと思います。非常勤での採用でしたので施設長も心配だったようです。

今、考えると本当に先の見通しは立てずに「とにかくやってみよう」という思いだけで飛び込んでいったので無謀だったなと思います。

4. 実習指導担当者として

私は、実習指導も担当しています。鹿児島国際大学の社会福祉学科と児童学科の学生の実習指導も毎年させていただいています。実習が最後までスムーズに進むように、やり遂げられるように、後継者の育成に少しでも貢献できたら。それが日本の福祉のためになるなら。と思うようになったのは海外研修で日本の福祉がまだまだであると思ったからだと思います。

そして、施設の子どもたちの生活がより良くなるためにです。学生と子どもが関わりを通して「私もこんなお兄さん、お姉さんになりたい」、「私も大学を目指したい」と良いモデル(手本)を見せることができます。また、学生を直接指導する職員にとっても人に教えるという経験は、自身のスキルアップにもなります。しかし、正直、子どもや日常業務だけでも大変なのにと、職員もきち

んと指導しなければならないという「責任感」や「不安・プレッシャー」があります。担当職員と実習生のパイプ役が私の役目ですので、まだまだ上手いかわないですが、協力をいただきながら務めています。

5. 私の学生時代

講義には出席していましたが、単位のことばかり考え、講義内容はそれほど考えず、勉強に打ち込むことはありませんでした。今考えると、もったいないことをしたなど、先生からもっと話を聞いたのにと後悔しています。

私が打ち込んでいたものは、中学時代ソフトテニスをしていたので硬式テニス部に入りました。福岡に試合で遠征もあり、他にもそれなりに費用がかかるため、自分で好きなことをやる分にはアルバイトをやっていました。コンビニで週5日程度はやっていたと思います。テニス部はOBとのつながりも強く上下関係がしっかりしており、人との付き合い方のようなものはだいぶ鍛えられたと思います。

勉強の方は、就職と国家試験を考えて、こつこつやるようにやるようにして、テニス部を引退してから本格的に始めました。始めたと言っても求人があるかも分からないものを希望していたので、せめて大学で学んだのだからと、社会福祉士は合格しなければと思い、試験勉強をしながら求人が来ないか待っていました。

就職は、非常勤でしたがやってみたい仕事にとりあえず決まり、国家試験も合格することができ、両親に大学まで行かせてもらった面目は立ったかなと思っています。大学入学時は、何を勉強したいかはなく、大学で探すつもりでした。結果は残せましたが本当に勉強をしていたかは、まだ足りなかったと思っていますし、就職活動も手本になるようなことはありません。

ただ、やると決めたことは簡単には諦めず一生懸命にやっていた自信はあります。採用の理由を聞いたことがあるのですが、「熱意が感じられたから」と言われ、その時は、必死だったんだろうなと思います。

6. 自信があることにどのように気付かせるか

子どもにどのように自信を持たせるか?というよりかどのように自分の中に自信があることに気付かせるかは仕事での課題でもあります。

虐待やひどいネグレクトなど家庭や両親の問題、様々な理由で家族と離れて生活する子どもは、「なぜ自分が」という思いがあると思います。あきらめやすく、自尊感情が低く、自信をもてない子どもが多くいます。

「みなさん、自信はありますか?」ない方は、「今シンポジウムに参加していること」、「学生であること」それは、自信をもってよいことだと思います。自信を持てることがあるのに、それに気付くことが難しいのかもしれませんが。自信のない人には、自信を持てることに気付かせてあげたり、考え方を少し変えることで、誰でも自信を持つことができるのではないのでしょうか。



シンポジスト報告

学生時代と就職活動を振り返って

鹿児島銀行

鈴木 洋介

2005(平成17)年3月卒業

1. はじめに一あつという間の4年間

今回シンポジウムで話をさせて頂くにあたって、自分なりに学生生活と就職活動を振り返ってみました。振り返るとあつという間の4年間でしたが、私の経験が少しでも皆さんの参考になればと思いつつ、お話をさせて頂きます。

2. 学生生活

1) 授業に出る以外、何をしたらよいか分からず

私は大学受験に失敗し、一浪して鹿児島国際大学に入学しました。今思えば、受験前にパソコンに凝り過ぎていたかもしれません。当時のパソコンは今から比べるとただの箱でしたが、iPhoneのようなデジタル機器が大好きな私にとっては良い遊び道具でした。特に何かするという訳ではないのですが、ネットをしたり、ゲームしてあつと言う間に時間が過ぎていました。さて1年越しで迎えた入学式、大学に入学はしてみたものの「明確な目標」は持っていませんでしたので授業に出る以外に何をしたら良いのか分からず途方に暮れていました。

2) 席が隣で知り合った友人と入った手話同好会

そんな中、席が隣りだった縁で知り合った友人と手話同好会の活動を見に行きました。当時の手話同好会は毎週行う手話練習の他、遊音祭で発表する手話コーラスの練習や聴導犬協会主催のドッグフェスティバルでのボランティア等を中心として活動しており、丁度その日は手話練習の日でした。先輩方の楽しそうな様子を見て入部を決めた私(と友人)は手話同好会の活動を通して手話を実際に使う楽しさを感じ、聴覚障害を持つ方との関わりやボランティアから、福祉を身近なものとして考えるようになりました。

手話は実際に使うととても楽しいものです。静

かな授業中、声を出せば注意されてしまうような状況でも、手話を使えば、周囲に気づかれず話ができます。ちょっとしたスパイ気分です。もっとも、そうやって会話をする為には2人とも手話を知っている必要がありますが。

そんな風にサークル活動や飲み会があまりに楽しかった私は、やがて授業以外の時間は部室で過ごすようになり、大学にはサークルに行く為に通っていました。したがって殆ど必修科目だけを履修していて、卒業後のことはイメージできていませんでした。しかし、先輩方が卒業される頃になると、先輩の就職先や就職活動について話を聞き、就職について少しずつ考えるようになりました。その時に決めたのが「卒業後の選択肢を広げる為に鹿児島国際大学で取れる資格はできるだけ取ろう」ということでした。シラバスを熟読し、教授や先輩方の話を参考にした結果、社会福祉士資格と教員免許の取得を目標にしました。

3) 過密スケジュールの中で資格取得に向けて

2年生になり、手話同好会の先輩から、学友会の学術文化会に入らないかと誘われました。学術文化会は、文系サークルの活動を取りまとめる組織で、学術文化発表週間の企画・運営、準備を行い、その他の学校行事でも運営の手伝いを行います。誘われた当初は「そんなに沢山の行事に参加しながら、勉強できるだろうか。そもそも自分に勤まるだろうか」と思いましたが、手話同好会に入って大勢の仲間と関わることが楽しかった私は、もっと沢山の人と関われば、もっと楽しくないかと思いきや、学術文化会に入ることを決めました。学術文化会の活動は予想通り忙しいものですが、活動を通して手話同好会以外のサークルの人とも知り合う事ができました。

この時期サークル活動に、勉強に忙しい日々が

続き「3年生でも選択できるけど、2年生のうちに受けておくか」と余裕を持って受けた単位ほど落とし「この次は落とせないぞ!!」と思った単位はうまく行ったりしながら、必死になって勉強していたことも今となってはいい思い出です。人間というのは不思議なもので、資格を取ろうと決意した途端に今度は何が何でもその資格を取りたいと思うようになります。そのお陰か目標を決めてからは、それまで以上に授業に集中するようになりました。

3年生、4年生と卒業が近づくと、人によっては単位を取り終え、授業に来ることが減りますが、3年生で社会福祉実習、4年生に教育実習を控えていた私は、むしろ4年生が近づくほどに忙しくなりました。単位を落とせない緊張感とあいまって、ややハイテンションな日々を送っていましたが、その緊張感のお陰か、最終的に社会福祉士受験資格と教員免許（(中学校教諭1種(社会), 高等学校教諭1種(公民, 福祉), 養護学校教諭1種, 司書教諭) 資格を取得することができました。

3. 就職活動

1) 自分は何をしたいのだろう

3年生になり、いよいよ就職活動という時期になって、私はもう一度「自分は何をしたいのだろう」と考えました。まず思ったのは「人と関わる仕事がしたい」ということでした。社会福祉実習、教育実習を通して、それぞれの職場を体験したからこそ「福祉社会学部で学んだ事を生かしながら、一般の企業で働きたい」そう思いました。

2) 就活体験談を読む中で自分と向き合うことから

就職活動開始にあたってまず私は進路支援センターに行きました。先輩方の就活体験談を見て、就職に対するイメージを作り、鹿児島国際大学にどのような求人があるのか調べました。社会福祉学科の就職先は、福祉施設、養護学校等が主ですが、鹿児島国際大学の就職先は多岐に渡ります。進路支援センターにある体験談は、それぞれの就職活動を切り取った“伝記”のようで、その時先輩が感じた緊張が直に伝わってきました。就職活動でその人が何を感じ、何をしたかがとても参考

になります。

先輩の就職先を見て、色々な体験談を読んだ結果、私は鹿児島銀行に就職したいと思いました。理由は「沢山の人と関わり、人の役に立てる仕事だから」今思えば、そこには父の影響もあったように思います。金融機関に勤めていた父は職業柄相談を受けることが多く、いつの記憶か定かではありませんか、電話でお客さんの相談に乗る父を非常に頼もしく思ったことを覚えています。そんな父の姿を見ていたことも私の志望動機の1つになりました。

4) 就職活動-就活体験談を手がかりにして

就職希望先は決まりました。ここからいよいよ就職活動です。私が3年生だった当時、福祉施設に就職する学生は4年生の秋に活動を始めていましたが、企業の求人は3年生の冬から始まるころが多く、他の人よりも早く活動を始める必要がありました。私は生来、のんびりした気質で、先手を打つタイプではありませんが、先述した単位を落とせない緊張感の中で就職活動も後手に回らず、3年生の冬から活動することができました。

銀行の就職試験を受けるにあたって、まず履歴書とエントリーシートを作成しました。精一杯その時々のお思いをぶつけて書いたそれらを進路支援センターの方や両親に見てもらい、表現におかしなところがないか、伝えたいことが伝わるかアドバイスを受けました。

その後、幾度かの面接と筆記試験を経て内定を頂いたわけですが、面接にあたっては進路支援センターで模擬面接をして頂き、筆記試験対策には先輩の体験談をもとに勉強分野を絞り込みました。私も内定後に書きましたが、先輩たちが内定直後に書かれた体験談は鮮度が高く、何より実感もこもっています。皆さんもぜひ一度、興味のある就職先の体験談を読んでみてください。

4. 現在の仕事

1) 鹿屋支店、星ヶ峰支店勤務を経てシステム部へ
さて、社会人になって6年目となる私は、鹿児島銀行鹿屋支店、星ヶ峰支店勤務を経て、現在はシステム部に所属しています。銀行員としてスタートを切った鹿屋支店では、窓口の後ろで伝票

を整理することから教わり、預金業務、個人融資業務を学びました。面接では、社会福祉学部で学んだことを銀行で生かします！と言いながら、実際学んだことが社会で通じるか不安もありましたが、相手に興味を持ち、相手の役に立ちたいと思いながら、話を聞く技術は社会福祉学科でいう“傾聴”そのものであり、大学で学んだことは大いに役に立ちました。

現在、システム部では銀行機能に関する様々なシステムに関わっています。もともとデジタル機器が好きだった私にとって、生活の一部だったパソコンの知識が、今の銀行勤務に役に立っていると思うとなんだか不思議な気がします。システム部では営業店での勤務経験を生かしながら業務を行っていますが、システムの知識も要求される為、仕事と並行してIT系の資格(ITパスポート、基本情報技術者)を取得しています。またしても勉強の日々です。

2) 改めて資格の持つ意味について

先程在学中にとった資格の話をしました。社会福祉士については在学中に合格出来ず、受験資格を取っただけでした。しかし、卒業後に資格の大切さを再認識した私は卒業してからどうしてもこの資格を取りたくなりました。社会福祉士は業務独占ではなく名称独占資格ですが、福祉に関わる公的資格では最上位資格であり、資格を取得するためには一定の科目の履修と国家試験への合格、そして登録が必要です。ご存知のとおり、日本は超高齢化社会であり、福祉は世間的にも非常に注目されています。高齢化によって、さまざまな分野で福祉的な考えが必要になっており、今の世の中では福祉以外の職種でも、社会福祉士資格を持つメリットは大きいと思います。

私自身、社会に出てからそれを痛感し、社会福祉学科で学んだ4年間を形に残したいという思いもあって、毎年、社会福祉士試験を受験してきました。今回、このシンポジウムの依頼を受けてから、今年こそは試験に合格し、この場で発表したいと一念発起し、なんとか合格することができました。それもひとえにこの様な機会を下さった先生方、そして皆さんのお陰だと思っています。ありがとうございました。

繰り返えしになりますが、今の社会で福祉はとても身近です。普通の家庭であっても、年をとれば介護保険を使います。そんな世の中で、社会福祉士資格はプラスにはなっても、マイナスにはならないと思います。社会福祉学科に入学された皆さんはぜひ、社会福祉士資格、もしくは受験資格を取られてください。社会に出てからも、受験するチャンスはあります。

5. まとめ—鹿児島国際大学での学生生活に感謝

学生時代と就職してから思ったことをお話させていただきましたが、卒業して6年が立ち、今思うのは、大学生活に対する感謝です。一浪して入学したときには思いもしなかったことですが、鹿児島国際大学で手話同好会に入り、学術文化会で交流を広げ、社会福祉を学び、教職課程を選択しなければ、今の自分はいません。一浪した結果、素敵な友人や先輩方、教授と出会い、様々な授業に興味を持ち、そこで学んだ知識と経験を生かしたことで今の私があると思います。

あの時、違う道を選んでいたら、こんなにいい友人をもち、忙しくも楽しい日々を過ごせたかと考えると、これは予想ですが、おそらく過ごせていなかったと思います。

人生何が幸いするかわかりません。鹿児島国際大学で過ごされる期間を楽しみ、今しかできないことをしてください。社会福祉学科を選択された皆さんには、社会福祉の道は勿論のこと、一般企業への道も開かれています。

最後に皆さんが就職について考える時、今回の私の話が少しでもお役に立てれば幸いです。本日はありがとうございました。

シンポジスト報告

人生のターニングポイント

医療法人 全隆会 指宿竹元病院

永池 富和

2003(平成15)年3月卒業

1. はじめに

現在、精神保健福祉士としてアルコール依存症の方やその家族の支援を行っている私が、大学時代を振り返るということは、「自分とは何ぞや」「人を支援することとは何か」「回復とは何か」を考えるうえで非常に大きな過程でも課題でもあり、今回のシンポジストでは大きな考える機会を得ることが出来ました。また、大学時代の自分がないと「今の自分」はあるはずもなく、アルコール依存症や仲間との出会いについてもきつとなかったと考えられます。現在、自分を肯定出来る生き方を学ばせてくれた大学や、支えてくれた仲間そして、大学入学の機会を与えてくれた両親に改めて心から感謝したい。

2. 大学入学までの葛藤

ごくごく普通の家庭に生まれた私は、小学校、中学校とある程度、勉強、スポーツとも出来る方で友人も多いほうでした。父親とはいうと、仕事の忙しい中、キャッチボールをしてくれたり小学校卒業まで宿題に付き合ってくれたりと非常に自分の良き理解者で尊敬出来る存在であったことを記憶しております。母親についてもやさしく何事にも真面目で運動会等でも必ず参加してくれる存在でありました。両親には「勉強をなさい」等言われたこともなく、自分が当時、勉強をしたのは、「自分の為などではなく、両親に喜んでほしい」と思う気持ちからだったのではないかと考えます。

私が中学校時、父親は「夢がある」と話し、当時の会社員を辞め、自営業の仕事を始めました。自営業という先が見えない仕事ではありましたが、元来より真面目で家族を大事にしてきた父は、必死に私たち子供を育てる為、働いてくれました。私も「父の期待」により一層応えたいと

思ったことを記憶しております。

しかし、「期待に応えることの想い」とは裏腹に高校受験では第一志望の学校には入学することは出来ず、大学受験でも2年間建築関係の大学を志望し、浪人することとなりました。今、考えると大学受験で浪人するきっかけとなった「建築学科」に何故こだわったのか答えがでてきません。つまり、自分のしたいことについてはイメージ出来ておらず、ただ漠然としており、「自分と他人を比べること」ばかりだったように思えます。必死な割には、自分のことが見えておらず、自分が苦しんだのは当然の結果であると思います。

3. 大学生活と自分

2年間のブランクをおいて、鹿児島国際大学の社会福祉学科に入学することになりました。この2年間のブランクは当時の私においてとても大きな壁であったように思えます。まず、高校時代に付き合っていた友人達は、先に大学入学したり、就職したりとそれぞれ新たな友人を作っていました。そして自動車の免許を取得していたり、バイトを行っていたりと非常に大人になっているように思い、さびしさを感じたことを記憶しております。また、「周りからどのように思われているのだろう」という思いもあり、当時はとても窮屈でありました。私自身も「2年間苦労したから他の人達とは違う」というような想いがあったので孤立するように自身で行動し、自己のアイデンティティのバランスをコントロールしてはいないかと思えます。しかし、アルバイトや学生生活の中でしだいに友人も増え、学生生活もそんなに悪いものではなくなっていました。そんな学生生活の中、「自分は何故、生きているのだろう」と深く考えるようになりました。

そんな折、大学の授業の中で「精神保健福祉士」

という資格が目につきました。福祉について理解の浅い自分は「精神」というキーワードが支援ということではなく「自己の生き方の答え」を見つけていることが出来る、自分をカウンセリングしてくれるのではないかと考え、大学4年時からは精神保健福祉士コースを希望しました。

4. 資格合格までの道程

4年時より精神保健福祉士コースへ進むことになった私は決してそのコースにおいて勉強の出来る方ではありませんでした。しかも、夏休みには精神科の実習が1ヶ月もあり、非常に不安が強かったように思えます。しかし、メンタルヘルスのスペシャリストでもある先生方から指導をいただき、同じ悩みを持つ仲間に出会うことが出来、「他の人とは違う」という意識は少しずつ変化してきました。どのように変化したのかというと、「素直に生きる感覚」といいますか「想いを伝えても良いんだ」という感触だと思います。周りのことを意識し過ぎるとこのようなことは不可能となりますし、逆に受け入れてもらえる仲間がいないと単に我がままとも捉えられてしまいます。勇気を持って前へ進んでいく努力をしました。

語り合える温かい仲間のなか、国家試験に向けて頑張ることが出来ました。しかし、例年11月に行われる模擬試験ではなんと全国最下位という夢にも思わなかった結果が返ってきました。(現在は模擬試験の試験監督も行ってますが・)決して試験当日、体調を崩していたわけではなく、ただ単に自分の実力不足でした。その結果を真摯に受け入れ、それからさらに仲間と必死になって勉強を行いました。アルバイトもしていた自分は、どんなに忙しい1日であっても、少しでも問題集を開くという習慣を付け、仲間と問題を出し合うというようなことを試験当日まで行いました。

そのせいか試験当日は、自信に充ち溢れていました。大事な試験の中でこのような気持ちにさせられたのは初めての経験だったと思います。大事な試験と感ずることが出来たのも日々の積み重ねがあったからだと考えます。その結果、精神保健福祉士、社会福祉士とも合格することが出来ました。現在の病院で働く中で、当時一緒に頑張った

仲間は今でも大切な存在です。

5. アルコール依存症者との出会い

平成15年4月より現在の職場でもある指宿竹元病院に勤務することとなりました。入社当時は同法人内にある精神障害者社会復帰施設でもある

生活訓練施設に3年間勤務し、4年目から病院に異動となりました。

指宿竹元病院では、アルコール専門病棟を所有しております。アルコール依存症という病は、依存症の中では物質依存で、簡単に言いますと「お酒をやめたくてもやめれない」というコントロール障害です。結果的に脳出血や前頭葉萎縮などの身体症状や離脱症状による幻覚、妄想などの精神症状、飲酒運転や離婚などの社会問題を呈してしまいます。このように非常に苦しい病気ですが、なかなか世間一般へは浸透しておらず、「ただの飲み過ぎだ」とか「根性がない為やめれない」等の間違った認識で、治療導入することが出来ず、自殺に至る経緯も少なくありません。もちろん認識だけでなく本人の「否認＝アルコール依存症ではない」も原因となっている場合もあります。

アルコール依存症の治療といえますと、基本的には同じ回復しようとする仲間(集団)の中で行います。断酒する為にはまず、酒によって失ったものの苦しさやこれからどのように生きていくのかを語り合います。地域における代表的なものとしてAA(アルコールリクス・アノニマスの略。直訳すると無名のアルコール依存症者達)や断酒会などがあげられます。AAには、12のステップというものがあり、その12ステップには霊的成長が述べられております。

このようにアルコール依存症の方やその家族の回復支援(生活支援)を行う中で、私も自分という存在をしばしば振り返ります。自分自身は生きづらさを抱えていないか、回復の過程を歩んでいるのかと悩みます。父親、母親、妻、子ども、会社の同僚等との関係をフィードバックし「自己とは何ぞや」を自問自答している毎日です。アルコール依存症の方との出会いによって自己をよく振り返ることが出来るようになりました。また、回復についてはやはり仲間と自己の弱さを伝えることの出来る勇気(強さ)が必要であることも知

ることが出来ました。すべては、アルコール依存症の方の回復過程から学ばせていただきました。

6. 大学時代を「今」振り返って

現在のソーシャルワークという業務に就いて大学時代を振り返り、何を学ぶべきか考えてみると一つ目に「感性」ではないかと考えます。単に生活スキル等を高める理論性だけでなく、感情的に物事を捉えられるアンテナを持つことではないかと思えます。アンテナを持つには「自己との対峙」が必要となってきます。悩み、考える、不器用ながらも生きるという姿勢ではないかと考えております。

二つ目にやはり「仲間」です。語り合える仲間、自己を認めてくれ、共に頑張っていく仲間が今後の自分を支えてくれます。

三つ目に「感謝」です。当たり前のように大学へ行かせてくれている親や語り合える友人に対し、当たり前のことへの感謝です。

大学時代は、学生から就職に至る大きな人生のターニングポイントであります。すべては「出会い」からスタートしていきます。その意味でも自己自身をゆっくり考え、希望や悩みを語りあうことが、今後の大きな花を咲かせる蕾になるのではないのでしょうか。



社会福祉学会シンポジウム参加記

自分の夢に向け、考えてみる

3年分領春佳

1. はじめに

7月3日に卒業生を招き、「社会福祉学科の求められるものは何か」というシンポジウムが開かれました。卒業生として来てくださったのは、コーディネーターとして教務課の原園祐伍さん、シンポジストとして児童養護施設「南さつま子どもの家」で勤めている渡邊信浩さん、指宿竹元病院の精神保健福祉士を勤めている永池富和さん、鹿児島銀行に勤めている鈴木洋介さんの4名です。

2. 先輩の話から学んだこと

渡邊さんの話では、児童養護施設での実習が児童養護施設の職員を目指すきっかけになっていたので、実習での体験が今後の人生に深く関わっていくのだと感じました。改めて今年の夏休みにある実習をただ単にこなすのではなく、自分の将来への進路の幅を広げられる機会ととらえ、意欲的に取り組んでいきたいと思います。

永池さんの話では、病院でのソーシャルワーカーの役割、体験談などから色々なことを学びました。1番印象的だったのは、断酒会についてです。

アルコール依存症者がアルコールを止めることができないのには、過去のトラウマやストレスを自分の中で制御できないなどという簡単には解決できない理由があるからです。そのことを避けるために断酒会の仲間たちがお互いに支えながら助け合っています。アルコール依存症は確実に「治る」ということを断言できるものではなく、再発する可能性があるため「回復」という言い方をするそうです。なので、常に気を緩めてはならず、仲間との支えあい、励ましあいがとても重要なのだそうです。

このことはアルコール依存症者だけに限らず、私たちにもとても大切なことだと思いました。生活をする上で人は一人では生きていけませ

ん。仲間がいるから心理的に安心、心強さ、この人も一緒にいるから頑張れるというやる気につながります。薬での治療だけではなく、そういう互いに支え合う機会は精神面にとっても良い効果があるんだなと思いました。

鈴木さんの話では、資格の大切さについて感じました。将来の明確な目標が見つからないなら見つからないなりに、将来のための選択肢を広げるために大学で取得できる資格は取っておくことの意味を知りました。たとえ福祉系の職業に就かなくても社会福祉士の資格を取得するために身につけた知識は様々な形で活用でき、人とコミュニケーションをとる際に受容や傾聴などを活かすことができます。

3. シンポを通じて考えさせられたこと

シンポジウムでの質疑応答では自己実現とはどうすれば達成するのか？という質問がありました。卒業生の方々の考えによると、自己実現を考える前にまず自分の目標が見えなければならないということでした。

私は最近まで自分が将来何になりたいという目標が曖昧なまま、就職についてもあまり真剣に考えていませんでした。今回このシンポジウムに参加して、自分自身についてももう1度深く考えさせられました。自分を見つめなおして、高校のころ、私には無理だろうと諦めていた職業を、実は諦めきれていないことに気付くことができました。その職業に就くのはとても大変なことだけれど、なりたいと確信しました。目標が見えたことで、最近までの生活では感じる事がなかった夢へ向けて努力するやる気を得ることができました。

今回このシンポジウムに参加して積極的に行動する大切さ、あきらめない気持ち、また人々の互いに助け合う心が大切だなと改めて思いました。

シンポジウム報告を読んで

ポールの言う「あるがまま」と私

1年 梶原智代

1. はじめに

突然ですが、私はシンポには参加していません。当日の午前中に携帯電話が壊れてしまったので、急遽新しい携帯電話に買い替えなければならなかったからです。携帯電話は一人暮らしの私にとって、遠くに住んでいる家族や友人と繋がる唯一の手段でもありますから、シンポへの参加よりそちらを優先させてしまいました。

しかし、参加していないのにも関わらずシンポジウムの感想も書くことになりました。新入生ゼミナールの時に社会福祉学会の運営委員になり、運営委員会でこの『ゆうかり』の編集委員になったからです。そういった経緯で今回、この文章を書くことになりました。

2. シンポジウムの記録を読んで何を思ったか

シンポジストの方々のお話した内容は「新しい携帯電話を手に入れることよりも、シンポに参加したかった!」と思って後悔してしまうくらい、共感できる部分があり、興味深いものでした。

具体的に例を挙げると、永池さんが浪人して大学に入学したという点です。そのため2年間のブランクが生じてしまい、大学に入学すると永池さんは1年生、しかし高校時代の同級生がすでに大学3年生や社会人になっていて、みんなが先に大人になっていることに寂しさを感じたそうなのですが、私も入学した時、全く同じことを思っていました。

なぜなら、私も大学入学前に2年間のブランクがあったからです。高校卒業後、専門学校に入学したのはいいものの目標を見失い、中退し、本学へ入学した経緯があったので、みんなが先に大人になっていることの寂しさは勿論ですが、また目標を見失ってしまうのではないかという不安も抱えていました。

3. 事例 ～私の場合～

そんな風な気持ちを抱えつつスタートした学生生活でしたが、入学式後の情報処理センターの説明会では、クラスごとに座っていたので話しかけやすそうな人に話しかけると友達になりました。話す中で、元々写真に興味があったのですが、その友達も写真部に興味を持っていたので、一緒に写真部に入部しました。その流れで、写真部の先輩方とも交流が生まれました。

意識的に何かをして友達を作ったかとかではなく、ただ素でしゃべっただけです。素でしゃべって友達になれた人もいれば、素を出したことで引いてしまう人も中にはいます。しかし、引いてしまう人たちがいる中で、今友達でいてくれる人たちもいて、本当に心が広くて優しい人たちなんだと思います。

よく考えてみると、渡邊さんや鈴木さんもそうやって慣れてない環境の中で自然と友達を作っていたのかもしれませんが。その中で自然と、迷ったり、自問自答したり、そんな風にあるがままに行動することで自分の進む道が出来てくるものなのだと思います。ビートルズの“The Long And Winding Road”で締めるアルバム『LET IT BE』ってそういうことなのかもしれません。(尊敬する Paul McCartney に一歩近づけた…?)

4. おわりに

私は幸運なことに人間関係においては恵まれています。しかし実を言うと1年弱の大学生活の中でまた専門学校を辞めた時と似たような迷いが生まれていました。ですが迷いを無理に無くそうとするのではなく、今の自分があるがまま受け入れてあげること…は難しいにしても、自分の受け入れられない部分(中退したこと、目標を定められないことなど)も「それも自分だ」と認めてやりたいです。そして卒業できればと思います。

今回先輩方のシンポジウムの記録を読んでみて、大学生活を豊かなものにするためには何が大切なのか、それは人間関係の中で見えてきたり学んでいくのだと改めて学ぶことができました。

シンポジウム参加記

「大学院に学んで一修了者は語る」を聴いて思うこと

3年 久留千佳

1. はじめに

2011年1月22日、鹿児島国際大学社会福祉学会主催のシンポジウムが開催された。これは本学大学院博士後期課程修了の博士号取得者3名が「大学院に学んで一修了者は語る」と題し、研究の意義や博士号取得に至る道のりを報告するもので、大学院福祉社会学研究科創設10周年を記念して企画されたものである。

大学院の古瀬徹先生の開会のあいさつに続き、進行役の田畑洋一研究科長が博士号取得の流れや審査内容、また博士号の重みなどについて話され、引き続き3名による各報告が行われた。

2. 大山先生の報告から

まず大山朝子先生（本学非常勤講師）が報告された。研究タイトルは「方面委員制度とエルバーフェルト制度の連繋に関する研究—大阪府方面委員制度源流考論」で、研究内容として大阪方面委員制度がエルバーフェルト制度を参考としたという言説を検討、方面委員制度の源流を考究したものであった。

大山先生はもともと福祉とは違う道を歩まれ、病院の事務員として勤務された時にこの職に生かすための資格はないかと思っていた矢先、社会福祉士という存在を知り福祉の道へと歩まれたそうである。大山先生は大学を卒業してからしばらくして、社会福祉学科3年に編入学し、社会福祉を学ぶようになったそうである。

以後、このテーマに10年あまりをかけて取り組んできたが、長い道のりを苦戦しながら論文完成に至った時、達成感よりも安堵感が大きかったという言葉から忙しい日々を過ごされてきたことが伝わってきた。研究を続けることで自分の弱さと向き合うことや普段見過ごしている周囲の支えに気付かされたというお話を聴き、努力を積み上げながら研究を最後まで行うことは人間的にも成長することにつながっていくのだと思った。

3. 田原先生の報告から

次に田原美香先生（佐賀大学研究員）が報告された。田原美香先生の研究タイトルは「介護予防を意図した地域リハビリテーションに関する研究—地域看護との融合性—」である。研究内容はリハビリテーションの問題を巡る問題を踏まえ、介護予防を意図したりリハビリテーションのより効果的な支援のあり方について量的・質的調査方法を使い検討されていた。

田原先生は看護師として現場で働いており、そこで臨床現場における疑問と必要性を感じた介護支援専門員の資格を生かすために福祉の道へと歩まれた。調査だけに頼ってはいけませんが、時間がかかるために文献との両立が難しかったということや文を進めてはまた戻ったりするなどの悩みがあったのだが、自分の論文について一番知っている指導教員に話すことで方向性について悩みを解消されたというお話をされた。

修士の時には全ての論文が素晴らしいと思っていたのだが、現在では批判的思考も生まれ、社会福祉の専門家としてプレッシャーを感じながらも色々な視野から研究するという研究力も確実に上がってきたと博士となり充実した日々を送られていることが伝わってきた。一つのことをやり遂げることで、実に多くの素晴らしさも同時に得られるのだということを教えてもらった。

4. 山下先生の報告から

最後に山下利恵子先生（熊本大学専任講師）が報告された。山下先生の研究タイトルは「ドイツ介護保障の構造研究」である。研究内容はドイツ介護保険および社会扶助という2つの制度を取り上げ、主としてそれらの補完的機能を考究された。

山下先生は「現場で働くことが社会福祉の意義」だと思われていたのだが、現場では自分が抱く理想とは程遠くジレンマを抱えており、その年

に介護保険制度ができ利用者のことだけを考えるのではなく制度のことから考えていこうということで大学院に行かれることを決心されたそうである。修士課程を修了したものの、博士後期課程は設置されていなかったため、それが設置されるまでの期間が学びを深める貴重な体験の期間となったということをお聴きし、経験に無駄なものなど一つもないということをお教わった。

目の前にある現象を追い求めるのではなく、問題の本質に常に目を向けていくことが研究する時に大切であり、日頃の積み重ねこそが大事であると話され、「学問に王道なし」と言われたことが一番印象に残った。一足とびで目標達成できるのではなく、地道に苦労や努力をした者だけが最後に大きな喜びと同時に成果を残せる。博士課程修了者も多くの苦労があったにもかかわらず、努力を積み重ねた結果、博士号取得という素晴らしい実績を残されたのだと思った。

5. おわりに

私は12月末発行の本学広報誌「みなみ風」に本シンポジウム案内の中で、「何よりも研究も仕事のひとつのかたちです。研究や大学院とは何かについて考えることを通じて自分の将来の仕事について考えてみませんか。多くの方々の積極的な参加をお待ちしています。」と書いた。

改めて、これからどんな仕事に就き、どのように生きていったらよいかについて考える上で大変意義あるお話が聴けたと思った。他方で、聴講者が35名と少なく、もっとたくさんの学生に聴いてもらいたかったというのも正直な感想である。

最後に総合司会の崎原秀樹先生が3名の報告者に感謝の意を申し上げ、本学社会福祉学会はこのような機会を今後も企画し、学生に学びの機会を提供していきたいと話され、シンポジウムを閉じた。



研究ノート

招かざる客が招かれるべき客になる時
—宇宿地区独居高齢者に対する訪問面接調査より—

特定非営利法人 福祉21かごしま

外部評価員 渡邊 彩友美

大学院福祉社会学研究科前期課程 平成15(2004)年9月中退

はじめに

本論は平成22年に、鹿児島国際大学高橋信行ゼミの学生と教授が中心となって行った、宇宿地区の独居高齢者の訪問面接調査から、訪問面接調査の苦勞、意義を述べようとするものである。先に述べておきたいのは、本論においては一切文献の引用を用いない。本論で述べたいのはあくまで実践を書ける範囲でありのままに書くことにより、文献にはない人と人が関わる時のポイントを事例から書きたいからである。そしてここには訪問面接調査の結果も書かない。それについては、報告書が作成されているのでそちらを見ていただきたい。

筆者が、なぜ本論を書こうと思ったのかについては以下の思いがある。筆者は高齢者福祉のあり方について8年前に論文を書き、「ゆうかり第3号(2004年3月刊)」に載せて頂いた。しかし、特に反響も何もないまま今を迎えたが、今になって、筆者が論文で述べたような考えに似たあり方で、高齢者福祉のあり方が基本に見直されているように思う。その世相を反映するかのようになり、今回の訪問面接調査があったのである。加えて、そもそもの研究のきっかけが宇宿商店街であったことから、法では網羅できない、地区単位、又は市単位での地域住民のニーズにあったインフォーマルサービスの実現への基礎となる調査であり、筆者が思う高齢者福祉のあり方が見直されるきっかけとなればいいと思い、今回の宇宿地区独居高齢者訪問調査に参加した。筆者は高齢者福祉のあり方について、自分なりの思いを持っているが、それはここでは述べない。前述したように、本論で述べたいのは、訪問面接調査の苦勞と意義であり、それを述べることにより、本論を読んで下さ

る各自が高齢者福祉のあり方を考え、なぜ訪問面接調査という、調査でも一番難しい調査法を用いているのか、事例からその意味を知って欲しいからである。

本論は以下の順で進められる。第1章では調査までの準備段階の流れと苦勞、問題点を述べ、第2章では実際の訪問面接調査の事例から苦勞と喜びを述べる。第3章では調査実施後の流れと苦勞を述べ、まとめとして訪問面接調査の意義と調査員の資質の考察を述べるものとする。

第1章 調査の事前準備—依頼から調査実施日前日まで—

(1) 訪問面接調査の依頼からアンケート用紙作成まで

そもそも、この調査のきっかけは、宇宿商店街からいくつかの事業について、鹿児島国際大学に協力依頼があり、その中の福祉に関係した事業(商店街が核となり携帯電話を使った子育て家庭や高齢者の身守り活動など)に、高橋教授がアドバイス等を行ったことだと聞いている。しかし事業の前提となるアセスメント、例えば宇宿地区に住む、高齢者の実態は十分押さえられておらず、宇宿地区に住む独居高齢者の基本的調査が何もなされていなかった。そこで手はじめに実施したのが、調査対象者の何人かへのインタビューである。高橋ゼミに依頼して下さった商店街の方からお願いして頂き、3人の高齢者に集まってもらい、高橋ゼミの4年生3名がインタビューを実施した。そこで高齢者から聞かれた困りごとや日々の生活の実態を、カテゴリー化し、調査項目の作

成にあたった。またインタビューばかりではなく、他の市町村で行った高齢者調査の同じ項目を設けることにより、それを比較することで、宇宿地区の高齢者の特徴をより明確にできるように工夫し、結果として56項目の質問項目が出来上がった。

調査項目の基本は宇宿地区の独居高齢者の生活を明らかにし、ニーズは何か、法では担保されないニーズをどこまで宇宿商店街で独自のサービスとして展開していけるのかを考察できるようにした。

しかし、問題が起きた。調査が出来るか出来ないかという根本的な問題が起こったのである。インタビューを実施し、調査項目まで出来ているのに調査にぎりぎりまで持って行けなかった。これについては次に述べる。

(2) 対象高齢者の名簿の作成と予算

訪問面接調査で一番問題になるのが、対象高齢者の名簿をどこから入手するかである。世の中は何でもプライバシーである。今回特にそれが難しかったのが、宇宿商店街も十分な名簿など持っているわけもなかったからである。今回、ぎりぎりまで調査に持って行けなかったのはこの問題である。市などが依頼者となった時は比較的名簿は入手しやすい。住民台帳があるからである。そこから対象者をわり出し、承諾をいただければいいのだが、今回は何も無かったため、民生委員さんに協力を仰ぐしかなかった。しかし、民生委員さんの協力を仰ぐにも、ただ名簿を頂くわけにはいかない。それは個人情報の漏えいになる可能性があるからである。そこで採った手法は、民生委員さんから、担当地区の高齢者に連絡して頂き、訪問面接調査を実施したい旨を話して、承諾を頂いた方の名簿を頂くこととなった。今回の訪問面接調査は民生委員さんがいなければ出来なかった。しかしながら、民生委員さんに協力頂けたことで、民生委員さんにも問題意識を持って頂くことができたのである。

名簿は確保した。次は予算である。今回、宇宿商店街からも鹿児島国際大学からも特別な予算は出ていなかった。ここでいう予算とは、訪問面接調査の時の司令室になる場所の提供代やアンケート用紙の確保、印刷代、地図代、アンケートに答

えてくださった方へのお礼品、調査員の交通費などである。どれが欠けても訪問面接調査は成立しない。これを解決した方法は次に述べる。

(3) アンケート用紙の作成と地図の確保

(2)で述べた問題は全てボランティアで補った。訪問面接調査の時必要となる司令室は商店街の代表の方が、ビルの一室を無償で貸して下さった。アンケート用紙と印刷、綴りは鹿児島国際大学で行った。高橋ゼミの活動、つまり演習活動ということで用紙と印刷機を借りることができた。それを使い、印刷したのも綴ったのも、筆者と4年ゼミ生であった。お礼品については、商店街からボールペンを頂くことができた。加えて他の調査で残った品があったのでそれで賄うことにした。調査員の交通費は各自実費でお願いした。そして今回一番手を焼いたのが、地図の作成であった。丁度、宇宿地区は区画整理が行われており、通常本屋で売っている住宅地図がどこの本屋にも置いてなかったのである。そこで考えられたのが、CD-ROMの地図であった。これはパソコンにダウンロードすると、住所を入れるだけで地図が出てくるというものであるが、宇宿地区のみのものはなく、鹿児島市で売られていたため、どこまで買えば宇宿地区を網羅するのか分からなかった一方、かなりの高額であった。予算がどこからも出ていないため勿論買うことはできず、高橋教授が片っ端から本屋を巡りやっと住宅地図を手に入れることができた。しかし、それは区画整理前のものであり、民生委員さんから頂いた住所が存在していないのが半数近くあり、地図から対象者宅を探し、印しを付けるのに筆者は苦勞した。よって地図未完成のまま訪問面接調査を実施するしかなく、地図が無いところは、ひたすら歩いて探すしかなかった。こうした予想外の問題が起こるのも、訪問面接調査の特徴である。

(4) 調査員の確保と指令者の確保

今回の調査は前述してきているように、ぎりぎりまで日程が分からなかったため、調査員がなかなか確保出来なかった。対象者174名に対して、調査員は高橋教授を入れて10名であった。調査日程は3日間、予備日2日間の計5日間であった。もちろん全調査員が全日程を出られるわけではなく、一日の調査員は多い日で5名、少ない日は2

名であった。調査員だれもが時間が許す限りぎりぎりまで汗をかき、調査に協力していただいた。そうせざるを得ないほど、調査員は足りず、それにより、ここでも以下のような訪問面接調査独自の問題が起こった。

司令塔である高橋教授まで調査に行かなければならない結果となってしまったのである。訪問面接調査をする際、司令塔は必要不可欠である。調査員は地区全体に広まる。地図が分からず、自分が今どこにいるのか分からなくなるのはしばしばである。そんな時、全体の地図から対象者宅までの道を指示したり、思っていたより時間がかかって次の対象者宅へ行けない時、逆に時間が余った時など、自分が次どの対象者宅へ行けばいいのかわからなくなった時、どの調査員が今どこら辺を回っているかを把握し、どこを回るべきかベストな指示をする必要がある。また、何かトラブルに巻き込まれた時にすぐに駆けつけ解決しなければならない役目も司令塔は担っている。調査員が行く対象者宅は事前にある程度割り振るが、当日になって体調不良で出られない調査員もいた。勿論そこには穴があく。加え、今回は事前に対象者に訪問面接調査の日程を○～○日ではあったが通知していた。これには大学の連絡先を書いていたため、この日のこの時間に来て欲しいという連絡を頂いた対象者もいた。そうなった時、調査員だけでは限界で高橋教授自ら調査に行かなければならなくなってしまった。そのため、司令塔がおらず、調査は逆に前述した役目がないことにより困難をきたしてしまったのである。これも実際に訪問面接調査に移らないと予想できない特徴的な問題である。

第2章 訪問面接調査の事例と筆者の対応—筆者の出会った印象強い事例より—

訪問面接調査をする際、筆者は次のことを必ずする。全ての訪問面接調査で行った事をここで記しておく。地図から家特定し、チャイムを鳴らす時、必ず「鹿児島国際大学の渡邊と申します。アンケートに答えていただきたくお宅を回っているのですが、ご協力いただけませんか」と問う。そして「どうぞ」が出ると、時間を割いて

もらって申し訳ないというあからさまな顔をして頭を下げる。調査の趣旨をさらっと述べ、了解をいただければ、後は調査員次第である。私は調査項目をまるまる読むのではなく、例えば病気について聞く項目なら、「お母さん（お父さん）最近からだの調子どうですか」で始める。「腰が痛くて」と言えば腰痛が分かる。「では、病院に通われているんですか」と聞き返せば次の項目も自然に聞ける。「病院に行くとき不便はないですか」と加えると、項目にはないニーズも聞ける。こうやってアンケート項目にあるものを聞きながら、日常の会話のように、必要に応じて余談を加え、まるで1つの長話をしたかのように持ち込む。筆者のアンケート用紙は余白が真っ赤に埋まる。聞いた事をとにかく全て書き留めておく。以下に事例で実態をいくつか書くが、調査員の許容量が求められる。「お母さん（お父さん）」と呼ぶことであるが嫌がられたことはない。正しいかは分からないが、苗字で聞くよりも身近ではないのだろうか。それは、筆者がまだ若いからかもしれない。

また、質問の聞き方を言うと、「目が見えますか」とあからさまに言わない。そこで筆者はあえて化粧をしないで行く。そして「私の眉毛が半分ないが見えますか」に置き換える。そんな些細な聞き方の違いが笑いを生み、話が弾み、調査項目にはないニーズを生むきっかけとなる。

さらに、足を崩したい時は、「すみません、足崩させてください。」と正直に言う。ただ「どうぞ」と言われた時必ず「最近の若いのは正座もできなくて、申し訳ないです」と付け加える。今の若い人に対する意見を聞ききっかけともなる。

次いで、出された物は断らない。どんなお茶であれ、スポーツドリンクであれ、炭酸飲料であれ何でも出された物はたいらげる。そしてお土産については、筆者は受け取る。信頼関係のない人にお土産まで持たすだろうか。そう考えると、受け取るのが答えではないだろうか。そしてこちらがお礼品を渡す時は、「こんな物しかないのですが。でもIUKといううちの大学のロゴ入りなんですよ」などさりげなく大学をアピールする。それは今後宇宿地区と関わりを続けていく以上必要なことだと考える。次からは実際の事例から訪問調査の実態と醍醐味を述べる。

(1) 事例1

対象者は全盲の女性の方であった。それは訪問して分かったことである。筆者が取った行動は、声のトーンである。対象者にとって独自（この事例では全盲）となる項目は掘り下げて、声のトーンを下げゆっくりと聞く。残りはちょっと答えて頂く程度のトーンに分ける。まず重々挨拶した。前述したように、筆者は時間を割いて頂いて申し訳ないということを、あからさまに顔に出す。しかし、相手は全盲である。重々の挨拶をし、次は自分の行動を口に出していくのである。挨拶が終わり、アンケートに承諾を頂けると「上がって」と言われた。その先は全て口に出していく。「靴は右端に置かせてもらいます」「廊下綺麗にされてますね」「左側に座らせてもらいます」「私が質問していくので答えられる範囲でいいのでお答えください」「アンケート用紙には個人が特定されることは絶対に書きませんので」。ここから面接調査のスタートである。しかし、聞いてはならない質問があることは言うまでもない。「目は見えますか」を聞くわけがない。そこは飛ばし、むしろ見えない事によって抱える問題を聞く。これはアンケート項目にはない。だがそこで聞かれるニーズや問題が訪問面接調査だから汲み取れる、アンケート用紙にはない調査項目を生むのである。そこは、調査員の臨機応変さによる。でもこれができるのが訪問面接調査の醍醐味である。今回のアンケートには最低一時間はかかる。ただ次々に質問していくなら機械である。この事例の場合、調査項目はさっと聞いて、ところどころ調査項目にない質問をすることで余談を持ち込んだ。そこで聞かれる話こそ調査項目にはないニーズなのである。そして、掘り下げればどういった生活をしているのかも話から見えてくるのである。対象者も自身に合わせた話をしてくれるのは気持ちいいものである。

この事例から言える訪問面接調査の醍醐味は、臨機応変に調査項目を作成し、聞くことができる事である。

付随して述べるなら、相手が見えないからと言って勝手に身動きすることはしてはならない。足を崩すのも「すみません。足を。ちょっと崩していいですか」とはっきり言う。筆者の携帯番号

を聞きたいと言われれば、筆者は断らない。「では、ここにおいてある紙に名前と電話番号書いておくので、ガイドヘルパーさんが来た時にでも確認してください」と言う。ここは人によるが、相手は住所、名前、電話番号、質問の答えなど、個人情報ここまでかとお出してくださっているのである。それが特定できないようにしているにせよ、訪問者を信頼してくれているからではないだろうか。逆に言えば、電話番号を交換できる位、信頼関係が築けたと筆者は喜ぶ。帰り際「これ飲んで帰りなさい」と飲み物を出された。「では、一緒に飲みましょうよ」と誘うのである。調査は終わり一緒にいる必要のない時間である。しかしそれを設けて下さったのである。共に飲み、たわいもない話をする。飲み終わると、殻の容器をお盆に載せた。「お盆に載せておきましたから」「ごちそうさまでした」。返ってきた言葉は「あなたに来てもらえてよかった」。これ以上の調査員への褒め言葉はあるだろうか。筆者の行動、言葉が正しいかはわからない。でもこんな事例もあるのである。

(2) 事例2

この事例は訪問面接調査の範囲を超えているが、訪問面接調査を行った際、調査員が味わう一番の喜びである。

対象者は女性であった。玄関で調査を行った。炎天下を回って歩いている私は汗が滝の様だった。お邪魔するなり、少し待ってってと言われた。しばらくすると、扇風機を持って来て下さった。「これで少し涼みなさい」そう言ってくださった。調査は余談から始まった。女同士美容について話しが弾んだ。対象者はとても綺麗にされていて、肌に自信があられた。足を出し、「触ってみなさいよ」と言われ、女同士だしということで触らせて頂くこととした。筆者よりはるかに綺麗である。そんな話から始まった調査で、調査が終わる頃は丁度昼時だった。「昼食べて行きなさいよ」と言われた。断るのが本当だが、その日回っていた場所は、近くに公園もコンビニも無い場所だった。対象者もその事は分かった上で誘って下さったのである。「では、お言葉に甘えて」と昼食を共にした。そして食べ終わると、「トイレも使って行きなさい」と言われ、それにも甘えた。帰り

際「アンケートにご協力頂いた上に、お食事とトイレまでお世話になってしまって申し訳ありませんでした」と筆者が言うところ返ってきた。「頑張ってるから、応援してるから」。この言葉一つで調査員は救われ、また次行こうと思える。この事例での訪問面接調査の醍醐味は、応援して下さる方がいるということを感じることが出来ることである。ただ、同性だったからということもある部分も多い。調査員が同性か異性かによって、対象者のアンケートに対する心構えも違う可能性があるという課題が残った。

(3) 事例3

男性高齢者の事例である。これはまさに調査員配置の難しさを問われた事例である。調査日程2日目が終わろうとしているとき、司令室から「お伺いしていいですか」と対象者宅に電話した時のことである。「今すぐこい」と言われた。前述したように調査日程をあらかじめ「〇～〇日」と告知していたため、来られるのを待ってくださった方であった。筆者は「今すぐ伺います。今ここにいますので、伺うまで多少時間がかかるかもしれませんがよろしいですか」と答えた。すると「俺は一人だ、いつ来てもかまわない、来られるなら今から来い」という返答であった。慌てて司令室を飛び出し、早足で向かった。一日炎天下を歩いていた筆者には走る余力はなかった。やっとの思いでたどりつくとお茶を入れて待ってくださった。そして、「何を答えればいいのか」と聞かれた。時間も時間だった。すぐさまアンケートに移った。勿論、ここでも前述したやり方で行った。すると、帰り際、対象者が書いた絵などを見せてくださった。そしてつぶやいた。「もっと若者が来てくれればいいのに」。ニーズはそこだった。調査日程を〇～〇日で示した結果、対象者は今か今かと待ってくださっていたのである。今回の調査では「いつくるのか分からなかったのよ」とよく言われた。調査日3日のどれかかと思っている方もいれば予備日の2日間のどちらかかと思っている方もいた。そこは前述したように、調査員が不足していることから確約はどうしても出来なかったのである。いつだかわからない調査員が突然来ると、多くの対象者は困った顔をされる。しかし、アンケートに答えようと待ってくだ

さっている対象者もいるのである。若い筆者がたまたま行ったことにより、対象者が最後に示した「若者に来て欲しい」というニーズが訪問面接調査によってある意味では補われたのである。この対象者にも電話番号を聞かれた。筆者は電話番号を記し帰ってきた。

この事例での訪問面接調査の醍醐味は、訪問面接調査自体がニーズを多少なりとも補うことがあるということである。

第3章 訪問面接調査のその後－結果報告書を作るまで－

(1) アンケート調査のデータ入力

今回の調査の結果121件の回答がもたらされた。しかし、前述したとおり、調査員は高橋教授と高橋ゼミ4年以外、筆者のようなOBや大学院生、社会人であった。誰がどこまでデータを入力するかが問題となる。今回、訪問面接調査の調査員として力を貸して下さったことだけでも大変ありがたい。そこに加えてデータ入力の時間まで設けて欲しいとは言えない上、そこまでの時間はない。よって今回は、高橋ゼミで参加して下さった4年には各自で、一部の大学院生には自身で、高橋教授も自身で、その他は筆者が全て入力した。しかし入力といっても、フォーマットを作らなければならない。これは高橋教授にお願いした。調査項目が多いこと、調査員コメントの欄を設けたこと、複数の人間で入力したデータを1つにまとめることから、全ての調査員に関わっている高橋教授しか出来る人はいなかった。こうしたことにより、各自任されたデータを入力し、1つにまとめたのである。

(2) 分析

基本的にSPSSというソフトによるクロス集計を全てにかけ、結果を述べる。時には、クロス集計だけでなく、t検定やカイ二乗検定が求められることがある。今回の調査結果は調査に関わった方々により様々な使い方がされるが、身近なのは、高橋ゼミ4年の卒論であった。筆者はSPSSをろくに使えないが、高橋ゼミ4年はよく出来る。

全ての項目にクロス集計をかけ、結果を書くの

は高橋教授が汗をかいてくださった。勿論、それに更に加えるところには、高橋ゼミ4年が力を出してくれた。

(3) 報告書の作成と発表の機会

(2)で述べたクロス集計と結果が明らかになってやることは、今回の調査の原点に戻ることである。今回は述べたように、宇宿地区の独居高齢者の生活を把握し、法では網羅されないニーズが何か、商店街として何が求められているかを明らかにすることである。それを報告書で明らかにし、考察という形で商店街に提言できるようにまとめるのが、筆者と卒論に使う高橋ゼミ4年の役目である。筆者と高橋ゼミ4年は時間を設け、話し合いを行った。こうすれば、こう言われたなど意見はどんどん出た。筆者はその意見を調査項目での結果と組み合わせ文章に起こした。勿論、高橋教授に添削いただき、何度も書き直した。そして、印刷した際、表が切れても見やすいようになど校正などを行い、1ヶ月以上かけて印刷へと持っていくことができた。高橋教授のはからいにより、カラーの表紙でフィルムまで付けることができた。ここでの印刷、綴り、製本も高橋ゼミ4年の力を借りた。

結果発表の機会は商店街に掛け合い、商店街行事の日に行くことが決まった。本書を書いている時点では日程の都合上、発表の反響は書けないが発表の反響をもとに、具体的にサービスに持ち込むか、そのための更なる調査を行うようにつなげて、1つの調査が終わるのである。

おわりに

本論全てを読むと、訪問面接調査など面倒だし、自分には出来ないと思うかもしれない。ただ第2章で述べたように醍醐味がある。その醍醐味こそ、高齢者の隠されたニーズを掘り起こし、法では担保できない小地域での独自のサービスを生むのである。そこには、高齢者によりよい生活をしていただきたい、何より基本的生活を確保したいという思いがある。地域の特徴により高齢者のニーズも地域で違う結果となっている。それを担保するには、こうした訪問面接調査や地域の働きかけが欠かせない。ニーズを掘り起こすにも何もかも、会話をなくして成り立たない。でもその会話

こそ、法にはない、隠され、そして担保されない小意見であり、そのきめ細かいニーズを担保することから、小地域が中心となり、独自のサービスを生む。そして住み慣れた地域で暮らすという、最大のテーマを解決していけるのである。この流れが、会話という手法を用いる、訪問面接調査の意義と醍醐味である。訪問面接調査は他の調査手法より労力をはるかに使う。それ故に、アンケートの回答率のみならず、調査員を成長させてくれる。学生はこうした調査に参加することにより、自分の福祉人としての力量が自分自身で見えてくる。筆者は有能な調査員とは言えないが、1つだけ調査員として活動する時に持っておいでいただきたいと思う事がある。それは「コミュニケーション能力」である。そして、訪問面接調査員という前に福祉人であるなら「傾聴」を身に付けてもらいたい。事例で書いたように、高齢者の思いや対応は様々である。訪問面接調査にマニュアルはない。電話オペレーターではないのである。格好、表情、話し方、行動全てが相手に見られているのである。その全てをマニュアル化することはできない。高齢者によって好みも考えも違うからである。ただ我々に1つ共通しているのは、「話を聞きに来た調査員」だということである。臨機応変に対応することが訪問面接調査の調査員には求められる。その対応も全て「話を聞く＝傾聴」から始まるのである。それが出来て、コミュニケーションの許容量は広がる。

多くの高齢者は生活を閉ざし、訪問者を嫌がる。最初はそうであれ、帰りには「あなたが来てくれてよかった」と言ってもらえるようになる。つまり、本書のタイトルである「招かざる客が招かれるべき客」になった時、訪問面接調査は成立すると言えるのではないだろうか。いやいや答えたアンケート結果に本心があるとは思えない。本心が隠されている部分が本当のニーズであり、それを聞き出すには信頼関係を作りあげられるほどのコミュニケーション能力が必要である。出来ないではなく、高齢者を知ろうという気持ちで傾聴から入っていけば、コミュニケーション能力は自然と身につく。筆者はそうしてコミュニケーション能力や対応を学んできたつもりである。「やってみよう」でいい。高齢者でなくてもいい。学生

のうちに色々な人とコミュニケーションを持つことによって、福祉人の有り方は変わってくるのではないだろうか。こうしたことが調査員の資質の考察として、調査員であり鹿児島国際大学を卒業した一人のOBであり、未熟な福祉人である筆者が述べたいことである。

謝辞：

本論は編集者である崎原先生の一言で書かせて頂くことができました。訪問面接調査は対象者宅に行けば調査員各自が各自のやり方で調査を行っています。どんな方法で、どんなやりとりがあったのか、それを話す機会は少ないのが現状です。ただ、調査員誰にも共通していることは「汗」をかいたことです。今回の調査は民生委員さんから事前に承諾を頂いたお宅を回りましたが、厳しいことを言われることもありました。時には喜び、時には壁にぶつかり、己との戦いでもありました。しかし、調査に関わった誰もが文句一つ言わず、汗をかき、ギリギリで頑張ってくださいました。粗末な文章ですが、その「汗」を書く機会を下さったことに感謝します。

レポート

社会福祉入門Ⅱ・施設見学記録から

1年 飯伏 琳 浮田 瑞紀

Ⅰ. はじめに

本学社会福祉学会の目的の一つに、学生と教員間の学問的交流の促進があり、社会福祉学科の教育活動と相補的に進めている。例えば先輩や仲間の方々の現場での体験を含む自分史の一端がうかがえるエッセイを、本誌「ゆうかり」に掲載し、授業や演習で活用してもらっている。

他にも「投稿のお願い」欄で教員が推薦するレポートを募集してきた。ここでは、社会福祉入門Ⅱの課題・施設見学記録を取り上げたい。

そこで、本課題の方法と背景から考えたい。

まず、1年前期の社会福祉入門Ⅰに続く後期開講の社会福祉入門Ⅱの開始前にまとめて提出するレポートである。7月に事前説明会や学習日を入れて調べ学習を行い、9月（夏季休業）中に施設見学を行い、それを基に作成することになる。

次に社会福祉入門Ⅰのテーマは、「援助者の語りを通じて社会福祉の基礎を学ぶ」である。シラバスによれば、福祉とは何かについて、私たちの生活の営みの中で援助者はどのように行為しているかを理解することから始める。社会福祉入門Ⅱのテーマは、「社会福祉現場のしくみと現状を知る」である。7つの実践領域の分野論と現場の様子を理解し、その後の専門科目やソーシャルワーク実習につなげることを狙いとした講義主体の科目である。

以下に2人のレポートを、約3ヶ月後に読み直して感じた内容と共に紹介したい。まず、事前学習や施設見학을どのように進め、その過程と結果をどのようにレポートにまとめているかを参考にして頂けるとありがたい。また2人の約3ヶ月後の感想を読み、自分の書いたものを、時間を置いて見直すことの意味も考えて頂けるとありがたい。さらには、社会福祉入門Ⅰのシラバスからことばを借りれば、学生にとって「社会福祉教育の道しるべとなり、モチベーションとなるもの、エモーショナルな面からも、福祉に対する強い共

感を喚起するもの」「援助者としての自分の覚知」の一端を考え直す機会にさせていただけるとありがたい（崎原）。

Ⅱ. 飯伏琳

1. 施設の特徴（事前学習）

名称：鹿児島市在宅介護支援センターひまわり園

種別：特別養護老人ホーム

所在地：鹿児島県鹿児島市犬迫町5407-2

設置主体：社会福祉法人 中江報徳園

施設の設置目的と特徴：

基本理念である「知恩報徳」＝「人は恩の海に住む」つまり、恩を知り、これに感謝して初めて人としての価値が生まれるということを掲げ、高齢者が明るく、豊かな生活が送られるよう、その恩に感謝し、社会に貢献するために設置された。

昭和43年4月、社会福祉法人 中江報徳園設立に伴った、鹿児島県で初の特別養護老人ホームを設立。利用者の方の人としての尊厳を重んじ、人権を尊重し安全で豊かな生活の場を提供している。在宅サービスのさらなる充実と発展に努め、地域福祉の中核としての役割を果たし、職員の資質向上のため、明るく、活力のある職場作りにつとめている。

多様な施設・在宅サービスがあり、例をあげると特別養護老人ホームを始め、グループホーム、ショートステイ、デイサービスセンター、ヘルパーステーションなどがある。他にも委託事業にも取り組んでおり訪問給食等を行っている。協力病院も多数あり、利用者の方が急な病を患ったときに、適切な対応がとれるようになっている。周囲は四季折々の植物が植えられ、季節を感じながら健やかで住みやすい暮らしの提供を心掛けている。

2. 見学時に質問したいこと

1) (私は、高齢者福祉に興味があり、将来、そ

れ関係の仕事に就きたいと考えているのですが)仕事をしている上でやりがいはまたは大変だと思ふことは何ですか?⇒A.利用者さんに感謝の気持ちを言ってもらえることがやりがい。大変だと思ふことは自分の自信がないとき。しかし、それがモチベーションを高めることに繋がる。

2)要介護度はどのようにして決定されるのでしょうか?⇒A.(自分で調べた結果)介護認定申請をした後、訪問調査→主治医意見書→一次判定→(コンピュータ判定)→二次判定(介護認定審査会)の順に要介護度が決定される。

3)(最近、生存不明の高齢者の方が増加している事件が続出していますが)高齢者の方の安否確認のための制度ってあるのですか?

⇒A.(自分で調べた結果)ある。しかし、そのサービスを受けるためには申請が必要。

4)利用者の方やその身内の方々の相談・支援をする生活相談員、生活支援員の方は一人当たり何人くらいの方を担当するのですか?

⇒A.ひまわり園では、3対1か2対1を心掛け、受け持っている。一日当たり5・6人が各ユニットについている。

5)夜勤体制はどのようになっていますか?

⇒A.看護師の方が各ユニットに計6名で夜勤している。

3. 施設見学の概要

見学日時:2010年9月21日(火)

見学内容:

1)特別養護老人ホームひまわり園の生活相談員の方による施設・在宅サービス、委託事業の説明。

2)①特別養護老人ホームひまわり園内見学(施設案内、事業・行事の説明、他にサービス等の詳細な説明。)②ショートステイ、介護支援センター、訪問入浴、デイサービス、生き生きセンターの見学、詳細な説明。

3)利用者の方とのコミュニケーション(各グループごとに分かれて)

4)質疑応答

4. 事業内容

①特別養護老人ホーム(自宅介護が困難な方の施設での介護。)

②グループホーム サンひまわり(介護を必要とする認知症の方とスタッフが共同生活をし、認知症緩和介護を行う。)

③ショートステイ(一定期間の施設での介護。)

④デイサービスセンター(自宅住まいのお年寄りの送迎、入浴・食事、リハビリテーション等のサービス提供。)

⑤ヘルパーステーション(スタッフが自宅訪問し、入浴・食事介助、洗濯を行う。)

⑥訪問入浴(施設で温泉浴を提供。)

⑦居宅介護支援事業所(介護に関する相談窓口。)

⑧生き生きセンターひまわり園(高齢者の寝たきり予防教室開催等。)

⑨訪問給食(食事介助の必要な一人暮らしのお年寄りに昼食を届ける。)

5. 職員構成(職種/人数)

・生活相談員(数名)・ケアマネジャー(数名)・調理師(数名)・管理栄養士・介護福祉士/社会福祉士(若い人が4・5名、他数名)・事務員(数名)・医師(非常勤医師)⇒常勤医師(1名)、非常勤医師(1名)・看護師(9名)※夜勤1名

6. 利用者(年齢/人数)

特別養護老人ホームひまわり園(110名)⇒UNIT2(24名)、UNIT3(38名)、UNIT4(24名)、UNIT5(24名)。要介護度によって年齢はそれぞれ。※入所定員は110名だが、少人数でのおもてなしをモットーとしたユニットケアを実施。

グループホーム サンひまわり(18名)⇒一階(9名)、二階(9名)、生き生きセンターひまわり園(40名)→60歳以上の方が多い。ショートステイ(30名)→要介護度によって年齢はそれぞれ。デイサービスセンターひまわり園(定員75名)→要介護度によって年齢はそれぞれ。⇒一日当たりの利用者は40名程度。

7. 感想

今回、ひまわり園の利用者さんやスタッフの皆様

さんの貴重なお時間を頂いて見学をさせて頂いた。学ぶことが多くあり、非常に貴重な体験をさせて頂いたと思う。感心することが多くあり、一通り見学し共通して感じたことは、スタッフの皆さんが利用者さんへの気遣いや心遣いを忘れず、そして介護しすぎず、利用者さんの『自立』のサポートに力を入れているということだ。利用者さんの使う洗面台やトイレ、ベッドといった毎日使うものには手すりを付けたり、車いす目線の高さに設置するなど、多様な工夫が見られ、サービス面でも、利用者さん一人ひとりに合わせたリハビリテーション（体力維持のため）、一人で立つことが困難な利用者さんには椅子に座ったまま入浴できるリフト浴設備など、思いやり精神が染みじみと感じられた。そのサービス精神豊かなスタッフの皆さんに囲まれているせいか、利用者さんは皆、自然な笑顔であふれていて私もずっとこの場にいたいという衝動に駆られた。

質疑応答の時間では、優しく朗らかな生活相談員の方が丁寧な応答を下さり、非常に興味深い返答を下さった。特に気になったのは、入所待機者の増加である。生活相談員の方曰く、このひまわり園にも約130名の方が利用したくてもできない人がいるという。都内では、一施設につき約500名の方々が入所できないというから驚きである。今回、生活相談員の方のお話を聞き、考えさせられたのは明らかだった。他にも、多くの質問に答えて下さり、魅力的な返答が多くある中、私の幼い質問にも答えて下さった。私が質問したことは、仕事上のやりがいや大変に思うことについてであったが、その方曰く、やりがいは利用者さんの笑顔や感謝の言葉であるという。また、大変に思うことは、利用者さんへの対応に対して自分の自信がないときだという。しかし、その時の自信のなさが自らのモチベーションを高めることへと繋がるとおっしゃっていた。私がこの返答を聞いて初めに思ったのは、やはりこのスタッフの皆さんの温かく親切な対応があるのは、この生活相談員の方のように前向きな心掛けがあるからだと思った。

特別養護老人ホームを始めとするこのような介護老人福祉施設は、共に生活していく場であるため安心で安全なサービスの提供は欠かしてはいけ

ないということを聞いたことがある。私は今回、見学をさせて頂いて、改めて感じた。そして、今後高齢者福祉を学ぼうと考えている私に改めて気付かせてくれたと思う。私は、当たり前であるが、まだまだ福祉に関する専門的な知識や技術もないし、考え方も未熟であるため、今回スタッフの方や利用者さんから学んだことを堅実に自分のものとし、役立たせていきたいと考えると共に、よりよい福祉づくりに貢献できるよう邁進し続けたいと思う。

8. レポートを読み直して感じたこと

レポートを一通り読み返し、初めは率直に嬉しく思った。なぜなら、この後期の間で成長した自分を感じる事ができたからだ。

成長したと感じる点は大きく二つあり、一つは、専門的な福祉の用語や考え方、知識等が増えたということである。レポートを読むにつれ、あの時このことを知っていれば、こういうことも書けたのに！という思いであふれると共に、専門的な知識の必要性を痛感した。

二つ目は、先生方の講義を通し、様々な福祉に対する熱い思いや揺らぐことのない信念・志にふれ、自分の福祉に対する思いや情熱に気付くことができたということである。気付けたことで、自身のハートそのものが強く、大きくなった気がした。そして、私が福祉への思いがより一層増したと思う。

しかし、このレポートを何度も読み返すうちに以前より劣った自分も見えてきた。以前より劣ったもの、それは多方面から物事を考えることができなくなったということである。福祉を学べば学ぶほど、偏ったものの考え方つまり、福祉の教科書通りのものの考え方をする傾向にある自分に気が付いたのだ。レポートでは、その以前の考え方のできる自分すなわち、福祉を受ける側の目線でも考えることができていたと思う。私たちのような福祉を専攻する者、福祉を提供する側の人間は偏ったものの見方でその状況、心境、考え方等を判断してはいけないということを前期、後期を通して学んできた。やはり、私もその通りだと思われし私が福祉を受ける立場であつたら不愉快に感じられると思う。(一人ひとりとは違う存在であるため、

一人ひとり違う物事の捉え方、考え方があり、そのため意思や悩みなどもそれぞれ異なるから)自分が嫌だと感じることはしない、よって、今後もステップアップしていくために課題としていきたい。

今回、この感想文を書く機会を頂き、初めは何を書いたらよいか正直戸惑ったが、今は本当によかったと思う。私の褒めてやりたいところ、努力すべきところを再確認することで、具体的な自分を高めていく目標を持つことができた。私は、この学校で学べるものはすべて学んでいくと共に、気になるものはとことん調べ、日々精進していきたいと強く思った。



Ⅲ. 浮田瑞紀

1. 施設の特徴(事前学習)

名称：社会福祉法人 愛真会 三州原学園

種別：児童養護施設

所在地：鹿児島市吉野町10749-1

設置主体：社会福祉法人 愛真会

施設の設置目的と特徴

児童養護施設とは？

児童養護施設とは、児童福祉法に規定された福祉施設。親の死亡、行方不明、長期の入院、拘禁、離婚、経済的な理由、虐待、養育能力の欠如など、さまざまな理由で親と暮らすことができない児童を入所させて養護し、あわせて退所した者に対する相談、その他自立のための援助を行うことを目的とする施設。

入所者の年齢は原則として1歳以上18歳未満であるが、特別の理由により1歳に満たない乳児や18歳以上20歳未満の入所者もいる。平成21年度8月現在、鹿児島県内には14の児童養護施設があり、すべて社会福祉法人により運営されている。

入所者の教育は、個々の自立目標に合わせた支援計画をもとに、児童指導員・保育士などの専門職が行っている。この他、事務職員・調理師・栄養士・心理療法担当職員・職業指導員・運営管理者として施設全体に責任を持つ施設長が入所者の生活を支えている。(施設によって配置されていない職員もいる。)

また、女性の社会進出や少子化問題に対応するため、地域の子供を見守り育てていこうという流れのなか、地域における子育て専門機関として児童養護施設の役割がクローズアップされている。

地域の子供を、親が病気などの理由により一時的に預かる子育て支援短期利用事業(ショートステイ・トワイライトステイ)や、引きこもり・不登校児童に対する援助、児童館の運営など子供の健全育成をはかる取り組み、さらに児童家庭支援センターを設置して、子育てに関する様々な不安や疑問を抱える家族への相談・援助などを実施している。

今、社会的に児童虐待への対応が大きな課題となっている。児童養護施設では、地域の子育て相談などを通じた児童虐待の発見・予防から、虐待を受け施設に入所してきた子供の心を癒し、家庭復帰を目指した環境の調整・自立に向けた援助からアフターケアまでトータルに児童虐待問題に取り組んでいる。

社会福祉法人とは？

社会福祉事業を行うことを目的として、社会福祉法の定めるところにより設立された社会福祉法第22条(※)で定義される法人をいう。障害者や、高齢者などを対象にした各種施設や保育園、さらには、病院や診療所などの医療機関の運営主体となる。また、介護福祉士や保育士を養成する専修学校を運営している法人も存在し、同一法人内の福祉施設との連携を特徴としていることがある。
※社会福祉法第22条…この法律において「社会福祉法人」とは、社会福祉事業を行うことを目的としてこの法律の定めるところにより設立された法人を言う。

2. 見学时に質問したいこと

1) 児童養護施設を退所した後も相談を受けるそ

うですがどのような問題があり、どのように解決しているのですか?⇒A. 退所した人たちで「三州会」を立ち上げ、施設だけでなく仲間内でも相談できる環境がある。問題として仕事のことや、自分が施設出身であることを周囲に言うべきか否か、など。

2) 現在話題になっている幼稚園の待機児童のように児童養護施設にも待機児童がいらっしゃいますか?⇒A. 現在、三州原学園では定員50名中41名が入所しているのではない。

しかし、相談件数が300件あるということは潜在的にあると推測できる。

3) 何故、児童養護施設では門限が厳しいのですか?⇒A. 集団生活の場であるので1人だけ特別は許されることではないし、自分のすべきことをしなければそもそも生活がなりたないから。門限に関しては高校生は自己申告すれば考慮している。

4) 入所者と関わる時に特に気をつけていることはどんなことですか?⇒A. とにかく公平にすること。場合によっては意図的にひいきにすることも。逆に入所者が職員をひいきにすることも。

5) 三州原学園の入所者に障害をもっている入所者はいますか?⇒A. 身体障害者はいないが、知的障害者は数名いる。特別支援学校に通ったり、なかよし学級に通ったりと様々。接し方は特別変わらない。療育センターや心療内科、児童相談所のワーカーと連携してきている。

3. 施設見学の概要

見学日時：2010年9月21日（火）

見学内容：①施設見学

②質疑応答

4. 事業内容：

1) 分園型自活訓練事業→退所前に一定期間に自立のための個別指導を行う。

2) 小規模グループケア→少人数のグループに分かれ、より家庭に近いスタイルで生活をする

3) 短期入所生活援助事業（ショートステイ）→保護者の疾病などの理由により養育を行うことが一時的に困難になった児童及び夫の暴力に緊

急一時的に保護を必要とする母子が対象。

4) 夜間養護事業（トワイライトステイ）→保護者が仕事の都合により、平日の夜間または休日不在となり過程において養育することが困難になった児童が対象。

5. 職員構成：

園長、指導員、保育士、心理士、栄養士、調理士

6. 利用者（年齢／人数）：

幼児9名、小学生15名、中学生9名、高校生9名の計41名

7. 感想

三州原学園では41名の子どもが入所している。全ての入所者が虐待をされていたわけではなく、入院や離婚、養育困難など様々な理由で入所している。学園では「施設の子ども」という偏見を周囲から持たれないように子ども会に入るなどして地域と積極的に関わろうとしているようだ。また、学園だけでは限界がすぐきってしまうので、療育センターや心療内科、児童相談所のワーカーと連携しているという話を聞いて、私も含めて外部の人・周囲の人が理解し、協力しなければいけないんだなと思った。私たちがいつまでも偏見の目を持っているということは傷ついた入所者の心を更に傷つけることなのだなと思った。

質疑応答のとき、施設長がおっしゃっていたのだが、虐待が主訴で入所すると殆ど親元へ戻ることができないのだそうだ。虐待を受けた子どもは児童養護施設でケアを受けることができるが、虐待をした親には何のケアもないので、根本的な問題がずっと残ったままになってしまう。親も子どもも両方ケアして親子の関係を再構築するのが一番の理想ではあるが、それを現実にするには人手が足りない。地域の民生委員や保健所が窓口として設けてあるものの、知らない人が多く、窓口として機能していない。そして結局親へのアプローチが宙づりになってしまい、子どもが親元に戻れなくなってしまうという問題があるようだ。この話が一番心に残った。

入所者は18歳になったら退所するが、それで児童養護施設の役割が終わりではなく、寧ろ退所後

から本当の問題だそうだ。入所時も退所後も相談されることは職員としての仕事ではなく、熱意なのだそうだ。だから勤務時間外になってしまうことも多い。それでも人手が不足しているので子ども一人一人と向き合う時間を十分にとることができないのが問題なのだそうだ。確かに一人の職員で8~10人の子どもを見なければならぬとなると相当大変なのが想像できる。本来ならばその相談に乗ってあげるのは親である。改めて両親がいることに感謝したいと思った。

今回、初めて児童養護施設を訪問、見学させて頂いて、私自身知らなかったことが多かったと思った。施設の存在や目的が社会的に認知、理解されておらず、いまだに偏見の目で見られてしまいがち、ということが今回の見学でわかった。「子ども手当」をはじめとする民主党の政策が入所者にどれだけ影響を与えるのか、親の在、不在で入所者の間で大きく差が出てきてしまう問題があるのだ、という貴重なお話を聞かせてくださって、児童養護施設に入所してそれで全てが解決するわけでもないし、施設内でもなにかと問題があることから複雑だな、と思った。

8. レポートを読み直して感じたこと

自分の書いたレポートを読み直して感じたこと、それは本当に自分が書いたのか、ということです。事前学習や質問事項、感想など自分で調べたことや自分の考えを述べる欄を嫌というほど書き込みました。私が見学したのは児童養護施設なのですが、調べていくにつれてもっと知りたいと思うようになりました。だから事前学習の欄が膨大な量になったのかなと思います。しかし、逆に細かい字で書き込みすぎたため事前学習の「施設の設置目的と特徴」の欄が読みづらくなってしまいました。また、感想もだらだらと書いてしまって、よくわからない内容になったと思いました。

この施設見学は自分がこれまで知らなかったことを知ることができるいいチャンスだったと改めて思いました。



実習センターから

大学生活での資格取得—介護福祉コースの魅力

鹿児島国際大学実習センター

中井 康貴

2006（平成18）年3月卒業

1. はじめに

資格の意味を調べた。広辞苑（第5版）では「身分や地位。立場。また、そのために必要とされる条件」と記載されている。現代社会は資格社会である。資格を持つことにより就職先が広がり、専門性を発揮できる。福祉に興味を持って入学された皆様には、資格取得を目指し充実した学生生活を目指して欲しい。

社会福祉学科には、介護福祉コースというコースがある。名前の通り介護福祉士受験資格を取得するコースであるが、ここで間違えないで欲しいことがある。それは介護福祉士国家試験受験資格だけを取得するのではなく、『社会福祉士国家試験受験資格』と『介護福祉士国家試験受験資格』の両方の受験資格を取得することができるということだ。

介護福祉コースを専攻するには1年次（入学式後のオリエンテーション期間（約3～4日間））に意思決定しなければならない。少し酷ではあるが、専攻した場合将来絶対に役立つことになる。

2. 大学で取得する介護福祉士の魅力

介護福祉とは、日常生活を営むのに何らかの障害がありそれを援助、介助するものである。ただ、介助する技術だけなら誰でもできる。そこに専門性は少ない。技術だけができれば介護ができるというのはもう古い考えだ。では逆に介護技術以外に何を学ぶのか。それは4年大学の介護福祉コースで学んで欲しい。

また、介護福祉士国家試験受験資格は専門学校で取得できるのではという疑問があるかもしれない。専門学校に比べ大学では、社会福祉士を基盤とした専門的な幅広い知識に加え、より質の高い介護福祉士の専門性、介護福祉士を指導できる介護福祉士の育成等がある。筆者も介護福祉コース

を専攻したが、選んだ路は間違いではないと自信を持っていえる。また、国家試験に合格し卒業と同時に介護福祉士と社会福祉士の両資格を取得できれば、福祉関係に就職した場合、職場でのステップアップ・スキルアップに繋がり有利である。

大学に来る福祉関係求人情報を見ると、約1/2以上は介護福祉士の求人で、全職業と比べても有効求人倍率は3倍以上である。何故こんなに介護福祉士の求人が多いのか。それは社会福祉士として就職しても、まずは介護現場から始まり、介護現場を理解していない相談職では仕事うまく物事を運ばず仕事上のトラブルにつながることも多いようだ。また、福祉現場で求められている人材は、社会福祉を学んだ介護福祉士、介護福祉を学んだ社会福祉士である。そのため、ひとつの資格だけではなく2つ3つの資格を取得していることが求められている。すなわち、介護福祉コースでは2つの国家試験受験資格を取得でき、その他にも公的・民間資格も取得できるステップアップやキャリアアップに満ちたコースなのだ。

3. 介護福祉コースの特徴

介護福祉コースの特徴は、教員の熱意と指導力、サポート体制の充実である。また、少人数制（1学年30名定員）での授業を受けることも多く、絆の深い人間関係を構築できることも特徴のひとつである。1年生～4年生まで交流できるイベント（新入生歓迎コンパ、スポーツ大会、卒業コンパ、国家試験応援食事会等）や、同窓会も開催されており上級生との交友関係も築きやすい。そのため経験や知識、思考能力を吸収できる自分自身の成長の場であるのも特徴である。

大学の授業時間は1コマ90分間であり高校の授業と比べ長い。私自身、基本的に眠たくなることが多かったが、介護福祉養成科目の授業では実技

の授業も多いため一方的に講義を聴かされ眠たくなることも少なかった。利用者の援助計画を立てる授業（介護過程）、毎日を楽しく過せるようにするための技術にかかわる授業（レクリエーション）、特に生活援助技術Ⅳ（調理・栄養実習）では、調理実習を行うので楽しく美味しく学ぶことができる。

例えば、ある人物が『「お母さん、お母さん」と大きな声を出して叫び、床で泣いている。』あなたはどのような人を想像し、どんな背景が存在すると思いますか。一つは、子どもが迷子になり母親の助けを呼んでいるのではないかと想像できる。次に高齢者の方が認知症の症状で叫んでいるのではないのかも想像できる。他にも想像できるが物事を1つの方向から考えるのではなく、あらゆる角度（360度）の視点から考え柔軟な頭を養い、支援に活かす授業もある。

メインイベントの介護実習については筆者の体験から少し紹介したい。実習では学校で学ぶことのできない、利用者様との接し方、社会性、柔軟な考え方、専門性等、たくさんのことを学ぶ、たくさん体験できた事は何よりも新鮮であった。

しかし、新鮮であったからこそ、学校で学んだ理想と現実のギャップの差に悩む事は絶えなかった。また、精神的に追いつめられた時もあった。そんな時、週に2回天使がやってきた。それは、巡回指導で教職員が実習施設に来る時だった。実習の現状報告や悩みを打ち明け、悩んでいる気持ちを受けとめていただき、勇気づけられる熱い言葉の指導が入り、前向きに物事を考えられるようになった。悩む事は決して無駄ではなく、悩むから成長できるのだと確信できた。今の私には何が足りないかを気づかせてくれる指導であり、教職員の存在は心の支えだった。学生一人につき30分程度の巡回指導はあっという間に終わるのだが、「先生!! まだ帰らないでください。もう少しいて!!」と実習に戻りたくない時や少しさぼりたい時、何度も何度も心の中で叫ぶことも多かった。しかし天使は他にもいた。それは利用者である。自分が苦しい時に「ありがとう。大丈夫やったか?」と一言。何気ない言葉であるがこの言葉に本当に助けられることが多く、心がスーッと軽くなり私にとっての癒しと励ましの言葉だった。

実習が終わると、実習を終えた時の達成感、なんとも言えない充実感、成長でき、考え方が変わる瞬間であった。実習を全て乗り越えた時には、最初と明らかに物事の考え方や捉え方、視野等が大きく違っていった。実習は現場を学ぶ場所であるが、自分探しにもなる授業だった。

4. おわりに

私は本学の介護福祉コースを専攻し卒業した。卒業後は高齢者福祉施設に介護福祉士として従事した後、現在は本学の実習センターに勤務しているが、社会人として大いに活かすことができたのは大学で得た経験・知識・資格である。

学生時代に役立った経験もある。スノーボードで両手を骨折したことがあった。両手骨折の生活は非常にきつかった。手術後、左手はギブス、右手は創外固定で、右手は何とか動かせる状況だった。しかし、食事やお風呂、着替えなど誰かの手を借りないと何もできないのである。こんな時、大学で学んだ事が生きた。食事では箸やスプーンを持ちやすいよう工夫し自助具を作った。着替えでは着患脱健^{*1}（ギブスの方を患側として）が役に立った。そのほかにもいろいろ役に立つことがあった。骨折しろとまでは言わないが、何事も経験だと改めて思った。

再度、介護福祉コースを専攻するには、1年次（入学オリエンテーション期間（約3～4日間））に決めなければならない。これは大学生生活を送る上で大変重要な選択になることは間違いない。また、短時間で意思決定することは少し酷である。しかし、介護福祉コースを専攻しなかった3～4年生から専攻していた方が良かったと聞くことも大変多く、他の学生より多く学習でき、より多くの出会いがあり、2つの資格につながる。就職に有利だということは確実である。

私が学生時代を振り返り言えることは、「何もしないで後悔するぐらいならアクションを起こして後悔する」である。そして視野を広げてほしい。自分探しの旅に思い切って介護福祉コースを専攻してみてもよいのでは…

*1 着患脱健…服を着る時は患側（動かない方）から、脱ぐ時は健側（動く方）からという介護に関する知識

[第5回]

合格体験記

これまで、そしてこれから

社会福祉法人 日置福祉会
障害者支援センター うめの里
森山友美
2010(平成22)年3月卒業

1. 研修が始まり、仕事を続けている今も

1月31日試験当日。今まで使っていた参考書、ノートをお守り代わりとして持って行った。正直、落ちる気はしなかった。しかし、試験終了後に自己採点すると経営論(福祉サービスの組織と経営)が1点しか取れてなくてショックだった。もし、記入ミスで0点だったらどうしよう…と初めて落ちる気がした。

研修期間として3月から働いた。バイト代並みの給料は頂いた。就労移行支援事業、就労支援継続B型事業、生活介護事業の3事業を2週間おきに回り、各事業でのレポートも書いた。1ヵ月の研修を終え、就労移行の生活支援員として配属された。

研修も2週間過ぎた3月15日合格発表日。何とか合格していた。ホッとした。仕事が始まり、何か分からないことがあると、「ほら、福祉士! どういうことかな!」と訊かれた。当たり前のことだが、資格を取っても、それでゴールというわけではない。ホッとしていたのは東の間、また新しいことが色々と始まった。

そしてそれは、仕事を続けている今も同じである。改めて、こんなふうにして、これまで、そしてこれからと続いていくんだなと思った。なんだか、生意気とか、ポヤーンとし過ぎといわれそうである。

2. 3年の後期はどんなことを思っていたか?

そういう私は、やはり就職活動を始める時期、どんな仕事をしたいのか分からなかった。資格は

欲しかったけど、別に福祉の仕事がしたい〜って言うわけでもなかった。でも、もし資格が取れたら少しは福祉に携わりたいかな〜って曖昧な感じで、まあどうにかなるかなって思いながら、働きたくない気持ちもあり…でも、そもいかない気持ちもあり…。

3年の12月からいろんなガイダンスに行ったけど、やっぱり何がしたいのか分からなくて、会社説明会に行ってこの会社に入って働くのかというイメージも最初だけで…次第にやっぱり違うかもしれない、自分は一体何がしたいんだろうって思っていて…。

3. 4年の10月頃

4年の10月頃、掲示板を見ていたら今の施設が求人募集していて、見学だけ行ってみようと思って見学に行った。見学に行ったら、知的・精神障害の人たちが箱折作業をしていて元氣よく挨拶してくれた。その光景を見て、知的・精神障害の方たちが働いている姿に驚いた帰り際、一人の女性が「先生(私のこと)は、ここに来るの?」と尋ねて来て、「分かりません。」って答えたら、「あら、残念。来ればいいのに。」って笑顔で言われた。(今考えれば、この女性はこの時、躁状態だったのかもしれない。)その後、一応、面接だけでも受けてみようって思って受けた。正直なところ、他に働く当てがなかったら困るし、練習のつもりもあり面接を受けた。

でも、採用通知が来た時はホッとしたのと同時に、ここで働くなんて想像出来ない気持ちで不安

だった。だから、提出期限ギリギリまで返答しなかったけど、最後はその女性が言った言葉が頭に残っていて、そんな風に言ってくれた人がいるし(そんな風に思っていたのは自分だけかもしれないけど)…って思った部分もあった。

4. 試験勉強

あんまり、勉強したなー!!!って記憶はない。確かにノートには色々書いて…資料をまとめて…参考書を見て勉強したけど必死にしたわけではなかったような気がする。家では勉強しなくなかったし、休みの日も遊びたかったし、だから平日に大学の図書館か自習室でしか勉強しなかった。(でも、卒論は10月に終わらず…2月までかかってしまい先生ごめんなさい。)図書館でも、すぐ腹が減っては外のベンチに行き、パンやお菓子を食べながら音楽を聴きながら参考書をパラパラめくっていた方が多かった。今思えば、ダラダラとでもとにかく続けていたなと感じている。

本格的な勉強のきっかけは最初にあった学内過去問変形模試である。低い点数を取って、やる気がなくなってしまうように、自分なりにやる気を起こす為にも試験前日に昨年の試験問題を解いた。何も分からず答えの文章だけ覚えていき試験に臨んだ結果は80点ぐらいで校内10位以内に入ることが出来たが、それは前日に覚えていったからであって、何もしなければ絶対もっと低い点数をとっていたと思う。その時、自分の中で決めたことは、次の模試では今回の点数より下を取らないこと。少しの点数の上がりでも良かったりと思えるようにしようと思った。(後々、それは実現できた。点数は下がることなく、モチベーションを高めていった。)

こんな感じで勉強は始まった。繰り返すことになるが、ダラダラとだから続けることができたのかもしれない。参考書は2回通り、あとは模試の復習を必ずやった。解説を見て分からないことや「ほほっ〜」って思ったことをノートにまとめた。ノートは単元ごとに分け、初めは丁寧にまとめたが途中から面倒になり、単元ごとに分けた箇所に適当に関心があるものを書いていった。自分が書いたものだから、読み返しても「これはあのことに繋げて書いたものだ」とか「これはあれに

も関連していることだった」とかすぐに分かった。

勉強は好きではないが、自分が働いた時の雇用保険はこういう風になっている、歳をとった時はこの制度を利用すればいい、子どもを育てる時に困ったらここに相談しよう、今この人はこういう思考でこんな行動になっているのではないだろうか…などと想像して、社会保障論、老人福祉論、発達心理学を見ていくと面白さももあった。また興味本位かもしれないが日本の制度的なことを知りたかった。こんな楽しさもあり勉強する中で、大学に行かせてもらった以上は受からないと親に申し訳ないというプレッシャーもかなり持ちながら勉強していた。でも、自分なら大丈夫!!!と何故か落ちる気はしなかった。

勉強したなー!!!っていう気持ちも、やばい全然頭に入ってこない…っていう気持ちもなかったが落ちる気はしなかった。だってなかなか集中はできずに、音楽を聞いたり、菓子を食ったり、ペラペラめくったりだったりの方が多かったから。それでもダラダラと続けていた。今思えば楽しんでしていたかもしれない。

5. 4月以降、そして今

社会福祉士試験に受かり、現在は就労移行支援事業の生活支援員をしている。社会人になったばかりなのに、利用者に挨拶指導や働いてお金を得るということを伝えていることに、不安になることがあり…。こんな私が教えていいのか、上手く伝わっているのか…。4月の最初は、利用者を受け入れてもらうことに精一杯で「優しく、優しく」接していた。でも、障害者が一般就労を目指すためには、もちろん受容は大事なことであるが、出来ることは自分で行う、改善できることは改善することの必要性を学んだ。今は、4月の時とは接し方も変わったと思う。

社会福祉士としては、まだ全然役に立っていないかもしれないが、大学で学んだ障害のことや生活に絡むことでは仕事の中で関わることもある。不安になったり、グジグジすることは一杯あるけど、どうにかなるかもなあ…と思いつつ今も頑張っている?と思う。

合格体験記

テス！－数え切れない苦しいことの中で見つける楽しみ！

社会福祉法人 恵心会 特別養護老人ホーム 清溪園

橋元龍司

2009（平成21）年3月卒業

1. はじめに

今回、「ゆうかり」に書くように誘いを受けて正直自分なんかでよいのだろうかと思いました。しかし、自分が学生現役の頃に先輩方が書いた合格体験記を読んで、とても励まされたので、今度は私が少しでも後輩の皆さんの役に立てればと思い、書くことにしました。

私は、平成21年4月から鹿児島市にある特別養護老人ホーム清溪園で介護士として働いています。大学生生活4年間を振り返りながら、合格までの道のりを書いていこうと思います。

2. 現在の私

社会人2年目がスタートし、現在私は特養からデイサービスに部署が移り日々奮闘しています。デイサービスは特養とはまた違った楽しさがあり、利用者は、軽度から重度、認知症がある方々です。利用者たくさん話をしたり、レクリエーションやアクティビティを通しコミュニケーションをとっています。日々の利用者の変化やデイサービスの変化があり、職員の方からもご指導していただいています。

日々利用者と生活をする上で、楽しいこともあれば、「もう！！」と腹を立ててしまうこともあります。そんな感情的になった時には一呼吸置き、「何か原因があるはずだ」「この人にはうまく伝えられない思いや背景があるはずだ」と感情的になる自分に対し一息入れて考えてみます。このように様々な観点から物事を冷静に考えることが出来るようになったのは、大学で勉強したことや現場で経験したからだと思っています。ここに来られている方たちは人生の大先輩であり、皆さん様々な理由で来られています。

医学的に認知症があったとしても、感情面は残ります。その中で利用者の人生の貴重な一部に関

わる事が出来てとても感謝しています。一日の中で起こったことは忘れたとしても「今日はなんだか良い一日だったな～」と利用者の気持ちのなかで残ってもらえれば幸いです。利用者の人生の一瞬、一瞬に関わることが喜びとなり、ありがたいことだな～と感じています。

これからも利用者とのコミュニケーションを図り、良い援助方法を手探りで見つけていきたいと思っています。

3. きっかけ

そのような私がなぜ国際大学社会福祉学科に入ったかという、実際のところなんとなくです。親父がしている自営の建設会社は、俺にはあんな大変な仕事は出来ないし、母親は病院で看護師をしています。進学するか、就職するか悩んでいたところ、母親から「これからは、医療福祉の時代だからそっち関係に進んでみたら？」と言われました。とりあえずパンフレットを色々漁ると、国際大学に社会福祉学科があり、実家から歩いて5分と近いからいいか、そんな感じで入学しました。

4. 大学生生活を振り返って…

とにかく遊びました！！同時に今までの学校生活とは違い、大学はなんでも自己責任なんだと思いました。単位を取れなかったら卒業できないし、でも遊びたいし…。しかし、月日が経つにつれ楽しいことばかりで入学当分のプレッシャーはいつの間にか忘れていました。

だんだん友達とも仲良くなり、会うのが楽しみで講義が入っている日は毎日通いました。学校が終わればバイトに行き、その後は呑みに行きそんな繰り返しだったことを覚えています。夏は毎年キャンプ、冬はスキーをしに旅行へ行きバイト代

はほとんど遊びのためにあるようなものでした。

私は、小学校の時から唯一必死に取り組めるものが野球だったので、休日は趣味として友達に付き合ってもらい野球をよくしたのも覚えていません。

テスト前になれば、頭に単位という二文字がよみがえり、こりゃ逃げられないな…。現実には引き戻されて、とにかく単位だけは取ろうと思いテスト前は必死に勉強をしました。3年次には社会福祉現場実習もあり様々なことを学び、そんなこんなで、なんとか受験資格と卒業に必要な単位を無事に取ることが出来ました。

5. 4年になり就職活動と受験勉強に向けて…

とうとうこの年を迎えることになりました。就活の時期でもあり多忙でした。実際、四年生を迎えたものの一般企業に進むか、専門職に進むか大分悩みました。最終的な判断は、せっき社会福祉学科に入ったのだから福祉関係に就職しよう決め、知人の紹介で今の職場を面接することになり、無事に内定をもらうことができました。

今度は国家試験という大きな山が立ちちはだかっていました。昔から大の勉強嫌いで、成績も悪く野球しかしてこなかった私にとって大きな試練でした。高校受験も失敗しているし、またあの悪夢がよみがえってきて、国家試験なんて本当に受かるのだろうかかと不安でいっぱいでした。

6. 受験勉強を始めてみると

四年生にもなると周りからほらと「勉強してる？進んでる？」などと聞こえてくるようになりました。人によっては三年生の内から社会福祉対策講座を四年生に混じって受けている人もいて、かなりのストレスになっていました。人それぞれ勉強を始める時期は違いますが、私は九月の後半から始めることにして夏休みはひたすら遊びました。人は人、どうせ勉強で今までみたいに遊ぶことが出来なくなるんだし、持続力が無い私にとってこれがベストなんだと信じ開き直りました。

勉強を始めてみると、とにかく地獄でした。元々勉強嫌いで、頭は悪い、要領の悪さは天下一品、したがって勉強の仕方が分からなくてスタートできませんでした。先生方に勉強の仕方を聞いて

たり、友達はどんな仕方をしているのか聞いて回り、みんながスムーズに進んでいるのを見て羨ましく思い、それがまたストレスとなって、「やばい、胃が痛い、俺はどうしたらいいんだろう」とそんなことばかり考えていました。しかし、そんな状況も日が経つにつれて胃が痛いのも忘れるようになりました。

最終的にたどり着いた勉強の仕方が、とにかく過去問5年分を3回、模擬試験2回分を何回もひたすら読むことでした。まず1回目は、一通り問題文と解説を軽く流す程度でどんな問題が出題されているのか見当をつけるために、流し読みをしました。2回目では、問題文と解説の意味をよく考えながら、問題文の間違っているところを自分なりに解説を見ながら正しい文章に直し、正しい文章はそのまま覚えるというものでした。5年分でも3回目にもなると自然と、「この問題見た覚えがあるな～」といった感じになり、2回目とほぼ同様に意味を理解しながら、自分が正しく直した文章と、元々正しい文章をひたすら意味を理解し覚えることでした。模擬試験も同様です。

一見無謀なやり方に見えますが、読解力の無い私にとってベストなやり方だと信じてました。高校や大学の定期試験はほぼ限られた範囲から出題されますが、国家試験は重箱の隅をつつくような問題や基本的なことまで幅広く出題されるので暗記だけでは通用しないと思い、広く浅くを心掛け問題文と解説を理解し、間違っているところはなんで間違っているのかも考え、意味を理解するようにしました。問題の基本をまずしっかり押さえ、そこから、こんなひねくれた問題が出題されるのではないかと予想を立てながら問題と向き合っていました。人によっては基本さえ押さえとけば大丈夫でしょという人もいましたが、私は少しでも気持ちに余裕がほしかったので、出そうにない問題まで想定しました。

1日中机に座り続けるのは想像以上につらく、でも野球をしている頃の100m坂道ダッシュよりはまだいいだろうと、あの時の方のよっぽど辛かったと自分に言い聞かせながら、野球時代の苦しみと糧となり自分を奮立たせていました。

夏休み明けの第1回目の学内模擬試験をそんなこんなで迎え結果は69点でした。社養協の模擬試

験は69点でした。正直かなりへこんでその日は何も勉強する気になれませんでした。「今まで勉強してきた意味あんの？ どんだけ勉強しろって言うの？」とまで考え、何度も諦めそうになりました。しかし、ここで諦めたら今までしてきたのが無駄になる、1度決めたことは最後までやり抜き通す、それだけの思いで取り組みました。2回目の中央法規の模擬試験結果は84点で基準には届かなかったものの、何とか合格圏内にまでもっていくことができました。まったく余裕が無かったですが、毎年大晦日は霧島の神社に初詣に行っているの、息抜きがてらにお参りに行きました。とにかく合格することだけを願いました。

7. 国家試験

自分が出来ることはすべてやったので、改めて神社に合格祈願に行ったり、お墓参りにも行きました。試験日は雪が降っていて、「明日は早めに出ないと～、本当に受かるかな・・・」とか色々考えていると全く眠れませんでした。

試験当日を迎え用紙が来るまでの間、今まで辛かったこと、友達と励ましあったこと、先生方から色々アドバイスもらったことが走馬灯のようによみがえってきました。とにかく試験が終わるまで気は絶対に抜けない、最後までやりきる、それだけを考え望みましたが用紙が届き、いざスタート！のはずでしたが、今までの出題様式では、○×の四択問題のため、消去法で解けたのに、今回の出題では正しいのを選べとか、誤っているのを選べというやり方に変わり消去法が通用しませんでした。また勉強したような問題がほとんどなく、初めてみるような問題ばかりで悪戦苦闘しました。とにかく試験中苦笑いしたのを覚えています。

午前が終わり、周りで「あの問題簡単だったねー、あそこ難しかったねー」などと聞こえてきても、私には分からな過ぎて、何がなんだか分かりませんでした。速攻でご飯を食べ、参考書とにらめっこ。忘れていたこともたくさんあり、読んだことで逆に不安を煽る形になり、逆効果……。そんな気持ちを引きずったまま、残すは午後のみなので気持ちを切り替えて、とにかく楽しく解こう。午後では自分が勉強したような問題がたくさ

ん出ていて援助技術の事例も割と易しかったので、午前で泣かされた分、手ごたえを感じました。

午後が終わった瞬間、結果うんぬんより開放感で満ち溢れ、とにかく呑みに行きました。翌日友達から「自己採点した・・・」と連絡がきましたが、勉強を始めた時から自己採点はしないと決めていたのでしませんでした。内心ドキドキでしたが。

8. 合格発表

いざ合格発表当日、パソコンの前で時間が来るまでウロウロしていました。試験に全く手ごたえがなかったが、もしかしたら受かっているんじゃないか、そんな期待を込めて待っていました。時間がきてパソコンを開いたはいいものの、なかなか見れませんでした。腹をくくりいざボタンをクリック。。。なーーーーーい。。。何度探しても自分の番号はどこにもありませんでした。悔しくて涙が出るものだと思っていましたが、全然出ませんでした。なんとなく試験を受けた時に覚悟をしていたので。

実際のところ一時かなりへこみましたが、自分の中で諦めるということは全く考えず、気持ちはすでに来年へと向かっていました。「たかが一回落ちたぐらいで、世の中何回も落ちてる人いるんだし、あれだけ勉強頑張ったんだから、またできるさ～」と胸に秘めて。お世話になった方々には不合格の報告をしました。励まされ、いろんな慰めの言葉をもらいました。こんなにいろんな人に応援してもらっていたんだから、来年こそはお世話になった人たちに合格の報告をしてやると！！

9. 社会人スタート

4月の入社式の日には、上司に不合格の報告をし、「また仕事に慣れた7月ぐらいから頑張ればいいがね」と言われました。その時はそのまま素直に受け止めて、また仕事に慣れてから頑張ろうと思いました。

実際仕事に慣れるまでが大変で、利用者が多くて覚えるのが大変、現場では医療用語が毎日行きかっているし、自分は大学でいったい何を勉強してきたんだか、あまりにも無知すぎて毎日が戦いでした。そんなこんなで、文化祭が始まり、夏祭りと行事で追われ、勉強のことを考える余裕すら

ありませんでした。

少し慣れると夜勤も始まり、「そうか、夜勤の休憩時間を使って少しずつ始めていこう」と思いつきました。残念ながら、私の職場には仮眠時間は無く、勉強する時間はとれませんでした。落ち着いた時間を見計らっては参考書を読んだり、色々工夫しましたが、ある先輩からは、「今は、仕事なんだからやめなさい」と注意され、あっさりその日以来止めることにし、家でしかしないことに決めました。

でも実際、家でやってみると全然集中できずイライラが続き気持ちもややもやしていました。やっぱり自分には学校が合っているのかなと思い、休みの日は朝から通い、仕事がある日は、家に帰って、速攻で学校に通う毎日が続きました。試験がだんだんと近づくにつれて、図書館には受験生らしき学生が多くなり、去年の自分を思い返していました。去年みたいには勉強できる時間がとれなく、限られていて、「去年受かってたらここにはいなかったのにな〜」と雑念ばかりわいてきて集中できませんでした。

仕事が終わってから机に向かうというのはとても苦痛でした。それでも自分が持続することができたのは周りの人たちの応援があったからでした。去年とは違い、新カリキュラムということで自分なりに試行錯誤しながら取り組みました。カリキュラムが変わったものの、新しくなったばかりだったので、とにかく去年と同様に過去問5年分を3回、模擬試験2回分を何回もひたすら読むことでした。まず1回目は一通り問題文と解説を軽く流す程度でどんな問題が出題されているのか見当をつけるために、流し読みをしました。2回目では、問題文と解説の意味をよく考えながら、問題文の間違っているところを自分なりに解説を見ながら正しい文章に直し、正しい文章はそのまま覚えるというものでした。3回目では2回目とほぼ同様に意味を理解しながら、自分が正しく直した文章と、元々正しい文章をひたすら意味を理解し覚えることでした。

新しく加わった分野は先生方から教わったり、問題集をもらったりとしました。勉強を進めていくうちに、去年過去問で通った記憶がある、先生からもらった問題集では、新カリキュラムでも過

去問で出ている問題が新カリキュラムに別な形で入っているのかということが度々ありました。去年飽きるぐらいに読んでいたことは決して無駄にはなっていなかったのです。

そんなこんなを繰り返す内に社養協模擬試験がやってきました。去年と比べて勉強量も少なく、正直開き直っていた面もありましたが、82点と点数が取れていて驚きでした。一応合格圏内には届いていてほっとしました。12月の中央法規の模擬試験では88点で点数は届いていなかったものの、自分なりに安定していると思い、今までやってきたことは無駄ではなかったんだとこの時初めて実感しました。それから今まで通り、過去問2年間分の模擬問題集を限られた時間のなかでひたすら読み返しました。

2009年も終る大晦日の日は仕事が終わった後、友達と呑み会を開催していました。今年もやれるだけのことはやったんだから最後の日ぐらいはゆっくりしようとひたすら呑みまくりました。去年は不安で、「どうしよう、どうしよう」とばかり考えていたのに今年はなぜか、死ぬわけじゃないんだし、どうせ落ちたらまた来年また受ければいいしと一度落ちている分、変な余裕がありました。

年も明け、2010年のスタートは夜勤でした。世間はみんな休んでいるのに、職業柄仕方のないことなんですが、「これが社会人ってやつなんだな〜」と実感していました。夜勤明けの日は一日ゆっくりして、3日から気持ちを引き締めて取り組みました。正直この時期に入ってくると、落ち着かなくなり参考書等を読んでも頭に入られません。自分だけかも分かりませんが、人間の心理としてこれが普通なんだと言いつけ、見ないよりは見た方がいいのだと思い、本を眺めているだけでした。職場の協力もあり試験までの3日前から休みをいただきました。試験前日は先生方に今までのお礼に回ったり、得意の願掛けに神社やお墓参りに行き、後はなるようにしかならないと気持ちを落ち着かせていました。

10. 2回目の国家試験

今年は試験会場が違い、自宅から近い情報高校になっていました。会場に着くとどっかで見たこ

とがある連中がいました。去年一緒に頑張った仲間がたくさんいて、受かっていそうな人たちがいて驚きました。やっぱり国家試験は何があるか分からないな～と実感し、軽く同窓会になっていました。部屋に入り去年味わった雰囲気が戻ってきました。周りの人間がなぜか気になり、「みんないろんな参考書読んでいるな～」とか訳の分からないことまで考えていて集中できませんでした。

ここまできたら後は神頼み!!問題用紙、マークシートが届き待つこと数分…。去年とはまた違った気持ちでした。今年は社会人しながらの受験で時間はあまり取れませんでした。やっぱり周りの支えがあってなんとかこの日を迎えることができました。試験が始まり、去年の苦笑いも忘れ、2年分の辛かったことや、去年の悔しさをぶつけてやろうとなんの根拠も無いのに、自信とやる気で突っ走っていました。午前も午後も時間一杯使い無事に終わることができました。やっぱり2回目を経験してみても、あの終わった後の爽快感は忘れません。「さて今年の結果はどうかね～」。そんな感じで自己採点をすることもなく合格発表日を待っていました。

11. 2回目の合格発表

合格発表日は休みをいただき、朝早くから起きてそわそわしていました。発表までの時間、自分の番号を何度も読み返しとうとう時間がやってきて、パソコンを開き、自分の番号を探しました。奇跡じゃないのかと驚きました。そうです、番号があったのです。何度読み返してみても信じられなくて、親に確かめてもらってやっとこれが現実なんだと思いました。1年目、不合格だった時は不思議と涙すらでませんでした。今年は、喜びと2年分の辛かった思いが混じり、涙が止まりませんでした。合格後はすぐにお世話になった先生方に報告に行ったり、応援してくれた友達や職場の上司にも電話で報告をしました。何よりも、大学の高い授業料を払ってくれた親に対し最低限のお返しができただけ嬉しかったです。

12. 最後に

後輩の皆さん、国家試験は確かに自分にとってとても試練だと思います。苦しい日々が続くかも

しれません。でも自分で決めたことは最後まで諦めず貫き通してください。なんらかの形で必ず自分に返ってきます。国家試験の勉強はとても単調で飽きると思います。取得を目指す理由は人それぞれだと思いますが、せっかく社会福祉学科に入ったのですから、その証、つまり集大成として資格取得を目指して頑張ってください。受験勉強を通して、周囲への感謝の気持ち、温かさ、人を思いやる気持ち、絶対に自分に負けないという気持ち等数々の思いを経験し、受験する以前の私に比べて気持ちが強くなったと思います。

2年間で振り返ってみると数え切れない程苦しいことがありました。その中で楽しいことを見つけるのも一つの息抜きになっていました。

人生の内のたった数ヶ月です。大学生活の集大成として、思い出として頑張ってください。皆さんが頑張っていると思うと、私も負けずにはられません。出来の悪い私が2年越しではありますが、合格できたのは最後まで諦めたくないという気持ちがあったからだと思っています。

お互いに頑張りましょう!!



Siro

合格体験記

頑張れば感動

社会福祉学科聴講生

牧 角 壮一郎

2007（平成19）年3月卒業

1. はじめに

在学生の皆さん、キャンパスライフはどうですか？エンジョイしてますか？エンジョイするのもいいですが、目標を忘れないようにしてください。何のために大学に入ったのか、社会福祉学科で自分をどう成長させたいのかをー。

実は恥ずかしながら私は現役の頃あまりにも精神的な波が激しく、勉強もあまりしないまま「どうにかなるさ」の気持ちで臨んだ第19回社会福祉士国家試験には見事に落ちてしまいました。

辛うじて就職はできたものの、決まった就職先は市内の実家よりはるか離れた阿久根市の身体障害者療護施設で働くことになり、大学を卒業するまで何もかも親任せの甘ったれ人生を送ってきた私にとってアパートを借り、住民票手続き、料理、洗濯、掃除は大試練でした。

2. 現場で感じた劣等感

いざ現場に出てみると専門的な資格を持っているのといないのでは雲泥の差。これはあくまでも、私一個人の見方であることを断わっておきますが、資格のある人はやはり仕事に対し気合の入れ方が違って見えました。介護職は重労働ではありますが、介護福祉士を持っている人はその資格に恥じぬ知識や技術を発揮し、自信を持って働いているように思えてきてしまい、介護福祉士、社会福祉士も持っていない、持っている資格は高校教諭免許と社会福祉主事のみの方は、今ひとつ専門一性を発揮できず何をやっても空回り。

試験に失敗したという悔しさもこみあげ「自分とは何なのか」という思いすら湧いてきました。他人と自分を比較し、卑下ししかし自分になってもいました。そんな中でも職場の方々に叱咤激励されながら試験に挑戦し続けました。しかし仕事との両立はすごく困難。そこで第21回の国家試

験の不合格を知った後、母校である鹿児島国際大学の聴講生となり一から勉強をし直そうと考えました。仕事も辞め、実家から通学し、私の聴講生生活が始まったのでした。流石に「今度こそ社会福祉士をとってやる」との思いで勉強を始めた私は気持ちが違いました。

3. 受験の心得

受験講座の際、ある先生が「試験が終わるまでは猛勉強をしてください。その間はデートもなし」と話してくださった時、その場は爆笑の渦でしたが先生の言うことは正論です。この一年間は試験にかける思いで取り組んでください。何よりも仕事をしながらの勉強は本当にきついですよ。私の場合、仕事を辞めて資格取得1本に専念した位です。自慢にも何にもならないけど。

朝9時頃に起きて、月曜日から金曜日は大学の学習室で勉強しました。土曜日、日曜日は自転車で15分の地元図書館で閉館間際の21時まで勉強しました。昼は近く中華屋さんで餃子を買って食べました。CD屋さんで音楽を聴くこともありました。

流石に1日10時間というのはきつかったです。私の場合、剣道が趣味であり、楽しみであるため、毎週日曜日は、道場の朝稽古には必ず参加し、いい汗をかくようにしました。また道場の先輩で社会福祉士の方もいらしたので、剣道も国家試験の勉強にも精を出すことができました。2つ目の楽しみはやはり友達との飲み会。クリスマスデートこそなかったものの、中学時代からの仲の良い先輩と、12月27日に近所の居酒屋で酒を酌み交わした後、カラオケボックスで思う存分、歌って踊って、ストレスを発散しました。

4. 私の勉強方法

国家試験に過去問は不可欠…正しくその通りですが第22回の試験から新カリキュラムとなり出題傾向も変わってきました。そこで、私なりのやり方が皆さんに合うかどうかわかりませんが、私は以下の方法で取り組みました。

- ①過去問を飽きるぐらいに解く…間違った部分は何故違うのか?テキストと照らし合わせながら解くこと。そして、何故正しいのか、違うのか、口答でもいいし、筆記でもいいので説明できるようにする。これが自信へと繋がります。
- ②新カリキュラムのテキストに沿って勉強すること…財団法人社会福祉振興・試験センターが毎年出題基準というのを出しているの、インターネットでも見ることができます。これらに沿ってテキストは作られています。今回の試験も案外、テキスト中心の出題だったのでテキストを使用し、各大・中・小項目(特に中項目)に沿って勉強を進めるとよいと思います。ただ、テキストを全部揃えるのは経済的に厳しい場合、学習室か図書館を利用すると思います。テキストが全て揃っています。
- ③模試は受けること…模試は受けてください。そんなにすぐに結果に繋がらないと思いますが、悪くても諦めず根気よく続けていれば結果はついてきます。ミスした問題、正解した問題も必ず何故そうなのかを確認することをお勧めします。

以上が私の受験勉強でした。非常に地道な作業ですが試験勉強ってこういうものかもしれません。

5. 試験当日から合格発表のこと

意外にリラックスできた!…いよいよ迎えた1月31日の試験本番。今回がなんと4回目の挑戦となった私。「今度こそ」と意気込むところだが、毎日10時間の勉強、模試の結果が飛躍的に伸びたこと、何より周囲からのプレッシャーをあまり感

じることがなかったのか、のびのびと受験することができました。ただし、一番に気をつけていたことは共通科目のみでなく専門科目も絶対に手を抜かないということでした。だから昼休みも専門科目の勉強に徹したのがよかったと思います。よく試験は気力との勝負といいますがその通りだと思います。

自己採点后、92点とそこそこの点数はとれていたもののやはり合格発表が近くなるにつれドキドキ。3月15日の午後1時、PCで自分の受験番号を見つけたときは思わずガッツポーズ!!努力は実ることを実感したのと同時に親や、妹、身内の方々、大学の教員方、元職場の方々等支えてくれた人々への感謝の気持ちで一杯になりました。

6. おわりに

最後に、私からこの社会福祉士国家試験の勉強を始める皆さんに伝えたいことがあります。試験勉強は決して楽ではありません。様々な誘惑、途中で投げ出したり模試の結果が悪く落ち込むこともあると思います。しかし、最後まで諦めなければ冬は必ず春となります。非常にありきたりな台詞だが

頑張れば感動一

この一言に尽きます。グッドラック!

合格体験記

覚悟を持ってより自分らしく

財団法人 慈愛会 介護老人保健施設 愛と結の街

二 田 亮

2006（平成19）年3月卒業）

1. はじめに

私は、現役での社会福祉士資格が取得できず、4回目の挑戦で資格を獲得しました。現役で取得という順調な形ではありませんが、だからこそ得たことを伝えられたらと思っています。

私は、現在、介護老人保健施設で介護福祉士として働いています。今年で4年目となります。利用者の方の在宅復帰、在宅生活支援等を行っています。仕事と両立させながらの試験勉強は、簡単ではなかったと、改めて思いました。だからこそ、得られたこともありました。

2. 思いだけでなく行動

私の場合、卒業後も毎年、国家試験には、挑戦し続けました。学生時代もそうでしたが、国家資格を取得したいという思いは常に持っていました。思いを持つことはとても大切です。でも、思いだけでは、資格に合格することは難しいと思います。その思いを行動に移していかなければならないと思います。

現在もそうですが、その時、そのときいろいろな悩みを持っています。

学生時代であれば、これから先のことだったり、就職のこと、サークルのこと、アルバイトのことや大切な仲間のことであったり、学生時代にしか分からない悩みがありました。国家資格を取得したい思いと、いろいろな悩みを持ちながら、資格試験に向けて勉強時間がなかなか作れなかったと感じています。

それは自身が目標、思いに対し、何をすべきかをしっかり考える時間が足りませんでした。そして、考えたことを行動にすることが出来なかったと思います。自分を見つめ直し考えることで、できると思います。それを行動に移していくことが大切だと思います。

3. 覚悟を持つこと

自身が、実際に変わった時期として仕事に就いて3年目の春でした。職場の上司と今年度の目標、今後、自分はどうしていきたいのかを話をしたときでした。自分の目標、思いを伝えましたが、それらに対しての具体的な行動をほとんど起こしていない自分がいました。このままでは、今までと同じで何も変わらないままではないかと思いました。そのようなことは、絶対にしたくないと思いました。今までの自分に対し、覚悟が足りなかったと思いました。

話をした後、自分は、目標に対して何をすべきか考えました。社会福祉士の資格取得するにあたっては、もう一度、大学の国家試験対策講座を受講してみようと思い、受講しました。このように仕事、試験勉強を両立する覚悟を持って行動に移して行きました。

覚悟を持ってする以上は、自分自身がしていることのいくつかを犠牲にすることや捨てることもあります。同時に自分に対し、何か新しく取り入れることも大事になってきます。また、それを継続していくことが重要だと思います。

4. 時間はつくるもの

何かを取り組んでいく中で、時間は必要です。自分は、時間はつくるものだと思っています。4回目の挑戦にあたって、国家試験対策講座を受講するだけでは、合格することは、難しいことは分かっていたし、対策講座以外に試験に向けて、試験勉強をする時間がいつつくれるか考えました。時間をつくるために、そのときの自分の生活スタイルを見直しました。現在の自分の生活リズムの中のどの部分に時間がつくることのできるか。具体的には、仕事のある日は、仕事の後、1時間でも残って職場の空いている場所を借りて勉

強をしました。国家試験対策講座を受講する日は、対策講座の前後の時間を大学の図書館で勉強をしました。休みの日は、できるだけ図書館に行って勉強をしました。仕事をしている中で、どこで時間をつくることができるか、また、勉強に打ち込める環境を自分でつくるのが大切だと思います。

5. あきらめないこと

国家試験だけでなく、そのほか多くのことに共通していることですが、結果は、すぐには出ないことが多いのではないかと。その場だけ頑張っても、さらには続けていても結果を得ることはなかなか難しいでしょう。でも続けなければ、結果は得られないと思います。あきらめずに続けることがとても大切です。今回、試験の日まで、時間をつくり、試験勉強を続けると覚悟を持って臨みました。諦めなくなる誘惑や出来なくなった理由は、いつでもあり、後からいくらでも並べることができます。でもそれでは、今までの自分と変わっていない、それだけは絶対嫌だと思っていました。最初はせめて仕事の後、空いている場所に勉強道具を持って向かうこと、休みの日は、とりあえず図書館へ向かうことから始めました。

あと、模擬試験もできるだけ受験しました。模擬試験は、合格ラインに達しているかというところも大事ですが、自分のできているところ、できていないところを知って、そのあと、自分はどのように取り組んでいけばいいのか考えて、実行していくことが大切です。

私自身、2回か3回、模擬試験を受験しましたが、合格ラインに達したことは、最初に受けた試験だけで、国家試験に向けての、最後に受験した模擬試験の結果は、一番悪く落ち込んだことを覚えています。それでも、あきらめることだけはしませんでした。それまでの間、少なからず、時間をつくって続けていたつもりでしたし、ここで諦めたら、今までしてきた自分を否定することになると思いました。あと、最終結果を得るのは、国家試験を受けての結果であって、それまではあきらめず続けました。今回、合格できたのは、あきらめずに続けたことだと思います。

そして、国家試験は、今までしてきたことを全

力でやるのみだと思います。

6. 自分らしく、新しいスタート

合格発表の日は、自分の受験番号があったときは、本当に嬉しかったです。同時に、職場の方々、先生方など、今まで支えて下さった多くの方々に対して感謝の気持ちでいっぱいでした。

そして、嬉しい気持ちと、これからが始まりであることを強く感じました。

資格を取得して、改めて仕事のこと専門職としてどのように自分自身、多くのことを学び、活かしていくことが大切であることを実感しました。今後、様々なことを学んでいく中で、今回、経験したことが活かされると思います。

また、自分が学んだり、取り組んでいく中で、多くの人との出会い、支えがあること、感謝の気持ちを忘れずに、日々努力していきたいです。

参考になったか心許ないのですが、自分の目標に対して覚悟を持って臨むことで、より自分らしさを活かすことができるでしょう。そして、自分の目標、未来へ向かっていくことができるのではないかと考えています。

[第6回]

先輩たちは、今・ここで

今ここで振り返ってみて

医療法人 和同会 宇部西在宅総合支援センター

事務次長 山本尚志

1993（平成5）年3月卒業

1. 友人からの突然の連絡

いつもの仕事帰りの運転中、急に携帯電話が鳴り「また職員からの状況報告の電話か・・・」と思いつつ、車を脇に止め、相手先を見ると、福岡の持田君からの数年ぶりの電話でした。

最初は、何で電話をかけてきたのか解らず、懐かしさもあり、お互いの近況報告をしていましたが、突然、「大学に学会誌があって、卒業生の今を書くりエッセイがあるんじゃないけど、次に書いて」と言われました。

2. エッセイを書くことを引き受けた理由

正直、大学に学会誌があることも覚えていないほど、大学とは自分の中ではるか過去の出来事であったような、そんな距離を感じていました。

大学時代の私は、授業こそ出席していましたが、あまり熱心ではなく、アルバイトやサークル活動の方が新鮮でした。ずっと実家で暮らし、一人暮らしを始めた私にとって、鹿児島での思い出はとにかく大きかったのは確かです。

社会福祉士の資格取得についても、卒業した時に取得しておけば少し胸を張ることもできたかも知れませんが、全く勉強していなかったので、卒業と同時に取得できず、卒業して5年、3度目の受験で何とか取得できたような次第です。

そんな私が、持田君から大学の学会誌に、エッセイを書くよう持ちかけられるようになるとは、全くの想定外のことでした。それでも、このエッセイを引き受けたのは、今年40歳になる私にとって、大学に入るまでの18年と社会に出て18年の、ちょうど中間点に大学での4年間があり、これま

での自分の歩みを見直す良い機会になるのではないかと思い、引き受けることにしました。

3. 社会に出てから

大学を卒業したのは、1993年（平成5年）の春。ちょうど、その年の3月25日開設の老人保健施設に、私とほとんど同じ様に、専門学校や高校を卒業したばかりの職員や、介護の仕事は初めてという職員と少しの経験者の約50名と共に私の社会人生活が始まりました。

最初のうちは、老人保健施設の相談指導員といても、社会常識はもちろん、高齢者のことが判らないままで、がむしゃらに利用者、家族の声、上司の怒声を聞きながらの毎日でした。そのような中でも、利用者や家族は相談指導員としての至らなさを感じながら、未熟な私の相手をしてくれたことを今は感謝するばかりです。

その後、老人介護の施策は、要介護高齢者を社会全体で支える仕組みの介護保険制度へと変わっていきました。その流れに私も乗り、老人保健施設の相談員から、同じ法人内の居宅介護支援事業所の介護支援専門員へ異動となり、「走りながら考える」といわれた混乱期を、同じように走りながら考え、施設入所者とは違い、在宅で高齢者の生活を支える難しさと格闘しながら、また介護支援専門員というこれまでに無かった職種を社会に認知してもらおうと、市内で介護支援専門員の協議会を立ち上げたり、県の介護支援専門員協会との連携をしたり、様々な基礎職種の介護支援専門員との交流などに奔走していました。

4. 今の私の仕事

現在、私は、居宅介護支援事業所の介護支援専門員ではなく、事務職として業務をしています。しかし、私自身が考える「人が人を支援していく」つまり、福祉は究極のサービス業であるという考えを、常にベースに持ち仕事をしています。人が人を支援するには、支援する側がブレて対応したのでは、きちんとしたサービス業としての対応ができないと思うからです。

その考えのもとで実践していることは、判らないことや知らないことについては、判るまで調べる、あるいはその道の専門の人に聞き理解することです。判らないままや、中途半端なままや自分がブレたまままで仕事に臨むと、それがそのまま利用者や家族、あるいは法人に迷惑をかけることになります。

そのことは、今の私の仕事を進める上でも、痛いほど痛感しています。介護支援専門員から事務職へ変わった途端、法人内の病院移転と療養病床の再編の話がまとまり、法人内に再編準備室が立ち上げられました。なんと、そこの副室長と在宅総合支援センター次長の2つの職も拝命し、センター次長としての通常業務と再編事業の業務を一手に任せられてしまったのです。

再編業務内容の仕事は多岐にわたり、行政への調整、各種届出書類提出、設計、建築業者との連絡、打ち合わせ、入院患者や在宅サービス利用者、家族への説明、法人内外の様々な職種との調整など、少しでも中途半端に行かない、判らないまま仕事を進めてしまうと、全ての業務がストップしてしまうような状況です。そのため、仕事は一つ一つの根拠を理解、確認し、間違いがないように細心の注意を払いながら進めることになります。したがって時間は連日夜遅くまでかかり、それも初めて経験することばかりです。

5. 改めて、振り返る中で見えてきたこと

これまで過去をあまり振り返ったことがない私が、40歳になろうとしている自分を振り返ると、およそ10年ごとに社会や自分の周辺に色々なことが起こっています。1971年という団塊ジュニア世代に生まれ、大学卒業時（1992年）にはバブルが崩壊し、ちょうど各地に老人保健施設が続々と設

立され、30歳目前（2000年）で介護保険制度の荒波が覆いかぶさり、また40歳目前（2010年）で、病院移転再編という法人始まって以来の大事業に関わり、あまり経験することのない貴重な体験をさせていただいています。

これも宿命と感じながら、日々押し寄せてくる仕事に対して、不安を感じながらも対応しています。確かに時には、つらいこと、大変なこともあります。しかし、これまで仕事に関わってきた人たちが、様々な面でフォローしてくれたり、助言をしてくれ、私自身が人に支援されながら、ブレずにここまで来ることができました。

6. おわりに

学会誌を使い、思いつくままを脈絡も無く書かせていただいた文章を読んでいただき、ありがとうございました。

こんな卒業生が、鹿児島から離れた山口の地で仕事をしているのだと思って頂けたら幸せに思います。



先輩たちは、今・ここで

3 Y = やばいっ、やっぱり頑張らなきゃ、やるっきゃない

医療法人 仁愛会 仁愛会病院 池袋広美
2007(平成18)年3月卒業

1. うんうん!受験生って感じ!!

大学に入ったのは今から約8年前。親元を離れ、アパートに1人暮らし。友達やサークルの先輩に恵まれ、のほほんと充実した大学生活を送っていた私。しかし、大学3年生になると、学生掲示板の「社会福祉士」という文字がやたら目につくように。そう!!私はこの「社会福祉士」になりたくてこの大学に来たのだ!

何となく過ごしていた毎日も、3年の現場実習が終わると、徐々に国家試験の準備モードに突入。とりあえず、過去問題集を買ってみた。重要ワードに蛍光ペンで線を引いてみて、勉強した気分。「うんうん!受験生って感じ!」と自己満足。だが、実際に小テストがあると、さっぱり理解出来ていない自分に気付かされる。「あ〜やばい…まだバイトしているからだ。」とアルバイトのせいにして現実逃避していた。そんなこんなで、4年生になった。皆が本格的に就職活動や受験対策へ。

2. 受験後は、理事長さんの写真を拝んで

夏休み後の模擬試験の結果を見て絶句…。笑えない時期にきていた。合格率3割という言葉が頭をよぎる。「親が一生懸命働いて高い授業料から生活費まで出してくれているのに。」「お父さん、お母さんごめんなさい。」と心の中で懺悔の日々。そんな諦めモードに入っていたところに、友達が「大丈夫!諦めるのは早いよ!私も不安だよ。一緒に頑張ろう!」と励ましてくれた。それからというもの、私はアルバイトを辞めて、今まで縁のなかった図書館に通う日々になっていた。「やるっきゃない。」

寒い受験当日。受験番号の下3桁は「202」。「あ!アパートの部屋と同じ数字!」何か縁を感じた。試験後、力尽きた。当時の試験会場は鹿児島情報高校で、玄関入口には大きな大きな理事長さんらしき人物の写真が壁に飾られていた。帰り際に訳もわからず、その方に向かって「もう、こ

こ(試験会場)へは来たくありません。どうか受かりますように。」と勝手に拜んで会場を後にした。合格発表前に卒業。皆それぞれの新しい場所へ。

3. 介護の仕事を甘く見ていた自分

卒業後は、まず介護現場で仕事をした。大学時代に施設実習をさせてもらったことがきっかけだった。「介護現場って楽しい!」と思い、不安よりも楽しみの方が大きいまま、現場へ飛び込んだ。

しかし、実際はとてもハードだった。大学の現場実習では、「見学」で済んだおむつ交換も入浴介助も実際にしてみると時間が掛かるし、思うようにスムーズにいかない。時には怪我をさせてしまうのではないかと怖くなることも。介護の仕事を甘く見ていた。夜勤は、夕方から翌朝まで。深夜3時のおむつ交換は、睡魔と闘いながらフラフラ。明け方には、利用者を1人1人起こして洗面・水分補給を。睡魔に加え、空腹も襲ってくる。

ある日、「疲れた…。」と心の中で眩いていたら、「アンタも大変ねえ。若いのに。ばあさんの尻ばかり見て回って。アハハ…。」とベッドの中から寝ぼけた利用者の声。すごく笑えた。笑ったら疲れなんかどこかに吹っ飛んでいた。今思えば、利用者とのそんな何気ない会話のやりとりが毎日楽しかった。おかげで自分たちが日頃使わない、おじいちゃん、おばあちゃんならではの鹿児島弁が上手になった。

4. そこまでして仕事をするの?辞めれば?

仕事に慣れてからも、家に帰り着いたらご飯を食べなくても、疲れきっていつの間にか寝ている日が多かった。また肌の弱い私は、夏場でもあかぎれをするほど手はボロボロ。毎月、皮膚科に通う度に「そこまでして仕事をするの?辞めれば?」と先生に言われていた。「もう少しだけでもしたいんです!」と…。

気がつけば、本当に心の底から介護の仕事に「やりがい」を見出せている自分がいた。介護に携わった人にしか、味わえない色々な気持ち。利用者様や家族の「ありがとう」の声が一番のご褒美だった。「あなたたちみたいに高齢者を看ってくれる人がいるから、私たちは安心して働いているから、本当に感謝しているよ。」と言ってくれる利用者の家族。「3K」=「きつい」「汚い」「危険」といわれる介護の仕事。マイナスのイメージがやたら多いのが現状。在学中に、先生に「介護現場は最低3年ないと全ては見えない。3年いて初めて介護を知る。」と言われたことがあった。そんな私がくじけそうになった時に、皆の何気ない温かい言葉が、「やっぱり頑張らなきゃ。」という気持ちにさせてくれた。

今思うと、あの頃は自分のことで精一杯だったと。余裕が無さすぎた自分に反省。私たちにとっての特養（特別養護老人ホーム）は、利用者にとっての「家」。「もっと利用者の声に耳を傾けておけばよかったな。」「優しい声掛けが出来ていたかな？」と今更思う。辛いこと、悲しいこともあったけど、それ以上に毎日お腹の底から笑って介護の仕事に携われたこと、幸せでした。

少しして同級生から「知っている病院で、今度、ワーカーを募集するから受けてみたら？」と電話があり、夜勤明けに見学に行った。温かい感じの印象に惹かれて、気がついたら応募していた。

5. ソーシャルワーカーの仕事って？

教科書に載っていることだけがワーカーの仕事ではない。それを国家試験が受かっただけのペーパー社会福祉士の私は、実際働いてから知った。入院患者の申請書類のことで市役所に代行申請、タクシー予約や洗濯業者への依頼、遠距離の家族の場合は金庫番まで。最初は「え?!ここまでのなの?」と思った。でも、どうしても出来ないことはサポートする。あくまでも一定の距離は保たないといけない。慣れ合いになり過ぎてはいけない、難しい距離感。

患者を取り巻く環境・家族構成・経済状況・使える制度・退院後のことまで、皆様々。私の受け持ち患者のほとんどが、「回復期病棟」という入院期限がある患者。病名で期限は決まっているが、最長でも6ヵ月。その期間の中で毎日コツコツリハビリをしている。突然の病気で、受容出

来ない方も少なくない。みるみるよくなる人、思うようにリハビリが進まない人、寝たきりになる人も…様々。

「このような状況でも退院をしないとイケないのですか?」と言われたことは何度もある。国の制度とはいえ、今まで入院し毎日してきたリハビリを、通院で週1,2回しか出来なくなるという話は残酷なもの。私たちは、入院期限の延長については何も出来ない。しかし、この決まった期限内にソーシャルワーカーとして、どれだけの情報提供を出来るか?患者の退院後のことを見据えて支援をしていける。「ソーシャルワーカーがいてよかった。」と思われるように、これからも努めていかないとイケない。入職当初は、PHSが鳴る度にドキドキ。「まずい、また何かやらかしたかな?」と焦ることが多かった。

6. そして今、「雰囲気が出てきた」と言われて

1年が過ぎ、患者やその家族や先輩ワーカーから「もう慣れたね。」「雰囲気が出てきた。」と言われた時はとても嬉しかった。でも、専門職としての知識が少ないことで、患者やスタッフに迷惑をかけたこともしばしばあったのも現実。自信がないことや、分からないことは実際に沢山ある。相手に迂闊なことを言っただけではいけないから、「確認させてください。」と言って一度、その場を立ち去る時は何だか切ないけれど、これも経験。積み重ねていくしかないと自分自身に言い聞かせている。

月に何度かソーシャルワーカーの研修会や勉強会がある。参加する度に、講師の方や先輩方の話に刺激を受ける。この仕事を選んでここにいる今、「一期一会」という言葉の意味を強く感じている。

「無駄なことって何もない」と。まだまだこれから様々なケースが待ち受けていると思うと、今は不安よりも期待の方が大きい。そういえば、最初は介護の仕事をしていづつかは病院のソーシャルワーカーをしてみたいと同級生に話していたことが懐かしい。

最後に、福祉の仕事に携わることになるかもしれない皆さんといつか一緒にお仕事出来る日を楽しみにしています。

先輩たちは、今・ここで

自分らしく-多くの出会いを通して

鹿児島県美容生活衛生同業組合・鹿児島県美容専門学校

山元一輝

2002(平成14)年3月卒業

1. はじめに

平成14年4月に大学を卒業し9年、あらためて思い返してみると、9年間で多くの方と出会い、またいくつかの職場を経験することによって多くの事を学ばせていただきました。

社会福祉関係の職業に就いたことがありませんので、どのようなことを書いていけば良いのか悩みましたが、とりあえず、「自分らしく」書いてみようと思います。

2. 経済大社会福祉学科を選んだ理由

私が社会福祉学科に進学した理由は、あまりはっきりとしたものではなく、経済学部と社会学部の2学部4学科の中で一番人気がある学科だったからというあいまいな理由からだったと思います。また、高校までの通学に1時間程度要していたため、大学を選ぶときはなるべく近い所が良いと思っていました。そんな安易な気持ちで地元坂之上にある、それも歩いて10分の鹿児島経済大学を進学先として選択したので、入学してすぐの頃は、社会福祉関係の講義を受けてみて、やはり別の学部や学科を選べば良かったと後悔することもありました。そんな気持ちが変わっていったきっかけは、講義にも慣れてきた大学1年の夏ごろだったと思います。

3. あなたにとって「福祉」って何？

「あなたにとって『福祉』って何？」大学1年の夏、入院していた祖父のお見舞いに訪れた病院で、私が国際大・福祉学科に通っているということを知った一人の看護師からそう訊ねられました。入学して半年ぐらしか過ぎておらず、問かけの真の意図が解らなかった私は、単純に教科書に記載されていて、覚えていた福祉の定義をそのまま答えたところ、「試験の解答としては間違

っていないかもしれないけど、本当に聞きたいのは貴方が考える『福祉』という言葉の意味だ。」と返され、そのときの私はこの問いに答えることができませんでした。

そして、「これが正解というわけでは無いけれど、『福祉』と言う言葉は『福=幸せ』を『祉=その場に留めておく』と思いながら今の仕事を続けている。」と話されていた事を今でも覚えています。

今となってはいつ頃だった正確に覚えていないのですが、掲示板で募集していた情報処理センターの学生インストラクターに応募してみることにしました。インストラクターの仕事は、学生がレポートや課題制作の時に必要となるワードやエクセル、メールの操作を教えるというものでしたが、私自身パソコンは大学に入学してから覚えたものなので、あまり自信はありませんでした。しかし、2人1組でアルバイトをするので、分からないことがあっても大丈夫だと言われ、とりあえずアルバイトの話を引き受けてみることにしました。

最初は分からないことも多く、いろいろと教えてもらうことの方が多かったものの、少しずつアルバイトにも慣れ、様々な質問に答えられるようになっていき、自分自身のパソコンに関する知識も深まっていきました。分からないことを誰かと一緒になって解決していく事のおもしろさは、このアルバイトを通して学んだと思います。そして気がついてみると、大学卒業までの3年間、ずっと続けていました。

3. 国際大を9年かけて卒業して

今ほどでは無いにせよ、私が就職活動をしていた頃も、就職氷河期と呼ばれており、就職できな

そのようなこともありながら、なんとか4年間

を過ごし、無事大学を卒業することができましたが、大学在学中に真剣に進路について考えておらず、また、福祉関係に進みたいと強く考えてもいなかったため、就職活動はあまり行っていませんでした。また、当時も就職難と言われていたため、就職が決まらないことにあまり深刻になっていなかったように思います。

そのような中で、学生の頃情報処理センターの学生インストラクターとして活動していたことなどがきっかけで1年間大学の附属図書館でアルバイトさせていただき、その縁で平成15年4月から、期限付職員として大学教務課で働くなかで、尊敬する多くの先輩や同期、後輩達と出会えた事は本当に幸運なことであったと思います。あくまでも非正規職員でしたので、4年間勤めてようやく「このままじゃ先が見えない、ずっとここで仕事をしていきたいけどこのままでは駄目だ。」と思い、就職活動を再開することにしました。勤務を終えた日、この日は私の中でようやく大学を卒業できたと感じた特別な一日となりました。

4. 就職活動をする中でみえてきたこと

大学を辞めて、就職活動を行っていったのですが、今思うと就職活動はとても楽しかったです。学生の時にあまり活動していなかったため、一からのチャレンジだったこと、そしてもともとすぐに仕事が見つかるとは思っておらず、20社ぐらいは採用試験を受け、多くの人と会い、自分がどのような評価を受けるのか試してみたいと思っていたことが良かったのではないかと思います。そのため、不採用になった理由を自己分析し、それを次の募集に活かし、次の採用で不採用だったときはまた自己分析を行う…という一連の作業を、自分なりに楽しむことができました。

私の場合、今までの仕事の経験を活かそうと必死になっていたのを止めて、学生時代に何をしてきたかを素直に書き、それを伝えようとするようになりました。

5. おわりに一仕事をする中でみえてきたこと

今、私は鹿児島県美容生活衛生同業組合及び組合立の鹿児島県美容専門学校で勤務しています。美容組合は、組合員である県下約1500店舗の美容

室が安心して営業を続けていけるよう、経営面、生活面でのサポートを行っていくことが目的の組織であり、鹿児島県美容専門学校はそうした組合員の方々が、自分たちの後継者となる人材を育てていきたいという目的で創立された組合立の専門学校です。

組合の仕事として担当している融資に関する仕事では、新しく美容室を開業したいという人がスムーズに開業できるよう一緒に創業計画を作成し、金融機関から融資を受けるための準備を行ったり、すでに美容室を開業している美容師の方が、安定した経営を行っていくために金融機関からの融資で設備の更新を行うための申請書類と一緒に作成したりしています。また、美容学校の仕事としては、学費の面で美容師になりたいという生徒が学校に通えなくなることがないように、生徒や保護者からの奨学金に関する相談などを行っています。

大学1年の夏に私が答えることができなかった、「あなたにとって『福祉』って何?」という質問にまだまだ明確な答えが出せるとは思いませんが、今の仕事を通して少しずつ答えを探して行こうと思います。

[第3回]

鹿児島からの福祉・最前線

高齢者福祉の現場から

都城市役所 堀ノ内 猛
1986（昭和61）年3月卒業

1. はじめに

私は、今宮崎県都城市役所に勤めています。学生の皆様は「都城市」がどんなところかご存知でしょうか？人口は17万人を有し、南九州では鹿児島市、宮崎市につぐ市となっています。平成の大合併で鹿児島県とは、霧島市・曾於市・志布志市と接する、牛・豚・鶏産出額日本一の「畜産のまち」であります。

それでは、これから学生時代や今まで携わった仕事を振り返りながら、そこから見えてきた現在の福祉（高齢者福祉、主に介護保険）を取り巻く現状を伝えていきたいと思います。

2. 久しぶりの大学と福祉との出会い

昨年4月、資格証明書を取りに久しぶりに本学を訪れました。10数年ぶりの本学は、グラウンドがきれいに整地され真新しい建物、証明書を受け取ったカウンターは明るく、私が学生のころとぜんぜん違う光景でした。

当日は、オリエンテーションだったらしく、希望を持った皆さんを見ていると28年前入学した自分を思い出しました。

昭和57（1982）年社会福祉学科に第1期生として入学するまでは、私は、福岡に住んでいました。高校生のころは部活動でバドミントンをやっていた今とは比べることができないくらい痩せておりました。その当時は、福祉の「ふ」さえ知らない学生でした。

その後、「親不孝通り」（現在は、親富幸通り）で有名な予備校に通いました。予備校時代は、なかなか学力は伸びず不安だらけの毎日でした。ところが、本学の社会福祉学科開設の記事を見て、

新しいものが好きな自分には、希望が少し見えてきたような気がしました。

3. 学生時代

当時鹿児島までは、特急「有明」で5時間かかり1日がかりの移動でした。その中で知り合いのいない街で不安な時間を過ごすこととなりましたが、桜島の堂々たる姿は自分を奮い立たせる風景で、毎朝、アパートから桜島を見ることが毎日の日課となりました。

高校時代に右ひじを壊したせいか、スポーツのサークルに入ることができず、一時期文科系のサークルに入った時期もありましたがすぐにやめ、学校とアパートとの行き来の生活が4年間続きました。しかし、深夜番組が少なかった当時、よく友達とお酒を飲んで夜中まで語り合い、「将来の福祉はどうなるのだろうか」や「年金は将来なくなるのではないだろうか」とか、今でも思い出す貴重な経験でした。

4. 就職活動

4回生になった自分は、就職活動をしなければなりませんでした。福祉に関する求人はほとんどありませんでした。当時の福祉施設は2・3月にならないと求人が出せない状況で少しの病院関係や福祉施設の求人があったように覚えています。

その中で真っ先に受けることができたのが公務員の試験でした。家庭裁判所の調査官補や国家公務員・鹿児島県庁を受け、地元だった福岡市役所も受けました。しかし、鹿児島県庁の1次試験に受かったのですが、2次で落ち、医療機関のソー

シャルワーカーとして仕事ができるよう医療機関も受けましたがうまくいきませんでした。その後、宮崎県出身の同級生から教えてもらった都城市役所を受け、なぜか合格してしまいました。

5 福祉老人課

昭和61(1986)年4月、大学卒業後すぐに宮崎県の都城市にやってきました。右も左もわからない町で役所に入って配属になったのは、福祉老人課でした。最初の担当は、福祉の庶務的な仕事で、慰霊祭や日本赤十字社、そして当時事務局があった社会福祉事業団の事務を補佐していました。

その後、「福祉課」と改名し、3年後には高齢者福祉担当となりました。当時は、景気が回復し、高齢化社会に対応できるように「ゴールドプラン(高齢者保健福祉推進10ヵ年戦略)」が制定され、在宅三本柱(ホームヘルプ、ショートステイ、デイサービス)を中心に、特別養護老人ホームやデイサービス等の施設整備やホームヘルパーの養成等に予算がかなりつきました。ホームヘルプ・デイサービスを担当していたころは、1日7~8件の在宅での調査や処遇困難の在宅ケースを何件も抱え、非常に忙しい経験をさせてもらいました。当時は、行政側が窓口となり、介護プランやサービスを考えなければならない時代でした。

在宅担当から、養護老人ホームや特別養護老人ホームの措置担当となり、「ゴールドプラン」で検討されたいろいろな方針は、当初の予定より高齢化が急速に進んでしまい、平成6(1996)年に「新ゴールドプラン(高齢者保健福祉5ヵ年計画)」を策定しなければなりません。この計画では、在宅介護の充実に重点を置き、ヘルパーや訪問看護ステーション設置など目標とし、2000年の「介護保険法」成立を迎えますが、この「新ゴールドプラン」計画を置き土産に8年間の福祉の現場を後にしました。

その後、教育委員会や戸籍の窓口等いろいろ経験させてもらい、2009年養護老人ホームの主任生活相談員として福祉分野に配属されました。

6. 養護老人ホーム

都城市では、平成18(2006)年1月隣接した4町と合併がありました。合併した町にはそれぞれ

直営の養護老人ホームがあり、偶然にもそこに配属されたわけです。まさか直接処遇する側になるとは思いませんでした。市役所に採用されたときは、配属される機会はあり得なかったからです。

「介護保険」が始まって10年になりますが、それぞれの特別養護老人ホームの待機者が100人を超える施設があるなかで、養護老人ホームでは退所する(死亡や介護を要する状態)人が入所する人を超えており、定員を割れています。また、有料老人ホームや軽費老人ホームなど選択肢が増える中で養護老人ホームのあり方が問われています。しかしながら、ホームレス(わが町にはすくないが)や無年金者の処遇、また近年増大している近親者からの暴力(DV)からの避難等を考えると存在意義は大きいと思われます。

主任生活相談員として学生時代や今までの各職場での経験が活かされる場に配属され、福祉の相談や各種の医療相談もとても楽しかったです。毎日高齢者の方々の顔を見て、大いに話し、わがままを聞いたり、難しい局面になると本学出身の後輩である市内の医療機関のケースワーカーに相談したりと、日々楽しい職場でした。

だが、平成15年の地方自治法の改正により、「公の施設」も民間活用ができるようになり、養護老人ホームも「指定管理者制度」を採用し、配属先の老人ホームは近くに特別養護老人ホームやグループホーム等を経営している社会福祉法人にお願いすることになりました。たった1年間の配属となりました。

7. 介護保険

平成22(2010)年4月からは、合併した町の中の総合支所にある「健康福祉課」に配属されました。本庁では、障害者福祉・高齢者福祉・介護保険・児童福祉・生活保護・地域福祉・成人保健・母子保健といった部署が合わさった職場です。

その中で、主に介護保険を担当しています。そして、偶然にも「第5期高齢者福祉計画及び介護保険事業計画」策定に関わることとなりました。

平成24(2012)年からの3年間の介護サービス量を決定し、保険料を設定するための会議です。

皆さんもご存知のとおり、「介護保険」は、介護が必要になっても、①住み慣れた地域や住まい

で、②自らサービスで選択し、③自らの能力を最大限発揮して、尊厳のある自立した生活をおくれるよう2000年に創設されました。しかし、高齢化の急速な進展や、地域社会や家族関係が変容していく中では、さらに制度の見直しが必要です。介護保険が始まって9年間で介護サービスを受ける高齢者の数は2.6倍となり、予想以上に介護を必要とする人数や必要とする介護サービス量も増大しています。

昨今、介護を苦にした介護殺人や介護自殺といった事件など、家族や地域では抱えることができない、介護サービスだけでは解消しない、制度外のサービスを含めた包括的なシステムづくりの必要性が高まっています。

介護給付が増大する中で、各地域ではそれぞれ必要とするサービスがおのずと違ってきます。今回の計画では、「日常生活圏域ニーズ調査」を行い①どこに、②どのような支援を必要としている高齢者が、③どの程度生活しているのか等をよりの確に把握する必要があるとしています。このような厚労省の提案を受けて本市でも「ニーズ調査」を2011年初めに行うよう準備しています。

他方、サービス量が拡大する中で給付と負担の関係が明確なため、給付負担割合を増やすとか保険料の値上げといった議論が始まっています。

8. おわりに

卒業をして福祉に携わった当時と介護保険制度がすでには始まって数年後に福祉の現場に戻って、大きく様変わりしたことに愕然といたしました。たしかに、以前のサービスは、必要としていても行政側が決定したサービスしか受けられず、対象者も限定的となりました。しかし、介護保険が始まってからは介護を必要とする人が誰もが利用ができる制度に変わったわけですから非常に使いやすくなったのです。

現在、福祉サービスを必要とする方々が年々増大する中で、福祉の現場では離職率の高さや賃金の不安定さなど表面に大きく浮き彫りになりました。福祉の職へ進もうと思われる皆様には不安感を持っておられる方もいるかと思いますが、福祉の現場に多数の若い方々がおられる光景を見ますと安心感を覚えます。

福祉の現場では、業務を担う職員の資質の向上に努め、業務体制が円滑に実施できるような人員配置について円滑にできるように検討を始めており、専門的知識をもった皆様を必要していると思います。介護保険やサービスばかりでなく、人々が直面する生活に関することなど広く学習され、職に就かれても専門性を磨かれるようにがんばっていただきたいと思っています。



エッセイ

自分にとって、とりあえずの快拳

1年 木場 智美

1. あまり眠れなかった入学式前夜

晴れやかな気持ちで入学式を迎えるはずだったのに、この日を絶望的な気持ちで迎えた。

入学式のちょうど一週間前。まだ冬の寒さが残る三月下旬、友人と二人で初めて国際大学を訪れた。丁度、大学も春休みでキャンパス内はあまり人気がなかった。そのこともあってなのか、これから始まる大学生活が全く思い描けなかった。

私がこんな気持ちでいたのには、大きな理由がある。私は本学が第一志望の大学ではなかったのだ。その上、三月中旬まで某国立大学の後期試験を受けるため受験勉強に励んでいた。後期試験の結果発表の後、その日には本学への入学手続きを終えた。忙しさで気を紛らわせていたものの、ようやく準備を終えた入学式前夜は様々な思いが交錯し、あまり眠れなかったことを今でもよく覚えている。

2. サックスやらない？と近づいてこられて

入学してからは、新しく始まった生活に戸惑い、毎日がとにかく不安で不安で仕方がなかった。その上大学での目標もなく、何を学び何のために勉強すべきなのか、あの時は本当に分からず毎晩毎晩泣いた。本気で学校を辞めようと何度も思った。とにかく苦しくて苦しくて毎日が自分との葛藤の日々だった。今になってあの頃の自分を振り返ると、よくもまあ、あれだけ苦しんだもんだと思わず笑ってしまうが、あの時は自分を悲観してばかりだったと思う。

新入生のオリエンテーションを終えて教室から出た時、サークル勧誘に捕まった。「サックスやらない？」と吹奏楽部の先輩が近づいてきた。中高6年間、吹奏楽をしていたのもあって、やってみようかなと軽い気持ちでサークル見学へ行き、そのまま入部した。これが、私にとって大きな転機となった。サークルが始まってからは、とにかくサークルが楽しくてそのために学校へ行ってい

たようなものである。嫌で仕方なかった大学生活に楽しみができ、少しずつ本来の明るさを取り戻していった。

あの時、私を勧誘してくれた先輩が誰だったのか私自身も覚えていないし、たぶん、先輩の方も覚えていないだろうと思う。だが、ちょっとした人との関わりがこんなにも自分を変えてしまうなんて今まで思いもしなかった。人との関わりが、自分の人生にこんなに影響してくることを大学に入ってからようやく理解した。人との出会いをもっと大切にしていこうと思った。また、可能な限り率先して沢山の人の関わっていきこうと思った。人との出会いは、一期一会。他人の人生を変えられるだけの大きな力は私にはないが、あいつに出会えて良かったと一人にでも思ってもらえるような人間になりたいと思うようになった。

3. 新入生ゼミとの出会い

私にとっての大きな出会い。もう一つの出会いは新入生ゼミとの出会いである。将来、ソーシャルワーカーとして社会に出ることを目指す私たちにとって一番必要なもの。それは、他者とのコミュニケーション能力である。新ゼミで簡単なレクリエーションを通して、他者との関わり方を学んでいった。最初は簡単に自己紹介からだったが、自己紹介一つでも個性が表れる。ユーモアを交えながら和やかな雰囲気ですす人もいれば、恥ずかしそうにボソボソと話す人もいる。表情や話し方、特有な雰囲気など当たり前のことなのだが、個人個人でやはり異なる。接する相手によって、アプローチの仕方を変えていく必要がある。

私はなかなか初対面の人と上手く話をする事ができず、あまり知らない人と話すことが正直苦手だった。元々、人見知りであるのもあるが、あまり話す機会のない人と話すとなると妙に緊張してしまい会話が続くことがなく、気まずい時間を過ごすことが多かった。そんな私を変えること

となった一言、「相手の話を聞き出す前に、まず自分のことから話せ」。この一言は私にとって衝撃的であった。今まで相手の話を上手く聞き出せる人こそが、話上手であると思っていた。だが、その前にまず自分のことも上手く話せなければならないことを知った。

授業でも、実際に一対一でクラスの人から話を聞き出すという機会が設けられたが、思った以上に難しかった。私たちのペアはどちらも消極的で、お互い上手く話しを聞き出すことができなかった。その時、ペアの人の「どっちもあまり相手に迫っていかないから話せないよね」という一言にはっとした。どちらも消極的であるならば、どちらかは積極的になる必要がある。逆に、どちらも積極的であるならば、一人は受け身になる必要がある。プロとしてクライアントと接する際も、クライアントに合わせて臨機応変に自分の立ち位置を変えていく必要があることを学んだ。

4. 少し早いけど、人生いろいろ

初対面の人を目の前にするとがちがちに緊張してしまうくせに、人と関わることが大好きという私。人の笑顔を見ることが大好きで、自分の言った冗談で笑ってもらえた時は嬉しくて仕方がない。

高校時代まで、バイトができなかったので大学に入ったら絶対バイトをしたいと思っていた。夏休みから面接を受け始めたが、何度も落ち続け諦めていた頃に出会ったのが今のバイト先である。レジをしているが、機械音痴の私は悪戦苦闘、エラーを出しては、社員さんに泣きつくのを繰り返す。なんとも情けない自分であったが、逆にそれが社員さんや同僚には面白かったらしく、今では「こぼちち」と呼んでもらえるようにもなり楽しく働かせてもらっている。

だが、同時に人間関係で悩むことも多々ある。大学に入ってからも、なかなか上手くいかず塞ぎこんでしまった時期もあった。人間一人では生きられない以上、この苦悩から逃れられない。だが、救ってくれるのも同じ人間。高校を卒業して以来全く逢ってなかった友達と、夏休みに集まる機会があった。世間では名の通った国公立大学に進学した友達が、「偏差値の高い大学に行ったら、人

間関係が楽だと思ってたけど、やっぱそんなに甘くはなかったよ。」とポソツと言った。私の通っていた高校も世間では名の通った進学校だった。朝補習から始まり、毎日小テストや課題に追われ、模試を受ける度に偏差値を突き付けられ、本当に勉強漬けの毎日だった。それがお互いの団結力を固めたのか、高校時代に培った友情は今も変わらず続いている。

私たちが一人で頑張ったり、慣れてない人や場所で生きていけるのは、いざとなるとお互いに依存し合える関係があるからだと思う。家族、友達、先輩、後輩、恋人、関わりあい方はそれぞれだが、単純に純粋に人と関わる楽しさ、喜び、幸せだけは忘れずに生きていきたいと思う。少しオーバーな言い方かもしれないが、今日まで生きてこれたのも沢山の人の手助けのおかげだからである。これからは沢山の人の手助けに出会い、生きていこう。

5. 自分にとって、とりあえずの快挙

実際、大学に入学してから一気に人間関係の幅が広がった。その中で学んだこと、相手の話を聞く時は、自分の価値観や先入観は極力取っ払うこと。生きてきた背景も、歩んでいる人生も異なるわけだから、当然考えていることも捉え方も自分と違う。自分が持っている価値観なんて本当にちっぽけなものだと思い知らされることばかりである。

だが、大学には本当に様々な経歴を持つ人ばかりだし、バイト先でも幅広い年代の人と関わることで、入学時よりも少しは広い視野で見られるようにはなったと思う。絶対こうであらねばならない！と固定観念が強くあまり融通が利かなかった自分にとって、とりあえずの快挙である。

エッセイ

見つけることができた新しい自分

1年 加治佐 なつき

1. はじめに

入学して3ヶ月間、新入生ゼミでたくさんのお話を学ぶことができ、考えることができました。高校生と大学生の大きな違いや、大学生生活の送り方を知り、クラスで簡単なゲームをしてみんなと交流することもできました。ここでは、新入生ゼミを中心に大学生生活3ヶ月を振り返って、自分なりに大学生とは何かについて考えてみました。

2. 新入生ゼミで印象に残っていることから

最初のゼミでは緊張しましたが、少人数ということもあり、少しずつ慣れていき、毎時間楽しく過ごすことができたと思います。特にゲーム感覚での自己紹介は今までしたことがなかったのですが、初めて緊張することなく楽しくできたことを覚えています。みんなの顔と名前をすぐに覚えることができ、共通点が出てくると不思議と親近感が湧いた気がしました。

また、「ゆうかり」を輪読し、それについて1人ずつコメントしていく授業では、みんなの考えを聞くことができましたが、自分の考えをまとめ、伝えることはとても難しかったです。しかし、先生が「間違いなどないから、自分の考えを言ってごらん」と言ってくださり、簡単なことでも、素直に自分の考えを伝えることができるようになりました。同じ考えを持っている人から共感を得たり、自分が伝えられるようになり、前向きになれた事が嬉しかったです。

3. 「ゆうかり」の輪読を通じて

その「ゆうかり第9号」を読んで1番印象的だった作品は、鳥丸みなみさんの「進んで振り返って前を見て」という作品です。

大学にいた頃の自分のことについて書かれていました。毎日遊びやバイトに明け暮れ、目標を持っていませんでした。目標を持って、やりたいことの為に頑張っていた友人達に比べ、自分は目

標がなかったので、何がしたいのだろう？と、自問自答していました。そんな時に、友人に思っていることを打ち明け、自分も夢に向かって進みたいと思い学校を辞めました。

親に甘えていて心配をかけてしまい、自分が自立するために家を出て正社員で働こうと思い、自分のやりたいデザイン・ファッション系の会社に決めました。仕事の幅が広がり、今は楽しく仕事をしています。学生の時は後悔しない人生にすると考えていましたが、今は失敗してたくさん後悔することによって、自分が成長していけたらと思っているそうです。

この作品を読み、今の自分に目標が無く、なんとなく学生をしているという状況が一緒だと思いい、レポートや授業が中途半端になっていて、責任の無さや周りに甘えていることに気付くことができました。今まで、後悔してからでは遅いから、やることはしっかりやらなきゃと考えてきたけど、後悔することによって学ぶことができ、そこから成長することもあるということが分かりました。

また、学校という環境だけでなく、全く違う環境でも様々なことを学ぶことができることも分かり、今興味があることを目標にしようと考えました。どんなことでもいいから、1つ目標を持つことで生活に変化ができ、今まで以上に楽しく過ごすことができると思いました。

4. 私が立てた小さな目標と結果

先述したように私は、自分の考えを人に伝えることが苦手でしたが、授業の中で考えを伝えることの大切さを知ることができました。これを毎時間することによって、私は考えを伝えることを少しは身につけることができました。そう実感したのは、クラスでレクリエーションをするとなったとき、何をするか意見を出し合い班に分かれて企画書を作るときに、自分の意見や考えを

伝えることができたからです。

大学ではクラスごとに分かれて授業をするイメージがなく、必要もないと考えていました。しかし、授業を受けていくうちに自分自身が変わっていくことを実感できました。周りの状況や考えに合わせるだけでなく、自分自身や、自分の持っている考えを周囲に分かってもらおうという姿勢が出てきました。それはまた、日常生活の中でも役立ったと思います。考えや気持ちを自分の中に溜め込むことが少なくなったからです。

5. 最後に一私にとって大学生とは

私にとって新入生ゼミとは、高校生から大学生になる授業でした。3ヶ月間という短い期間でしたが、自分の考えを人に伝えるなどについて今までの自分と考え方が変わってきており、人それぞれが持っている考えから、学ぶこともありました。そのように考えるならば、今の私にとって大学生とは、自分らしさを大切にしながらも、周りから影響を受けて成長し、また新しい自分を見つけることかもしれません。これから先、たくさん後悔することもあると思うけど、その時々でちゃんと振り返りながら学び、自分が成長していけたら良いと思います。



エッセイ

私が寂しがり屋になった理由

2年 蓑田彩紀

1. 私が寂しがり屋になった理由

私は、今実家の熊本を離れ鹿児島で一人暮らしをしている。一人暮らしは孤独である。バイト後、深夜に帰宅すると真っ暗な部屋が待ち構え、悲しさが襲ってくる。しかし、私は一人でいることに寂しさなど感じるような子どもではなかったと思う。寂しがり屋の性格になったのには私の家族が大きく関わっているのだと思う。私の家族は父、母、妹、弟、私の5人家族である。特別すごいといったこともない、普通の家族。私を育ててくれた、支えてくれた家族が、私を寂しがり屋にしたんだと思う。それは高校2年の冬だった。

2. 家族でソフトテニスにはまる

中学1年生の時、友達の誘いでソフトテニス部に入部した。はっきりとした入部動機はなかったが、体を動かすことが元々好きだからと、父が運動部しか入ることを許可しなかったこともある。だから、何のためらいもなく入部した。週7日、つまり休みなく毎日練習をした。顧問の先生は、雷の音も聞こえない、雨が降ってるのもわからない、おなかもすかない鬼のような先生だった。しかし、逃げたいと思うことはなく先生のテニスに対する気持ちに負けないくらい私たち10人の同級生もテニスにはまった。県大会などに出場するようになり遠征は当たり前のようにあった。

その度に、父、母、弟妹は応援に来てくれたし、3年間父は運転手を快く引き受けてくれた。また、ユニホーム代や遠征代に多くの出費があったが両親は何も言わず出してくれていた。もともと口数の少ない、あまり笑わない父だったので当時どう思っていたかはわからないが、いやな顔一つせずいろいろとしてくれた。母は明るい性格で、思ったことははっきり言う性格なので応援を楽しんでいた。私が中3年の時、妹が入部してきた。当時の妹は家の手伝いも気の向いた時しかしなような気分屋だったため、気が合わずケンカ腰の

会話が多く、取っ組み合いの喧嘩をする姉妹だった。そのため部活の時は妹と会話することはほとんどなかった。

3. 私のとった行動と失望

中学校3年間テニスを思う存分した私は高校に入ってもほとんど同じメンバーでソフトテニス部に入り今まで同様に頑張った。先輩たちに追いつけるように毎日練習をした。高校に入ってから両親は試合の度に応援に来てくれた。弟妹も暇なときや遠征のときは両親に連れられて来ていた。先輩たちが引退し、私たちが後輩を引っ張っていく番になった。中学校の時代の私たちを慕って入ってきてくれた子ばかりだった。「すごい!」と連呼され、先輩という圧力がなくなったことで同級生は天狗になっていた。「練習をしなくても強い」という考えすら頭をよぎっていたかもしれない。

後輩たちはそんな先輩に流されることなく練習をしようとしたが、先輩がボールを打ち始めない限り後輩は打てないという変な上下関係が暗黙の了解のようにあったので、後輩は私たちが来るまで1時間半ほど待機状態だった。それに気付いた私は同級生には何も言わず、一人で後輩のもとに行き一緒にテニスをするのが続いた。同級生が気付いてくれることを信じて私は待ったが、気付いてくれなかった。

顧問に相談した。しかし私が嘘をついていると言って信じてくれなかった。同級生も顧問も私の行動や気持ちに付いてくれないこと、理解してくれないことに憤りを感じ失望もした。しかし、私は同級生に何も言わなかった。同級生には何も伝えずソフトテニス部から離れ休部した。苦しくて生きてる心地がせず母に何度も相談しようと思った。でも、できなかった。今思えばプライドが高かったのか自分の弱さを簡単に見せることができなかったのだろう。そのためか、小学6年生の時、

軽いじめにあっていた時も両親に相談しなかった。しかし、母は気付いていたと思う。私がいじめに遭っていたことそして、現在テニスをしていないことを。

4. 退部と家族と最低な姉

そんな時期に、とても大切な大会があった。もちろん練習をまともにしていないのだから勝てるはずもなかった。しかし、同級生たちは声を揃えて「練習したのに」と言い涙していた。本当に失望した。「退部しよう。」という考えが頭をよぎった。私は、今の現状や後輩の気持ちなどは何も部員に伝えることなくテニス部から去った。離れてから、今までのことを思い出すと家族が5年間私にしてきてくれたことが思い出された。応援に来てくれたこと、何も言わずお金を出してくれたこと、運転手をしてくれたこと。だから私は、なかなか母に退部したいということを言えなかった。いつかは伝えなくてはいけないと夜遅くまで悩む日が続いたそんなある日、夜中に思い切って母に切り出そうと寝室に行った。母は、黙って私を見つめ「どうした？最近なにかあったんでしょう？」と言った。我慢していたものが全て出た。詳細を伝えることはできなかったがいつも笑顔で私たちを受け入れてくれる母ならわかってくれると信じた。

しかし、母は私がテニスから逃げていることに大反対し退部を許さなかった。「話し合いなさい」これが母の出した答えだった。そんな冷たい態度の母に、私は大きな声で鳴き叫びテニス部を辞めたいと訴えた。この日のことを両隣の部屋の弟妹も気づいていたのに私には何も言って来なかった。気を遣っているようにも感じなかった。後から知ったが、弟妹なりに考え母に密かに理由を聞き出して原因を知った上で気を遣っていたのだ。弟妹の優しさを感じた。

また、母がきつく突き放したように感じてしまった私は夜、家に帰らなかったことがあった。この時も弟妹は夜の街灯もない田舎道を走って探してくれた。弟は風邪をひいて熱があったらしい。野球にしか必死にならない弟が私を探してくれたことにうれしく思った。今振り返ると、中学生と小学生に気を遣わせていたなんて最低な姉だ

と思う。

結局、何も解決しないまま時間だけが経った。しかし、母はそれ以降何も言わなくなった。私が自力で立ち上がるのをじっと見守ってくれていたのである。父も「お前の思うようにしなさい。お父さんが今までしてきたことは好きでやっていたんだから。」と言い私を信じてくれた。

5. 新しいスタートを切る

私が退部を考えていたことを、後輩の中には私が離れたことを自分のせいだという子、驚いて泣きながらやってきた子、私が戻ってくることを信じてくれていた子、たくさんいた。しかし、私はそんな心の広い優しい後輩を裏切った。同級生が、「私に勝手に離れていい迷惑だ、言いたいことがあるなら言え」と言ってきたのだ。この時の私には退部しか頭になかったので、すべてを包み隠さず伝えられたはずだったのに、自分の言葉として出でこず伝えることができなかった。同級生の中には、気持ちを汲み取り「待つ」と言ってくれた仲間もいたが、一人の子が「辞めれば」と言ったことで私の中で悩んでいたことが吹っ切れた。この子にとって、私の退部は都合がよかったことを後から知った。悔しさが込み上げ、自分が情けなくなった。

だから私は、新たなスタートを切った。ソフトボール部に入部し、レギュラーを手にした。今、私はここで頑張っているよと必死に伝えた。父も母も再び応援に来てくれた。私が自力で立ち上げられることは自分にもわからないくらい大きな挫折だったのに根気強く待ってくれたのだ。弟妹もソフトボールの方が姉には似合うと言って笑って受け入れてくれた。家族の、私を信じてくれる言葉と愛がなかったら、今の家族を愛する気持ちはなかったと思う。

6. 今、寂しがり屋の私が思うこと！

そんな私も今年無事成人を迎える。高校の時に経験したことは、私を強く逞しくしてくれた。当時、喧嘩別れした仲間から今年連絡が入った。恨むことももちろんあったが彼女たちがいなかったら、自分の意見を言える私は決して存在しなかった。試練を与えてくれた彼女たちに感謝してい

る。

家族にももちろん感謝でいっぱいだ。母が私を一度突き放したことは母自身も辛かっただろう。しかし、母は耐え待ってくれた。とても強い人である。父はそっと見守り、立ち直ったとき笑顔で迎えてくれた。弟妹は、今も変わらず私を受け入れてくれる。

家族から愛情をたくさんもらった私は、毎日連絡を取り、家族なしの生活は考えられない。家族の存在が今の私を支えている。だが、これからは支えられるだけでなく、私も家族の支えになりたいと思う。



エッセイ

やっと掴んだキャンパスライフ！

2年 下 園 歩

1. とにかく受かれば！大学に入れば！

「やったー！受かった！」

大学に受かったことが、というかとにかく大学に入れるということが当初の私にとってとても喜ばしいことでした。といっても、私の第一志望の大学はここ鹿児島国際大学ではなく全く別の大学でした。高3の夏から必死に頑張っただけでAO入試も推薦入試も受けたのにあっけなく振られた、その大学に私は未練タラタラでした。その気持ちと同時にもう受験なんかどうでも良くなって先生に言われるがままに受けた大学が鹿児島国際大学でした。「とにかく受かれば、大学に入れば、福祉の勉強ができればそれでいい…。」そんな不純な思いで入った大学でした。でも受かった時はそれなりに嬉しかったしそれなりにワクワクしました。

2. 平凡に進んだ大学生活

入学式当日、慣れない交通機関に母と戸惑いながらも向かった大学。慣れないスーツに大きなドキドキと不安で胸を膨らませながらの大学生デビューでした。種子島から来た私は、当然知り合いも5本の指で数えられる程しかおらず、誰も知っている人がいない初めて来た学校の中に一人投げ込まれた気分でした。今まで小規模校が当たり前だった私にとって、入学生の多さに圧倒されました。もう帰りたい…と思った反面、このままではいけない！と思い立った私は、あらゆる子たちにひたすら喋りかけ友達になってその日を楽しみました。そこからの学校生活も流れに流されるままに平凡に進んでいきました。

生まれてから高校までの18年間を種子島で過ごしてきて、ただでさえ鹿児島という地に慣れていない私にとって、姉との二人暮らしと大学生活という二つのものが同時にスタートし、最初はその生活に慣れるのにとっても大変でした。

大学に入学して約1ヵ月が経ち、友達もたくさ

んでき授業にも意欲が増しボランティアサークルにも仮入部して毎日楽しい日々を過ごしている矢先でした。兄からの一本の電話で私の目の前の光は真っ暗になりました。

3. 嫌だ…！嫌だ…！嘘だ…！

「お父さんが倒れた！すぐ帰ってこい！」

何が何だかわかりませんでした。兄の言葉がうまく自分の頭の中に入ってこず、真っ白になりました。何で帰ってこい？わざわざ帰るほどひどい状態なのだろうか？そんなことを何度も何度も繰り返し思いました。

「姉ちゃん、まさか…だよな？」

「いや、お父さんに限ってそんなことはなかよ！」

と自分に言い聞かせるように姉は私に答えました。私も自分にそうやって言い聞かせました。種子島に着いたらすぐ父のいる病院に向かいました。病院の外に、いとこ、親戚の叔父、叔母、近所の人達がたくさんいる光景を見て一瞬で、ただごとじゃない！と理解しました。

「はよう、父ちゃんのとこ行ってやれ！はよう！はよう！」

私たち姉妹は、全力で階段を駆け上り2階の病室へと走りました。ドアを開けた瞬間、青ざめた顔の父の横で泣き崩れている母がいました。父がなぜそんな状態でベッドに横になっているのかも分からぬまま、勝手に涙だけが私の頬をボロボロと伝いました。

「嫌だ…！嫌だ…！嘘だ…！」

と首を振るのがその時の私には精一杯で、ただただ目の前の現実を嘘だと自分に言い聞かせました。それから当分私は父の死を受け入れられずいました。その日から私は抜け殻になったかのように日々を過ごしていました。母は私たち以上にそうだったと思います。

4. 大学を辞めるなよ！

母はだんだんと痩せていき心からの笑いを失っていました。私もその日から、人と会うのが怖くなり、大学に行きたくありませんでした。大学を辞めようと何度も何度も考えました。そんな時、「父ちゃんがせっかく汗水たらして働いて行かせてくれた大学を絶対辞めるなよ！」

という叔父の言葉にハッと我にかえりました。大学を辞めたら自分まで駄目になってしまう…そう思いました。自分にはなにができる？と考えた時、勉強を頑張っって高校の時から父に話していた夢である、社会福祉士になることが、何よりも父への恩返しになると思いました。勉強だけは必死に頑張りました。しかし、まだまだ大学の人ごみの中になじめませんでした。仮入部していたサークルも辞め、バイトもせず、ただただ大学に授業を受けに行くつまらない日々…。寂しくて心が折れそうで、毎晩毎晩母に電話をしては泣いていました。

5. お父さん。やっとここまで来れたよ！

でもそんな時、心から分かり合える友達と出逢いました。

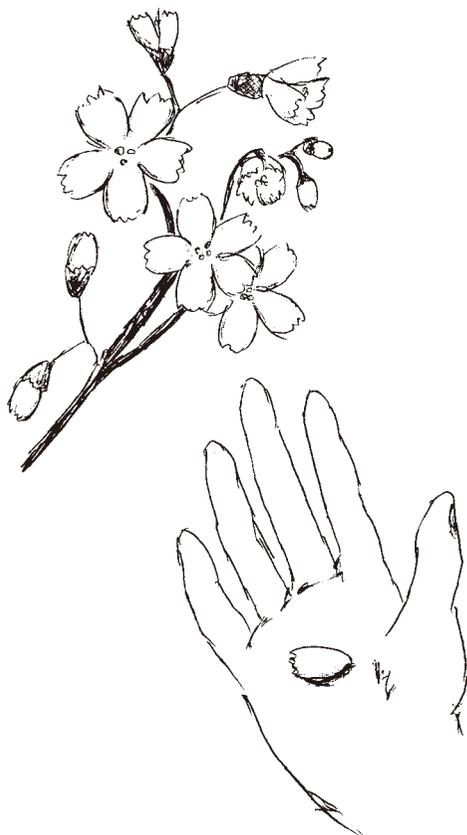
「変わろう！」

彼女たちが私にそう思わせてくれました。こんな自分と一緒に泣いたり笑ったり怒ったりしてくれる彼女たちと出逢って、一気に自分の考えが変わりました。この国際大学に来なかったら、こんな素晴らしい仲間とも出逢わなかったと思うと、本当にこの大学に来てよかったなあと改めて思います。

グダグダしていた1年間を取り戻すかのように、2年生になった今ではバイトも始めサークルにも入り、たくさんの人との交流の輪も広がり、毎日充実した日々を送っています。

たくさんの人を笑顔にしていた父のように、これから生きるはずだった父の分まで、私もたくさんの人を笑顔にしていきたいです。父が生きていた当時は恥ずかしくて言えなかった言葉も今なら自信を持って言えます。

「ありがとう、お父さん。やっと…やっとここまで来れたよ！」



tot29

エッセイ

私とレジー 4年目の片思い

3年 瀬戸口 圭 佑

1. 新鮮な毎日

私とレジとの出会いは、高校3年生の12月だ。初めてのアルバイトということで何をしようかと迷っていた私に母が「レジに空きあるけど」と言ってきた。母は近くのスーパーの鮮魚で働いていて情報を持っていた。私は人が好きなのでレジの仕事に魅力を感じた。最初の頃は毎日が新鮮だった。しかし金を稼ぐということは非常に大変でイヤになることも多かった。

2. 熱い想いとともに

そんなレジ体験のなかで私がすごく惨めになることがある。レジというのは、レジ打ちだけではなく食品補充や包装などいろいろ仕事がある。私がレジを始めて2回目のバレンタインデーの日のことだった。お客さんがとても多く忙しかった。そんな中チョコの包装も多かった。私はそのチョコを一つ一つ丁寧に包装していった。するとあっという間に時間は過ぎて閉店になっていた。私は大学最初のバレンタインデーでチョコをもらうことはなく、ただただチョコを包装していた。その包装されたチョコは熱い想いととも届けられたらう。私はそのただただ包装をした惨めなレジだった。

3. おばあちゃんの笑顔

レジをしていると嬉しいこともある。買い物に来るたびに必ず声をかけてくれるおばあちゃんがいる。そのおばあちゃんはよく孫の話をしてくれて孫のことがすごく好きな様子がわかる。そんな孫とリンクするのか私のことを気に入ってくれている。

ある日私のレジが込んでいるにも関わらず私のレジに並んだ。「申し訳ございません。お待たせしました」と私が言うと、「いいのよ。並びたかったんだから」とおばあちゃんが言った。すかさず私も「僕もおばあちゃんに並んでほしかったんで

すよ」というとおばあちゃんは顔を赤らめて「あら。

好きになっちゃいそう」と言った。ちょろいもんだと思った。年を取ってしまうとこんなにもすぐ好きになるのかと。それにしても、あのチャームリグな笑顔は正直言って可愛かった。あやうく私もおちてしまうところだった。

4. おまえに対して

私がレジをするうえで最もかけがえのない存在がレジ本人である。レジと出会って4年目になるが、現在使っているレジは2代目である。2代目は初代に比べて性能とルックスがはるかにパワーアップした。しかし便利にすることによって、それなりに問題もある。

まず、お札を数えるのが全自動になった。とても助かっているのだが、今日なんて5回は詰まった。果たして便利といえるのかどうかわからない。次に商品をスキャンに通さないで登録するときタッチパネルを使うのだが、とても押しづらい。私自身の問題なのか、数回に一回は同時に2つのボタンを押してしまい画面上に「二重スキャン」という文字が出てくる。その文字を見る度に腹を立てている自分がある。そもそもタッチパネル自体の反応がとても悪いからなんて言いたくなる。

5. やっぱりおまえが

それでも私は今日もレジを続けている。それはなぜか。やはり私は人が好きだし何よりレジが好きだ。あんなにも言うことを聞いてくれないとこっちがムキになってしまう。いつまでも飽きさせない。気がつけばレジに4年目の片思いをしている私である。

エッセイ

なんとなく大学生

3年 橋 口 紫 織

1. はじめに～「なんとなく」が始まり～

なんとなく入学した大学。なんとなく過ごしてきた約2年半。高校時代から私は深く考えず全て「なんとなく」で過ごしてきました。

社会福祉学科に入学したのはいいが、特に何の目的もなくただ合格したからとりあえず大学に行きたいから入学しました。大学に入ってから何かやりたいことを見つければいいかなと考えていました。

2. 大学1・2年～不安と焦りがあるが何もしない自分～

入学したての頃は大学生活の何もかもが新鮮で一日一日があつという間に過ぎていきました。しかし楽しかったのは、1年生の前期だけでした。なんとなく入学した私にとって周りはみんな何かしら目標や目的を持って勉強している、その環境で勉強することが苦痛になっていきました。授業をさぼることも増えていきどンドンやる気がなくなりました。この状態が3年生の初めまで続いていました。

3年生となると就職についても考え始めなければならぬ。自分が何をしたいかも分からない私にとって、友人たちが卒業したらどんな職場で働きたいなど話しているのを聞くことはプレッシャーにしか感じませんでした。自分に不安と焦りを感じたまま夏休みを迎えました。

3. 大学3年の夏～大学生活で初めてやり遂げたこと～

実習に行かない、バイトもしていない私は、夏休みは実家に帰って過ごそうと決めていました。ちょうどテストが終わっていつ帰ろうかなと考えていたとき母から電話がありました。「夏休み暇だったらちょっとバイトしてみないね？」という電話でした。私が小学生から高校生まで通っていた英会話教室の先生が新しく教室を開いたので夏

休みの間だけでも手伝いをしてほしいとのことでした。実家に帰っても何もすることがない私はすぐに引き受けました。

1週間に4日、1日6時間程度のバイトでした。3歳から小学生までの英会話のレッスンと中学生の塾のお手伝いをさせてもらいました。長く英語と接していなかったのが最後まで戸惑いがありどうすればいいか分かりませんでした。そんな私に先生は「何も考えないでこども達と一緒に楽しめばいいよ!!」と言いました。そう言われたときに何か一気に軽くなって昔に戻った気持ちで楽しめました。一緒に楽しもうとすると自然とこども達と同じ目線で色々な物を見れるようになり、余計なことを考えずに純粹に楽しめている自分がありました。

最初は暇だからという理由で引き受けたバイトがとても楽しく毎日バイトの時間が待ち遠しくて仕方ありませんでした。この2ヶ月間という短い期間限定のバイトでしたが、私が大学生になってから初めてきちんとやり遂げたことでした。

4. もう一つのきっかけ

大学生になって特に何も夢中になることがなかった私がこんなに何かに夢中になったことに自分でも驚きました。家族からも「紫織がこんなに生き生きしているのを久しぶりに見た。」と言われ、本当に今までの私とは明らかに違うなと自分で分かるくらいでした。

この「バイト」という新しい一歩に踏み出したのは母と塾の恩師のおかげではもちろんあるのですが、もう一つきっかけがありました。3年前期のある授業で、「ゆうかり第9号」に載った鳥丸みなみさんの「進んで振り返って前を見て」を読んだことです。少し興味のあることが出てきて、でも福祉とは全く関係のないことだったのでなかなか誰にも言い出せずにいた時期でした。

5. おわりに～「なんとなく」からの脱出！～

先輩は自分のやりたいこと、夢を追いかけるために大きな決断をし、自分で一歩を踏み出していました。今まで周りの目ばかり気にして何もできずにいた私にとって鳥丸さんの文章はとても心に残りました。その文章を読んでから私の中のモヤモヤが消え何かが吹っ切れました。それから素直に自分のやりたいことが明確になってきました。

鳥丸さんの文章を読むことがなかったら、私は何も変わらず、今でもずっとうじうじしたままの「なんとなく」大学生のままだったと思います。



エッセイ

社会福祉を学んで考えたこと—自分史を通して—

3年 有村久美

1. はじめに：自分史を通して

私が大学に入学して3年が過ぎようとしているが、未だにこれだといってやりたい職業も見つかっていない。興味があることは漠然とあるが、それを職業にしたいかと言われればはっきりと答えられない自分がある。こんなことを言ったら何のために大学に行ったのか、親不孝者だとか言われるかもしれないが私自身大学にきたことに後悔もしていない。こればかりは親に感謝しなければならぬと最近になって思う。

昔も今も変わらず勉強嫌いなわたしが社会福祉を学んで考えたことを、なぜ大学にきたのかつまり自分史と照らし合わせながら述べてみたい。

2. 「気合い」「根性」の小・中学時代

私は小学3年生から中学・高校までの9年間、バレーボールをしていた。母も姉も春の高校バレーに（全国大会）に出場するほどの実力だったため、私は常にプレッシャーを感じていた気がする。「遊びでやるのだったら辞めなさい」と何度も言われる度に負けるものかと練習に励んでいた。小学校3年生のバレーボールを始めた頃から成績がガクンと落ち込んだ。言い訳をするわけではないが、その頃私の頭はバレーボールで埋め尽くされていた。

バレーの大会を週末に控えたある日抜き打ちテストがあった。みんな出来ないだろうと思い、テスト用紙の裏にバレーのポジションを書いた。後から問題を解こうと思ったが夢中になりチャイムが鳴った。先生にはこっぴどく怒られ、親にも連絡がいった。足取りが重いなか家に帰宅すると怒っているかと思いきや母はテスト用紙を見て「ポジション取りが上手いね」と褒めてくれたのを今でもはっきりと覚えている。

3. 挫折と大学進学への道

そんな勉強嫌いの私が公立高校に入学出来る訳

もなく私立の高校に入学することになった。勉強をしなかった自分のせいだとはいえ、強いチームでバレーボールをしたかった私にとってはとても辛く、耐えがたいものだった。それと同時にずっと小学校から目標にしていた春の高校バレー（全国大会）出場の夢さえも閉ざされてしまった。高校1年生の始めの頃といったら何もやる気が起こらず、何かの抜け殻のようだったと自分でも思う。

中学校の友達がまたバレー部に誘ってくれたのがきっかけで、またバレーボールを続けることになった。高校ではプレッシャーを感じることもなく、バレーの楽しさを知ることが出来たと思う。友達にも恵まれ、あんなにも入試に落ちた事を後悔していた私が3年にもなるとこの学校に来てよかったとさえ思えるようになっていた。

3年生になって部活を引退すると毎日暇な生活が続く、初めて自分自身と向き合う時間が出来た、顧問の先生、担任、教科担任といろいろな話をした私は今までの自分自身の弱さ・甘さに気付いた。そして、将来何になりたいかというより誰かのために役に立ちたいという気持ちが強くなった。そこで指定校推薦がある国際大学の社会福祉学科に入学することにした。福祉という響きだけで人助けができると安易な気持ちで入学を決めてしまった。

4. 大学に入り、実習を通じて

大学に入っすぐの講義で「バイステイックの7原則」について学んだ。そのなかで「受容」＝クライアントのありのままを受け入れることに私は疑問に思った。利用者とはいえ間違っていることは間違っていると云ったほうが本当の援助になるのではないかと思ったがその後、援助者として私情は持ち込んでならないことを気付かされた。この気付きは私にとって今までの私が学んできた「気合い」「根性」など覆す衝撃を与えた。新たな

価値が芽生えた瞬間にも思えた。

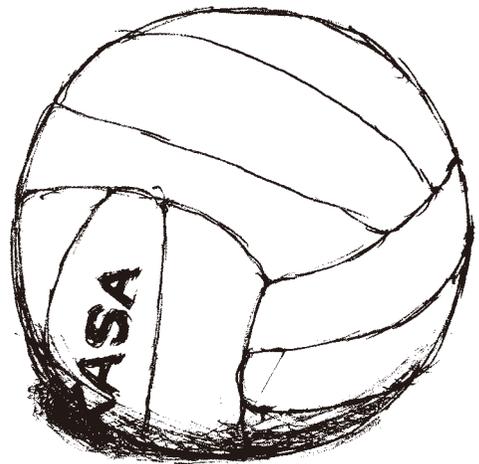
3年の夏休みに社会福祉協議会に実習に行くことになった。実際に生の現場で地域福祉に関わることができて勉強になったのだが、なにより感じたことは福祉職に関しての認識・価値観の違いであった。

5. おわりに：社会福祉を学んで考えたこと

簡易児童館や高齢者福祉センターなど様々な利用者の方と話す機会があったが、ほとんどの方が社会福祉学科の実習だと聞いて、「社会福祉を学んでいると偉い。やさしい子だね、大変だね」と話された。それはある意味で社会福祉は必要であるものの、それを職業にする人が少ない今の日本の現状を表しているのではないか。安い給料で労働時間も長いことを誰もが知っており、それでも誰か優しい人が職業として選んでくれることを信じているのだと思う。

そして大学で社会福祉を学びながら、自分史を振り返ってみて思う。小学校3年の時の母のことは、高校時代の友達の誘い、先生方との話は「気合い」「根性」ではなかった。もう一度、自分から「気合い」「根性」を入れるきっかけになった。「受容」や、「誰もが住みやすい社会」ってどうやって作るんだろうと思うことがある。

おおげさに聞こえるかもしれないが、今回の実習で何よりそのことを学んだ。社会福祉は本来、誰かに任せることなく自分たちで誰もが住みやすい社会をつくりあげることではないか。身近なところから社会的認識を変えないことには誰もが住みやすい社会にはならないと思う。



tot129

エッセイ

幸せって何だろう？

3年 川 添 沙津希

1. はじめに－社会福祉学科を選んだ理由

高校の時に習い事でいろんな人と関わり、その中で児童養護施設の存在を知った。そこから本格的に福祉を学んでみたくなり社会福祉学科に入学した。しかし、大学に入ると学校が終わると父の為に病院に通う生活が続き、私の大学生生活って何だろうと思った。

1、2年は友達ともあまり遊ばずに父の為に時間を使う事が多かった。周囲の友達が羨ましく感じたり、勉強も集中出来なかつたりするのは父のせいだと過ごしてきた。そして、3年生になり実習で母子生活支援施設に行った。

当初、児童養護施設に行きたい強い希望があった。しかし、父の事や、自分が精神的にも実習施設に泊まることや慣れない環境で生活することに不安があり、実習担当の先生に相談すると母子生活支援施設を紹介してもらうことができた。児童施設には児童養護施設と母子生活支援施設の2種類あり児童関係を経験してみたいと思っていたから、母親の話も聴いてみたいと思った。

2. 激変した私の家庭事情

私が高校生の時に父が身体を壊し、今までのように仕事が出来なくなり、精神的にも経済的にも家族みんなが大変苦勞をした。私は私立の学校に中高一貫して通わせてもらったが、2人の姉も学生であり、大変な思いをしながら通わせてくれた事に感謝しているが申し訳ない気持ちも同じように感じている。

それは家の経済状況を私なりに把握できていたので、私立の学校に通うことがとても辛くなり、学校に行き友達と話をするだけで「この人たちは何も不自由していないのだろうな。」「何で私だけこんな恵まれてないのだろう。」と思うようになった。高校卒業の数日前に父が緊急入院し、つい最近まで父は入院・手術・退院の繰り返しだった。

3. それでも楽しみになっていった実習

母子生活支援施設を選択した実習で、私は児童

や母親と接し、職員の先生方の話を聞き、今までの幸／不幸へのこだわりがなくなっていった。

最初は母子生活支援施設での生活は可哀想と思っていたが、子どもや母親の生き活きとしている姿を見ているうちに、改めて幸せって何だろうと考えることができた。今まで幸せと言えば経済的な面ばかりに目が行き、家庭の経済状況が苦しい＝精神的にも余裕がなくなる＝不幸・恵まれないと思っていた。

寮にいる多くの親子を見て傷を負っても、現在は多くの利用者が不幸ではないのかもしれないと感じた。職員の気遣いもその一つである。様々な行事があり、私も一泊旅行と運動会に参加させてもらった一泊旅行は実習始めの方にあり、とまどいながらも職員の先生や利用者の母親が温かく接してくれ、思っていたより実習に早く慣れる事ができた。

すぐに心を開いてくれない利用者もいたが、実習期間に何度も話しかけたりする内に心を開き笑顔で話しかけてくれるようになった。私も、それが嬉しく毎日の実習が楽しみになった。

4. 周りの人達と円満な関係が築ける事

実習に慣れていく中で母親が子どもに冷たくしているように感じる場面も見えてきた。それを見て子どもを叱る難しさや、母親への対応の仕方が難しく思えた。傷の癒えていない母や子どもいるのだと思い、悲しくなった。

少し前まで私は父の事で、遊びや学習時間が削られてしまい不幸だと思っていた。しかし、家族や友人を含めた周囲の人に支えられ、大学生生活を継続して実習も終えることができた。そして今、このようなことを書いていられる。傷を負った母や子どもも、その後の周囲の対応や環境によって癒されることもあるのではないかな。

私を頼ってくれる人がいたら力になりたい。幸せって何だろう？今なら周囲の人達と円満な関係が築ける事が、私は幸せだと思う。

エッセイ

慣れる

3年 小野大樹

1. 「慣れる」とは

「慣れる」ということばを携帯電話のYahoo辞書で調べた。その状態に長く置かれたり、たびたびそれを経験したりして違和感がなくなる。通常のこととして受け入れられるようになる。ということである。

私は今年の夏に、この慣れるということに対して疑問を感じた。その出来事は夏休みに1ヵ月の実習を行った老人保健施設で起きた。

老人保健施設とは、施設の中で生活をしてリハビリを行いながら在宅復帰できるようにする施設なのだが、現状は、入所が長期化してしまい、なかなか在宅復帰ができていない。このような問題も抱えている老人保健施設で実習を行っていた。したがって色々なことが起こるのだが……。

2. 順調に進んでいた実習

1週目が終わり2週目からデイケア実習になり利用者の方々の送迎やリハビリの補助といった内容で実習を行っていた。デイケアを利用される方は、入所されている方に比べ介護度が低い方や要介護ではなく要支援の方たちが利用されていたのでコミュニケーションもよく取ることができた。

順調に進んでいた実習だったが13日目にデイケア利用の女性が亡くなった。本当に突然のことでその時はどうすることもできない自分がいた。その女性に会ったのは2回きりだったが、とてもおしゃれでお話が好きだったのを今でも覚えている。

3. そしてその出来事は起こった

その日の昼食が終わり、午後から入浴介助の男性をデイケアルームにお迎えに行ったところ今までにない部屋の慌ただしさだった。他の利用者の方もそわそわしているなかで意識が無くなっている彼女に、AED（自動体外式除細動器）の処置

が行われていた。

その時私に任された仕事は、他の利用者の方を別の部屋に移動させることだった。それから後にどのようなことがデイケアルームで起こったかは見ていないので分からない。ただ目の前にいる不安そうな利用者の方のお話し相手になるので精一杯だった。何もできなさに自分がかかりした。移動した部屋では、今まで感じたことのないような空気が流れていた。じっと時間が過ぎていくのを待つしかなかった。

気がつけば利用者の方をお送りする時間になり全員の方をお送りしてから施設に帰ると、彼女の死を聞かされた。彼女の死は、心のどこかで感じていたがそれよりも死のことをあっさりと伝えられたことに驚いた。職員の方からすると「日常茶飯事ではないが働いていれば慣れてしまう」とのことだった。

4. 人の死に接するという事

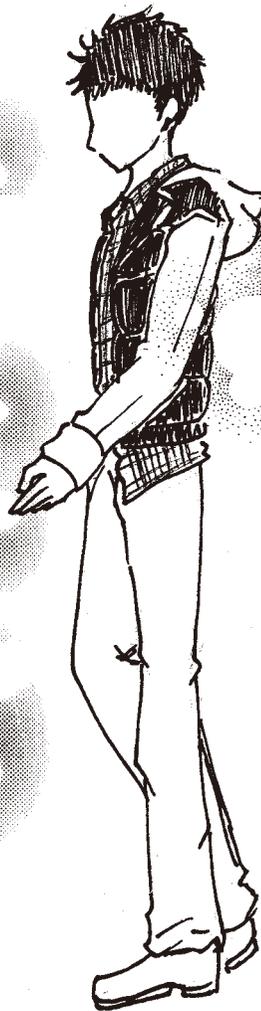
私は今まで生きてきた中で身内の死を体験したことがあるが、その時はただ会うことも話すことも出来なくなってしまったのだという寂しさだけだった。これからも私はそのような身内の亡くなる場面に慣れることは絶対にはないと思う。他方で人の死は、時間が経てば普段は消えていても、自分自身の中に忘れることのないものとして残り続ける。考え方を変えれば死というか、その人がいなくなったことに慣れたと言えるのかもしれない。

実習中に亡くなった女性も2回ほど会って少し話をした程度の関係ではあったが、亡くなったことを聞かされたとき身内が亡くなったのと似たような気持ちになった。その時、死のことをあっさりと伝えた職員の方からも寂しさのようなものを感じた。仕事とはいえ、人が亡くなる場面に慣れてしまっても悲しさを感じなくなることはないだろう。悲しみも寂しさもしっかりと受け止めなが

ら、仕事を続けるというような死との向き合い方があるのかもしれない。それを人の死に慣れると言えるかどうか分からないが。

5. 実習から2ヶ月が過ぎて「慣れる」とは

実習から2ヶ月が過ぎた今でもその女性の死に対する慣れに疑問を感じる。人の感情で人の死に接することに慣れてしまうほど怖いことはないのではないだろうか。実習先で人が亡くなる感覚は自分の身内が亡くなるのとは違うのか？気になっても慣れるくらいの振りをしないと仕事にならないのか。今も、冒頭に引用した「慣れる」の意味は、人の死に接することに対しても簡単に使えるのだろうかと思っている。



Siro

エッセイ**実習を通して学んだ事**

3年 村田 亮

1. はじめに

私は、今回社会福祉士の実習として、児童養護施設で1ヶ月間実習をさせていただきました。私は、今までに児童養護施設でのボランティアなどをしたことがなかったので、とても緊張し、不安な気持ちでした。しかし、子どもはとても好きだったので、早く子どもたちと仲良くなろう!!など、自分なりにしっかりと目標を持って実習に行きました。

2. 実習が始まって、名前を覚えて

実習が始まり、初めて子どもたちにあつたとき、子どもたちは、皆笑顔で私を迎えてくれました。しかし、何かよそよそしい感じがしたので、私は早くこの関係ではなく、何でも話せるぐらい仲良くなりたいな!と思い、自分から話しかけていこう!と決めました。

担当の先生に「子どもたちは実習生慣れしてますよ!」と言われましたが、1ヶ月という限られた時間しかないので、この中で信頼関係を築くのはとても難しいことだと思いました。

私は、とりあえず皆の名前を第一に覚えめました。子どもたちは、自分の事を覚えてもらったことにより、最初に会ったときとは違う感じで私に接してくれました。

児童養護施設の設定はとても工夫されています。子どもたちにとっては、私たちが家で生活するように、皆自分たちの家なので、一つの部屋でも、皆それぞれ少しだけでも自分の空間がありました。同じ部屋でも、ちょっとした空間があるだけで、自分の空間が作れると思うので、いいことだと思いました。

3. 喧嘩の仲裁に学びながら

私は、実習でたびたび子どもの喧嘩などを見ました。高校生と小学生の喧嘩を見たときに、反抗のできない小学生を相手にどンドンエスカレート

していく高校生をどのように止めればいいのか分からず、先生を頼ってしまいました。慣れた先生方はお互いを離し、それぞれの言い分を聞いたうえで、注意をしていました。簡単なことと思いがちでも、いざ自分の前で喧嘩をしているとどうしているのか分からなくなってしまうということを知りました。

子どもたちはよく喧嘩をすると思うので、どこから仲裁にはいれればいいのか?や、どのように注意すればいいのか?というのは、とても大変でした。施設の先生方は違うホームの先生方と連携をとりながら、子どもたちにとって一番いい喧嘩の仲裁などを考えていて、とても参考になり場面が多かったです。職員の仲がいい施設が子どもたちにもいい影響を与えているのだと感じました。

4. おわりに

今回実習を通して子どもたちと1ヶ月生活して、一番印象に残っているのは、子どもたちは皆とても明るいな!と思いました。子どもたちの生活の場で1ヶ月共に生活させてもらったのに、一人も嫌な顔をせず、生活をしてくれました。色々な事情により施設で生活をしていると思いますが、子どもたちは、とてもまっすぐに伸びていたと思います。

1ヶ月という時間だったので、まだまだ子どものいいところなど、分からないことがほとんどだと思いますが、これから先も実習先に顔を出していきたいと思います。決して、実習だけの関わりにはなりたくないと思いました。これから先、福祉に関わっていくか分かりませんが、実習を通して私が学んだ事は決して無駄にならないと思いました。

エッセイ

小さなきっかけによる今

3年 大 山 美紀子

1. バイト許可証持って走るところから

私は、大学受験が終わった瞬間「バイトしなきゃ！」と思い、まず高校にバイト許可証をもらうという進学校からしたらちょっと異端な生徒だったのですが、このちょっとした行動もこの先の生き方にまで関わってくるなんてその時は考えもしませんでした。

無難にバイトできる理由が浮かんで高校生でも雇ってくれるところというとなんかなくて春先にある有名子ども向けイベントに応募。見事不採用。せっかくバイト許可証もらったのだから、と思い別のところで有効活用しようと思って次の候補を探すと谷山にある某有名おもちやさんが高校生も募集していたのでそこに決定！というわけで面接に行くと即採用。仕事も楽しいし働いている人たちもいい人たちでよかったと安堵しているうちに大学生になっていました。

2. バイト先の休憩室で

そろそろ入るサークル決めなきゃいけないな、と友達といろいろ悩みに悩んでいたところバイト先の休憩室で同じ大学の1つ上の先輩を発見。話してみると音楽系サークルに所属しているとか。私は小さいころからバンドが好きでいろいろと聞いてはいたもののプレイしようなんて思ったこともなかったし、まずバンドといえばヴォーカルくらいしか目に入っていないような素人。

とりあえず見学に行かせてもらうことにしてその週の木曜日。見学に行くと怖そうな先輩たちがずらりと並んでいて緊張しながらアンケート記入し、なんとその場で入部決定。見たこともないベースを担当することに。

3. 偶然というか必然というか……

こんな感じで音楽と出会ったのですが、サークルに勧誘してくれた先輩は、バイクで事故を起こしてなければバイトしてなかった、と言っています。

私自身イベントのバイトが不採用じゃなければそこでバイトしてなかったし、偶然というか必然というか運命とかそういう類のものを信じずにはられません。

音楽と出会えたこともですが、もしその先輩と出会ってなければ今の仲間とも当然出会ってないし、こんな毎日を送れてないし、もしかしたらすごくつまらない大学生活を送っていたかもしれません。

4. 怖くはあるけど、嫌いじゃないです

こんな小さな出来事が積み重なって色々な人やものと出会うきっかけになるというのはすごいことだとは思いませんか？

もし、あの時「うん」と言っていなければまた違う未来が存在したのです。

もし、昔お父さんがチャラ男から改心してお母さんをナンパしていなかったら私はこの世に存在すらしていなかった。

世の中はすべて小さなきっかけで構成されていてそのきっかけを如何に大事に出来るか、自分の望む未来のためにどう取捨選択していくか。少し怖くはあるけど、やっぱり後悔は付き物だけど今の生き方、私はそんなに嫌いじゃないです。

エッセイ

スイッチー大学は楽しいところ

3年 安留綾乃

1. 変わった先生とは

私が通っていた小学校、中学校、高校には必ず一人は先生らしからぬ先生がいた。そして現在通っている大学にもいる。簡単に言うと、「変わった先生」。ここで一言断っておきたい。「変わった先生」という言い方は一般的にはあまり良い意味で使われないが、ここではむしろプラスの意味で使う。ちなみに、本文で出てくる「先生」という表現は、「変わった先生」を意味するのでご了承下さい。

さて、そんな尊敬すべき「変わった先生」方は、その性質上様々な名言を残す。そしてその言葉は長い月日が流れたとしても、生徒の心に深く刻まれるものである。私も、その言葉に影響を受けた一人だ。ある授業で小学5年の頃の担任が、「大学は楽しいところ」という事を面白おかしく語っていた。私にとってその言葉は妙に印象的かつ魅力的で、瞬時にインプットされてしまった。そして後に、現在の私が在りこれを書いているのだからなんだか変な感じがする。

2. イジンの偉業

それはさておき。そんな生徒の人生に影響を与えかねない先生方には、きっと共通点があるに違いないと勝手に思い込んだ私は、それを探してみることにした。すると先生方には、3つの特徴があることに気付いた。1つ目は、良くも悪くも声がでかい点、2つ目は、名言過ぎるが故に誤解を受けやすい言動が多い点、3つ目は、本当はとっても生徒思いの先生なのに一生懸命すぎて生徒に勘違いをされやすい点である。1つ目については、そのままの意味である。高校の頃のN先生については、授業中の声が大音量過ぎて隣のクラスからの苦情が絶えなかった。2つ目については、前半に述べたような人生に影響するエピソードは、キレイな思い出だ。しかし全くキレイでないものもある訳で。

例えば、中学の頃の先生の話。見た目がゴツくて、強面な社会担当のK先生は、時々オカマ言葉を使用し、授業はよく脱線する人だった。またそのK先生がする話は、あまりにもマニアックすぎて生徒は困惑する始末。そしてその極め付けが、K先生の人生の研究テーマ。それは、「世界の葬式、う〇こ、ミイラ」である。歴史の年号もろくに覚えていない私が、先生の研究テーマを8年経った今でも覚えているとは、K先生恐るべし。しかし実は、このテーマにはとっても深い意味があるのだが、ここでは特に触れない。そして先生方の一番の見せ場である、3つ目の特徴。この特徴は、学生時代にはあまり気付きにくいもので、学年が上がったり、教科担当が変わったり、卒業した後に初めてその良さに気付かされることが多い。

3. あったかい社会と料理的数学

2つ目の特徴の時に登場したK先生や、前半に少し登場したN先生も本当に良い先生だった。K先生はその見た目や言動とは裏腹に、当時成長痛により膝を痛め体育など見学が多かった私に、「膝の調子はどげんな？」とよく声をかけてくれる、あったかい先生だった。そんな先生だったこともあり、学年が上がって教科担当が変わりあまり授業では会わなくなっても、K先生を遠目に見つけるとよく「Kせんせ〜い!!」と大声で叫んで手を振ったりしていた。

高校時代のN先生は、今まで出会った先生の中で声のでかさでは首位を争う。またその授業はとってもユニークで、それはまるで1つのエンターテイメントのようだった。N先生は数学に先生なのだが、授業で出てくる公式には必ずxやyの代わりに、リンゴやバナナそれで足りなければ、ブドウの絵をそこに描き入れて使用する。N先生曰く、「xやyは普段使い慣れないものだから、そこに数字を代入することをうまくイメージできない人がいるんですね。だから先生は考えたんで

すよ。普段から親しみのある、リンゴやバナナを x や y の代わりに使う事で、より公式に親しみを持ち、より代入しやすく、より使いやすくなるのではないかとですね。」確かに、公式にリンゴやバナナを使用することは斬新な発想であり、インパクトが大きく記憶に残りやすい。ただし、リンゴやバナナを使わなければならないとか、そういう固定観念や、何故リンゴやバナナを使うのかといった疑問を持つことは、混乱するので避けた方が良い。ここで重要なのは、リンゴやバナナではない。いかに使い慣れない公式を、必要な時に使いこなすか。それを追求した結果、N先生は日常生活で使わない x や y を使用せずに、身近なリンゴやバナナに置き換えることによって、数学の公式をまるで料理のレシピのように生徒たちの前に登場させて、理解しやすいようにしたのである。要するに、このリンゴやバナナは身近なものであれば、車や猫でも何でもいいのだ。

4. 数学的恋と秋の空

さて、ここまで一通り先生方の紹介が済んだところで本題に入っていこうと思う。前に登場したN先生の授業中の言葉の中に、「恋のスイッチ」というものがあつた。もちろん数学の授業である。N先生によると「恋のスイッチ」とは、「好き」「嫌い」のスイッチの事を指し、それは脳内のとても近いところに存在するのだという。それ故に、人は今まであんなに好きだった人の事を、ある事がきっかけで嫌いになってしまったり、また逆に今まで嫌いだった人の良い一面を思いがけず知ることで、好きになる事もあるとN先生は言う。この例えは要するに、好きなものであつても嫌いなものであつても常に視野を広く持ち、そのシチュエーションに応じて正しき物事を見極め、判断しなさいという教えである。(そしてN先生は拔かりなく、この話を数学につなげていく。)

5. あなたのスイッチ、入っていますか

ここでは、脳内スイッチの話が本当かどうかは置いておいて、「恋のスイッチ」についてまじめに考えてみようと思う。私としてはN先生が言うように、好きとか嫌いとかいう感情がスイッチのように、そうパッチンパッチン切り替わるとは

思えない。確かに世の中には、惚れやすい人や飽きやすい人もいるが、それは大きく感情が変化した訳ではなく、その時の精神状態や環境、場の雰囲気などによつてもたらされる場合が多く、その時の一時的な感情のゆらぎから発展するものではないか。

「恋は盲目」という言葉があるように、人は何かに恋をすることはじめのうちには舞い上がり、たとえ相手の嫌いな部分が見えていても見ないようにしたり、気付かなかつたりすることがある。しかし共に過ごす時間が長ければ長いほど、嫌いな一面が嫌でも目についてくる。そうなつた時、その相手のマイナス面を受容できるかどうかで今後の相手との方向性が変わつてきたりする。つまり、ある程度の付き合いの期間を経て、「冷めゆく好きと積りゆく嫌い」、「積りゆく好きと見え難くなる嫌い」もあつたりするのではないかと思う。嫌な部分というものは、ただ自分が最初から相手を両目を閉じて見ていたから見えなかつたり、気付かなかつたりするのであつて、実は最初からあつたものに過ぎない。そうなると結局、N先生の言葉の通り、人に限らず物事、つまり相手に夢中になることも悪いことではないが、そんな時こそ視野を広くして相手としっかり向き合う事が大切であることに気付かされた。

「あなたのスイッチ、入ってますか？」

エッセイ

学外研修－ホームレスについて学ぶ

3年 上野 達宏

1. はじめに

田畑ゼミに入って、私たちは、自主研究助成というものがあることを知った。詳しい話を聞き自主研究を行うことにした。先生と話し合いながら、生活保護の日独比較というテーマに決めた。その中で先生の提案もあり、二つの学外研修を行うことになった。一つはハローワークの訪問、もう一つが鹿児島市役所地域福祉課の訪問であった。

ここでは、11月9日の鹿児島市役所地域福祉課訪問で、鹿児島県のホームレスの現状について学んだことを中心に報告したい。鹿児島市民プラザの会議室で行われた研修は、貴重な資料も頂戴し、たいへん有意義であった。

2. 鹿児島のホームレスの現状

日本のホームレスの定義は「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」にある、「都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所とし、日常生活を営んでいる者」となっていて、ネットカフェ難民、マック難民は含まれない。これは世界の中でも限定的な定義である。

鹿児島県におけるホームレスの人数は、43名（男性36・女性1名・不明な方が6名）で、市内には約30名いるそうである。ホームレスの実態の把握は困難で、この数字は目視の人数であり、人数は年々減ってきてはいるが住む場所を移動している可能性もある。

説明によると、ホームレスになった原因として病気、家庭の問題がほとんどであるが、なかには少数だが自ら好んでホームレスになっている方もいるとのことである。しかし、ホームレスの原因を個人に帰することはできないのであり、社会的背景があることを忘れてはならないと思った。

鹿児島市は、定期的に巡回しホームレスの現状の把握に努め、同時に医療や生活保護の申請を薦めたり、また住居の紹介や仕事を見つけるための

手助けをしたりしているが、そうした支援をホームレス自らが拒否する場合もあるという。

3. おわりに－生活保護とホームレス支援

今回の研修は、実際に活動をされている担当者の経験に基づくお話であったので、大学の講義だけでは得られない貴重な学びになった。

生活保護という仕組みの中で、ホームレスに対する支援は様々行われている。前回訪問したハローワークと連携した就労支援もその一つである。しかし、こういった支援自体が就労意欲の低下を招く可能性もある。また生活保護を受けること自体がスティグマとなる社会認識や環境が根強くあるため、受けたくないという問題もある。

この研修で講義と現場を通じて、社会保障を学ぶことの大切さや、物事を理解することの重要性を理解できたので、ホームレス問題についても、ちゃんと向き合っていて考えていきたいと思った。





エッセイ

出会いとつながりと必然性と

大学院福祉社会学研究科博士後期課程

中 條 大 輔

1. つながりを実感する年末年始

2011年にかけての年末年始の頃のお話。休みに入ると決まって集まる仲間や職場の同僚、そして大学時代からの友人たちがいる。つながりを実感する。1週間弱の長い休みの中に、たくさんの人と会ったり話したり出来る年末年始。無精者の私だが、周りに恵まれて昨年の年末年始から充実した休みを過ごすことが出来ている。当たり前のように感じるが、このように声がかかることは非常にありがたい。

出会いはとても大事だ。どこかで聞いたことのあるフレーズではあるが、その時その瞬間にその場にいななければつながらない縁もある。

人は、今に至るまでには、様々な分岐点を知ってか知らずか選んでいるものだ。時にその選択は自分にとって積極的な選択ではない事も多い。しかし、振り返ってみれば意外とその選択も悪くなかったかなと振り返ることが出来たりする。私にとって大学時代とは、そういう時代だったように感じている。

2. 目標を失った入学当初

高校の頃、大学に行くことはそのままその後の人生を決めることだと勝手に考えていた。進学校だった私の母校では、周りは皆有名な国立系の大学に進むのが当たり前といった雰囲気、学校の教員になりたいという目標こそあれ、具体的なプランは存在せず、私も流れのままに当然そのルートに乗る気でいた。高校時代少し遊びすぎたこともあり、浪人をして1年なんとなく過ごしていた。今考えれば浪人ぐらいしておけばモラトリアムも伸びるし、大学なんて適当に勉強しておけば通るもんだとでも思っていたんだと思う。もちろんそんな気持ちのままでは志望校なんて通るわけもなく、あえなく受験は全滅。2浪目を選択するか、地元の私大（つまり鹿児島国際大学）に行く

かの選択を迫られた。

2浪目を過ごすほどの真剣さも熱意もなく、教員になるという目標をかりうじて継続出来るという理由だけで後者の選択肢を選んで受験した。センター利用で書類受験のみ。入学式まで中に入った事すらなかった大学に私は入学した。自分の中では完全に人生が終わった気になっていた。入学当初、私は勝手に目標を失っていた。

3. 利他的な生き方

そんなこんなで日々を過ごし始めたなかで、様々な出会いを経験して行くこととなった。新ゼミ、サークル、教員、大学職員など、様々な仲間と出会うことで、少しずつ大学生活が楽しくなっていた。とくにサークルでは器楽部に入り、バンド活動に没頭した。その活動の中で尊敬できる先輩や仲間と出会うことも出来た。

何かに熱中出来ること、遊べることは人間にとって素晴らしい才能だと思う。その瞬間、いやなことでも苦しいことから解放されて楽しむことに集中できる。その中から目標となるものも見つける事ができる事もある。3年の初めまで、私はぼんやりとミュージシャンになりたいなんて考えも持っていたりした。今考えれば決して現実的ではないが、当時はそれが目標だった気がする。とにかく、ぼんやりと、ただなんとなく日々が過ぎていた。その瞬間瞬間は一生懸命でも、その先につながる計画性は持ち合わせていなかった。生き方が利他的であったことは言うまでもなく、先の事など考える余裕すらなかった。でも、その時の生き方が、今になって考えるととても貴重な経験を積みさせてくれている。たくさんの人生の貯金となっている。今の仕事で一番必要となる「話題と趣味の大事さ・それにまつわる人脈」は間違いなくこの利他的な生き方の時期に培われたものだ。そう考えると人生に無駄は無いと改めて感じる。

そんな生き方をしていた2年間を終え、3年目を迎えて間もなく、私は人生を変える出会いを経験する。

4. 運命の出会い

福祉社会学部所属だった私は、2年までソーシャルワークについてぼちぼち勉強していた。社会科の教員志望だった私にとっては、人文系の小難しい話題はちょうどよい学問だったのだろう。後に大学院に進むが、当時はそんな気さらさらなく、学問というよりは「暇つぶしのための学問」だった事は事実だ（当時の教員の皆さん、本当にごめんなさい…）。

そんな折、3年になって「精神保健福祉論」と「精神医学」という科目に興味を持った。ご存知の通り、本学の医療福祉コースは「選抜制」である。この「選抜制」という響きには私は惹かれた。目標を失って勝手に挫折した気になっていた当時の私にとっては、その「選抜制」という響きは稚拙なエリート意識を満たしてくれるのには十分だった。どんな学問か知らずに取りあえず科目履修し、授業を受講。最初はなんとなく受講していたのは今まで通り。

しかし、この科目がものすごくおもしろかった。知らず知らずに興味を持った私は、勉強するうちに自身の体型へのコンプレックスと精神のしょうがいを持つ人々のマイノリティさに共感を得た。そして、真剣に勉強するようになった。今考えればこの時に私は明確な目標を得ることができた。稚拙なエリート意識も少しは持っておくものである。

その後、4年になり、ゼミ・医療福祉コース・サークルなどたくさんの仲間を支えられ、素晴らしい恩師にも恵まれたことで、私は一層ソーシャルワーカーになるべく勉強を進めることとなる。精神科病院の実習を経て、私はソーシャルワーカーになることを自分の中で完全に決めた。実習最終日の大泣き事件、4年最後の学園祭に国家試験三カ月前にも関わらずフル出演、国家試験自己採点で大きく凹む事件、無事合格し最初の就職をしたこと、大学院進学など、これまでにない様々な経験を経て、卒業後、現在に至るまで精神科ソーシャルワーカー（PSW）として働く事がで

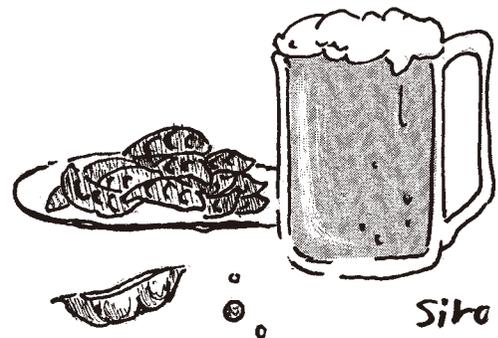
きている。ちなみに、大学院時代にも大きな経験をするのだが、それはまた別の機会ということで。わずか30年の人生ではあるが、つくづく、人生の岐路とは分からないものだと感じる。

5. プロセスに無駄はない

私の好きな言葉に「偶然はなく、世の中全ての事は必然である」というものがある。今思えば、私の「投げやりな入学」もそう感じたまま過ごしたプロセスもきっと必然だったのだろう。全ての過程には必ず意義がある。そして、今この瞬間もきっと明日の糧になっている。そう感じると自然に前向きに生きる事ができる。もちろん凹むこともあるが、それはそれと思える。そして、その過程の中で出会った人たちとつながりをもつことで、もっといろいろな経験を積むことができる。大学で出会った人々とは今も大事な関わりを持っている。そこから広がった出会いもある。

場面は戻り、年末のある飲み会。年の瀬のにぎやかな中、ふとそんな想いでニヤッとした。その顔を怪訝に見つめる友人の顔をみて、私は思わず笑い出す。片手には冷えたビール。もちろん目の前の仲間は大学時代の仲間。

大学の頃の私は少し焦りすぎていたのかもしれない。出会いは必然であり、大事だ。焦らずゆっくり確実に。私の想いはそんな年の瀬の喧騒の中で、今年もじっくりと醸造されている。



白サンの 学生生活。

～私と私と私と私と私～

川路美紗
福祉社会学部 社会福祉学科



白さんとは...
一応女の子です。
中身は女の子とオジ
の間みたいな奴。
甘いモノと動物と
アリスとマンガが好き。
今、マイブームは世界史。
特にトルコ。座右の銘は、
「可愛い正義」

前回「ゆうかり 第9号」では、挿絵を
投稿させていただきましたが、今回は
マンガを 描かせていただくことになりました。

少しの間、白さんの何気ない日常のお話
に付き合ってください。

よろしく お願いします m(-_-)m



さらっ

と、いう
崎原先生
のお言葉から



白サンのタイムスケジュール



平日	朝の スノー ドッグ タイム 9:00	授業	授業	バイト 17:00	1人の時間 2:00	ゆる
休日1	じょう たんば た 8:00	バイト	自由時間			ゆる
休日2	ちよとゆ、くり 起きて、色々やったり。 おと眠てたり。	バイト 13:00	バイト 17:00	バイトだったり 遊びに行ったり いであうだ(た)。		ゆる てます。

こうして見ると、バイトばかりですが、ちゃんと日休みの日も
あります。

ではまず
学内での
大体の過ごし方を
ご紹介



...と、大体こんな感じのくり返し
もうっ...

サークル活動はしていませんが、学部学科を越えて友達がいいます。

相手によって適度な距離感(左下)は変わるので、あいさつ(右)のしかたも変わります。

でもこの距離感こそ、コミュニケーションの大事なポイントだと思います。

コミュニケーションといえるのは、ハイトの時も、しじみ考えも、次はバイトでのエピソード!

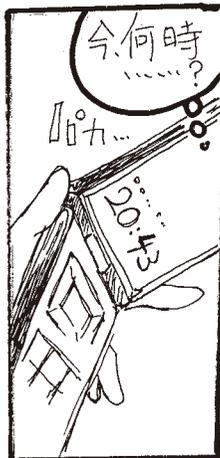
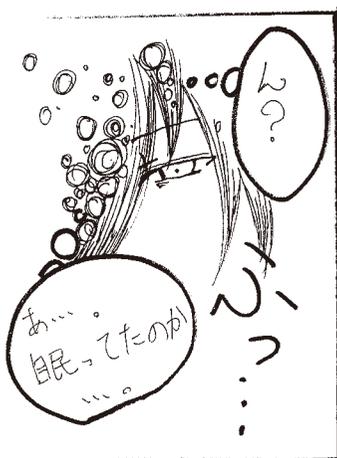
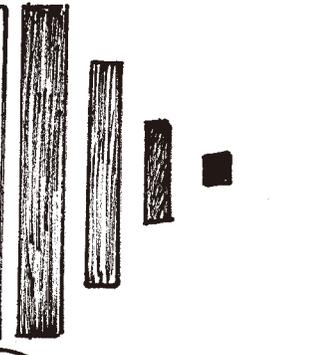
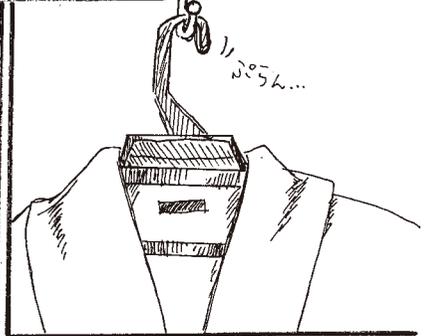
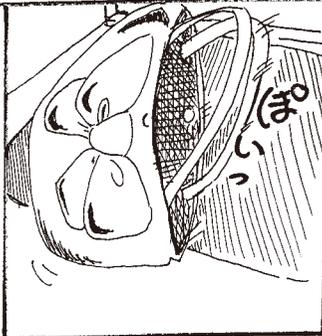
...そんなこんなで
学校とバイトが終われば
「自由時間」です。
あ、帰ったら
何をしよう?



どこか行くか。
それと家で本でも
読もうか。
それだ、のんびり
お風呂でもいいな。
など考えながら帰宅



ぬぎぬぎ



以上、こんな感じの毎日です。
 ゆる〜く、のんびり、時々ドタバタといった感じ。
 さて、そろそろ まとめていこうと思います。

休日

前のページにも書きましたが、いつの間にか
 眠っていた、という事はよくあります。お金がないので、実は
 出かけるのがおっくうになってたり...。しかし、時々
 映画を観に行ったり、服を買に行ったり、カラオケに行ったり
 し、ストレス発散します。バイトさえなければ"せりた"こと
 をやる日"です。

趣味

趣味はイラストを描くことと、
 色々描きます。inkling →
 感じは、模モードの
 時の描き方。
 あと、イラスト
 以外ではゲーム
 が趣味...
 かも。





最後に.

ここまで好き

放題描か

せていただきま

た。(改めて読みなおして字の汚さに絶望)

日々の状態と同じくらい
好き放題です。私は.

3年生になってから、1人暮らし
を始めたのですが、やりたい

放題の反面、親の大切さ、

が身にしみ分かったり、友達がいって
檔に良かったと、何度も感謝したり、
ということばかりです。

お父さん、お母さん、弟達、そしてじいちゃん、
ばあちゃん。こんなにやりたい放題の娘で

ごめんさい。見守っていてくれてありがとう。

そして、ここまで読んで下さった事に、ありがとう。

終り。

エッセイ

先輩や学生と「ゆうかり」を作る中で見えてきたこと

— 学科学会誌と社会福祉教育の連携のかたち —

社会福祉学科 崎原秀樹

1. はじめに—学科学会誌と筆者

本学社会福祉学会の歴史は1982年4月に遡り、社会学部開設と同時にスタートしている。その後、社会学部社会福祉学会は、2001年4月から福祉社会学部が現代社会学科、社会福祉学科、児童学科の3学科体制に再編されたところから社会福祉学科社会福祉学会としての歩みを始める。活動の一端を掲載した社会福祉学科社会福祉学会誌「ゆうかり」第1号は、2002年3月に刊行された。

筆者は本誌「ゆうかり」には、2006年3月刊の5号から関わらせてもらっている。2008年3月刊の7号から全面的に関わるようになった。

2. 学会誌をどのように編集してきたか

「随筆かごしま」に、「ゆうかり」の編集方針と「ゆうかり第7号」編集の楽屋裏を書いたことがある(崎原, 2008a)。

3年前(2005年)に心がけたのは、学会活動を通じて学生とOB、OGとのつながりの機会を作ることであった。社会福祉学科設置は82年4月だから、当時からでも25年近く経っている。この歴史を地に足のついたネットワークとして機能させるには何ができるかを考えてきた。

同僚と始めたのが「社会福祉学科に求められるものは何か」というシンポジウム。卒業生と、仕事や学生時代を語ろうという企画である。同時に「合格体験記」「先輩たちは、今・ここで」「寄稿」の各欄を設けて、誌面を学生と卒業生の交流の場にしたいと思った。企画を進める中で今回の編集担当に至るわけである。初登場の「寄稿」欄では3人の学生とやりとりしながら原稿を作ってきた。

「先輩達は、今・ここで」は筆者の非常勤先で知り合った卒業生の先輩に声をかけて5号から始めた。6号からOB会を作るために高橋研究室に関わっていた先輩達に戻して、鹿児島→鹿児島→福岡→福岡→山口の順に各地で活躍する先輩達につなげられ、リレーエッセイの体裁を整えてきた。「合格体験記」は6号から始め、その後、現役合格者だけではなく、卒業後、仕事を続けながら受験し合格した先輩の作品も掲載するようになっていく。両企画共に教員や学生からの推薦を受けて続けている流れもある。

7号から実習教育に関わる内容として、事後実習協議会(社会福祉士)から教員による実習教育の現状と課題を含む当日の概要と、学生による実習報告から始めた。8号の医療福祉(精神保健)コースでは実習報告会に対する学生の参加記と、教員による実習の在り方に対する反省と提言を含む事後協議会報告記を掲載した。9号の心理教育コースでは先輩達の実習報告に対する感想と自らの実習に対する感想を合わせたレポートを通じた特別支援教育実習の事前・事前指導について報告した。今号では入学後、すぐにコース選択を迫られる介護コースの魅力を、介護現場で働き、現在は実習センターで働くコースOBが書いている。

また7号から「寄稿」を「エッセイ」と改め、8号からは、「先輩達は、今・ここで」から独立した企画として先輩達の仕事から見た「鹿児島からの福祉・最前線」を始めて、こちらの執筆者は、鹿児島→鹿児島→宮崎の順に各地で活躍する社会福祉学科一期生でリレーしている。

8号では、6号の年度から始めたシンポジウム「社会福祉学科に求められているものは何か」に、福祉医療教育分野とは異なる民間金融機関に就職した先輩を呼び、その体験をシンポジウム報告として掲載した。また、高校3年頃から振り返り、

民間企業へ就職するまでの試行錯誤を書いた4年生のエッセイも掲載した。

9号では本誌には掲載してきた学会自主研究助成による研究成果報告会を行い、そのレポートを掲載した。県の事業「アイランドキャンパス」と連携した、離島の社会調査の方法と内容について学生がまとめたレポートを2本掲載した。また読み応えのある作品が増える中で、作品の余白や裏表紙を彩るイラストを、中退した先輩と学生が担当してくれた。この先輩が「先輩達は、今・ここで」に書いたエッセイが在學生に与えた影響については後述する。

今回の10号では、社会福祉教育の入口との関連で1年生が書いた授業内レポート「施設見学記録」を掲載した。また新カリキュラムで独立した科目「社会調査の基礎」、社会調査士資格取得との関連で、高橋研究室に商店街から協力依頼がきた事業を取り上げた。その中から独居高齢者訪問面接調査の、準備から報告書作成までの「汗」を書く方法論を、OGが研究ノートとしてまとめてくれた。

「先輩達は、今・ここで」では転職経験を含めたエッセイを掲載した。さらに、不定期だが編集委員会を開き、学生に成果報告会レポート、シンポ記録を読んで、大学院シンポ参加記を書いてもらう他に編集の一部を担当してもらった。エッセイでは9号から作品の余白を彩るイラストを描いている学生のマンガ・エッセイを掲載した。

3. 最近、流行りの〇〇教育との関連で

最近、大学の周辺ではキャリアデザイン教育、初年次教育が叫ばれている。学生時代に何をどのように取り組み、振り返りながら、次にどのようにつなげていくか、つまりキャリアデザインとは人生設計のための日々の営みと、時折の振り返りによる軌道修正や確認の繰り返しをいうのではないだろうか。また初年次教育とは大学生として、そのような取り組みと内省を繰り返す中で自分のキャリアをデザインする姿勢や方法を身につける環境や関係を教員-学生間、学生同士でどのように作るかということだと筆者は考えている。

今、何をしたいのか、何をしたらよいのかについて相手を含む状況の中で今しかできないこと

と、将来に備えて今からしておいた方がよいことの折り合いがつけられない。結果、どちらも中途半端になり時間だけがズルズル過ぎることを多くの人が体験しているといったら間違いだろうか。少なくとも学生に限らず、先輩や教員もかつて、そして今もそのような経験をすることがあるからこそ、これまでを振り返り、今後を見直すキャリアデザインが必要になると思うのだが。

「ゆうかり」の主な書き手はOB・OGを中心とした先輩や学生で、教員は基本的には裏方に回る。先述のシンポジウムでも当日の総司会は学生運営委員、コーディネーターはOBの職員か大学院生が行っている。

ここでは長くなるが、9号の編集後記から引用したい。

「先輩達は、今・ここで」の掲載は5回目を迎えます。今回の書き手の一人はメールアドレス変更のメールがきっかけです。本学を2年で横に出て以来、一度会ったきりだった彼女に、早速「どうしている？」と電話すると宮崎で働いていました。寄稿をお願いすると「私のような者でもよいなら、書かせて下さい」と快い返事をくれました。

学生からクオラ・グループに就職が決まった話を聞いた時のことです。「よかったね」と言いながら、一昨年「ゆうかり7号」に、クオラ病院勤務の先輩に書いてもらったことを思い出した。「廣野さんって知ってる？」と訊くと「知ってる。面接を受けた」と即答。「そうなんだ。廣野さんが書いた文章知っている?」「えっ、あるんですか」「ゆうかりに書いてもらったよ」図書館の入口の立ち話は5号館3階のコピー室の雑談に移りました。「ゆうかり7号」を渡すと立ったまま、読み通し、「ロック好きですか?らしいですね」「面白いでしょ」「面白いっすね。今度会ったとき、読みましたよって言えますね。先生にはやられた。先輩とのネットワークのためにやっていると言っていたけど。こんなところでつながるとは思わなかった」と大きな声で笑っていました。

本学の門をくぐった人なら、仲間として迎え、本学を通したつき合いから始めれば社会福

社、教育等の話題も地に足のついた内容となり、さらに高度な専門性も備えたかたちで語り合える場が「ゆうかり」です。清水直樹先輩や持田穰先輩には、それぞれの現場の最前線の話、歴史的背景も交えて書いて頂きました。清水先輩を紹介して下さった森繁広先輩のサークル「ふれあい」草創期の裏話は、南秀平先輩、田中美成子先輩の報告と併せて読めば鹿国大(鹿経大)生活の今昔、別名「変わっていくものと変わらないもの」が見えてきます。また障がい者の就労支援も松久保和俊先輩(講演要旨)や櫛下町樹里先輩(ジョブコーチ体験談)の話、3年生の横山美菜子さんの(講演)参加記から入ると親しみやすいでしょう。

他にも優れた論考であるから面白い読み物が満載の「ゆうかり」は、大学ホームページを通じPDFファイルで閲覧できます。1982年4月開設の社会福祉学科は間もなく30周年です。学科に関わった者同士という緩やかな結びつき、つまりネットワークを起点にした各自の持ち場からの皆さんの企画(提案)を含む参加をお待ちしております。(S.H)

4. 「ゆうかり」編集から見た社会福祉教育

「ゆうかり」掲載の作品の種類や内容は、多岐に渡るが、方法の視点から共通することが一つある。今ここで立ち止まって振り返り何を選び、どのように書くかを考え書いているのではないか。自己開示とは、過去や状況の中の自分と、ある時は寄り添い、ある時は突き放す中で、今の自分との関連を位置付けて表現する作業であろう。自己覚知とはそのような自分への違和感も含めてねぎらい、次にどうしたらよいかを考えることではないか。

筆者は、新入生ゼミや演習の一部で、「ゆうかり」掲載の作品を輪読しながら連想したことを話させる試みを続けている(崎原, 2010a)。作品を手がかりに何をどこまで他者の前で開示したらよいか。他者の体験の開示や、それに基づく自己覚知をズレを含めてどのように受け止めるのか。さらにはどのように記録するのか? 併行して他者の前で開示した自分をどのように覚知してその内容をどのように表現するのか? 話すのが難しいな

ら、演習の終わりに「振り返り」をどのように書くのか?それを教員が、その時や次回にどのように紹介したらよいか?これらは皆、共感や非審判的態度とは何かを体験しながら考えることになる。

教員によっては、「ゆうかり」から気に入った作品を選ばせ、内容を紹介し、自分が考えさせられたことを報告させる方法を採用している。この方法でも前述の筆者の取り組みでも、「(自分を含む)人の理解」を対人場面における自己開示や自己覚知を通じて進めることができよう。すなわち新カリキュラムにおける相談援助演習(ソーシャルワーク演習)Ⅰの内容につなげていけるだろう。

今回の10号のエッセイでは、読み手が書き手に回った。つまりイラストを担当する先輩が書いた作品「進んで振り返って前を見て」に触発されて、自分のこれまでと現在を振り返り、今・ここでできることから取り組み、その後、どのようなになっているかの近況を1年生や3年生が書いた作品を掲載した。

また筆者は、新カリキュラムにおける相談援助演習(ソーシャルワーク演習)ⅠにおけるKJ法による演習教材の一部を実習体験に関わるエッセイから選んでいる。さらに、先輩の仕事に関わる作品を読んだ翌週に、その先輩を招き、現在の仕事に関する話題提供をしてもらう。足りない内容についてグループ毎に数回の聞き取りをさせてもらった後、話題提供をどのように理解したかとそれに対する自分たちなりの提案書を作成し、報告し、先輩にコメントをもらい、最後にその日の2コマ続きの演習を振り返り、先輩へのお礼を書く演習を設定してきた(崎原, 2009, 2010b)。

5. おわりに—今後の課題

筆者は日本社会福祉学会で「学科学会機関誌「ゆうかり」を中心とした学会活動の試み—コミュニティソーシャルワークの視点から」と題して報告したことがある(崎原, 2008b)。

本報告では、学科教育の場を学生と教員が共通の目標を持って過ごす擬似コミュニティと捉えたい。学科社会福祉学会はカリキュラム等の

学科教育の縛りを離れて、学科教育を活性化するためのアソシエーション組織と言えよう。

したがって学科教育と学科学会活動をつないで、より豊かな学科教育の場を作っていく一連の取り組みをコミュニティソーシャルワークの視点から捉えたい。具体的には社会福祉学科という擬似コミュニティが当面する課題に社会福祉学会として4年間どのように取り組んできたかを紹介し、今後の課題を含めた学会活動の役割を学科の教育活動との関連で検討したい。

何よりも大学の場合やそこでの活動が、社会福祉の現場であり、実践活動の一つである。授業や実習に加え、シンポジウムや講演会、「ゆうかり」編集の場や関係を、学生教員間、学生同士が生活や仕事の一部として生きる中で、それらを互いに社会人として成長していける場や関係としてどのように組織して維持するかが課題であろう。

喫緊の課題は2つの「精神のリレー」。1つは、やっと動き出した「ゆうかり」編集委員会ははじめ、学生が参加してもよいなと思える会活動をどのように組織して維持するかである。

もう1つは、学会シンポジウムのコーディネーター、話題提供者や講演会の講演者の人選、「先輩達は今ここで」や、「鹿児島からの福祉・最前線」の人選をどのように組織的につなげてネットワークにするかである。

そのようなネットワーク、Tight and loose なつながりのかたちに対するヒントを与えてくれた社会福祉学科OBで職員、すなわち同僚との付き合いを8号の編集後記から引用し、彼のエッセイ(池田, 2009)の「はじめに」と「最後に」で締めくくりたい。

「先輩達は今ここで」では現在、職員のOBに寄稿していただきました。確か、編集子が赴任1年目、彼とは西南学院大で行われた会議に参加しました。懇親会や当時の特急つばめでのもう一人の教務課職員との掛け合いを苦笑し、見守っていたのは一番若い彼でした。彼のライフストーリーの一端が、合唱部や司会で鍛えた彼の気持ちのよい話し声によって聞こえてきました。静かな笑いの中で何とはなしに教えられ

ました。後輩たちが大学時代をどのように過ごし、その後をどのように展望したらよいかを考えるためのよい贈り物です。いかにも贈り物でない。戯れに書くとはこういうことかもしれません。(SH)

「何か書いてもらえませんか〜?」そう言われたS先生の手には社会福祉学会誌『ゆうかり』が!これは紛れもなく原稿依頼。ついにお鉢が回ってきたかと思いつつ、「何でもいいんですね、いいですよ」と安請け合い。はて、何を書こうか…そこから私の迷いが始まった。平成20年度がスタートした4月某日の出来事である。

その後いろいろと思いを巡らしたがまとまらない。結局は、随想仕立てにして思いつくままを書けばいい。そうすりゃ気楽に書けるんじゃない!?と自己完結。何ともお恥ずかしい話。

それにしても、別の機会にS先生からいただいた「戯れに書いてみる」というお言葉は魔法のようだった。執筆に対する気楽さが一気に加速した(いいか、悪いかは別に)。

最後に蛇足。「明日は明日の風が吹く」—いい加減な人間の代名詞ともとれるが、私はこの言葉が大好きである。未来に何が起るかなんて知る由もない、それならいっそ明日の風に身を任せればいい。悩みがあっても、遅かれ早かれ必ず解決への風が吹く。何かに行き詰った時、「明日の風」を信じ、吹かれてみてはどうだろうか。それが後々、己の「自信」へと導いてくれるような気がする。

文献

- 池田 2009 随想～過去の私、今の私 鹿児島国際大学社会福祉学会誌「ゆうかり8号」44-46pp
- 崎原 2008a 学びと戯れ—描く生きるかたち 随筆かごしま no.168,30-33pp
- 崎原・他 2008b 学科学会機関誌「ゆうかり」を中心とした学会活動の試み—コミュニティソーシャルワークの視点から 日本社会福祉学会第54回全国大会報告要旨集 (CD-ROM)

- 崎原 2009 ソーシャルワーク演習ⅠⅡの方法
論的検討に向けての一考察 日本社会福祉学
会九州部会第50回研究大会プログラム報告要
旨集 94-95pp
- 崎原 2010a 新入生ゼミと戯れ—描く生きる
かたち 随筆かごしま no.177, 36-39pp
- 崎原 2010b ソーシャルワーク演習と戯れ—
描く生きるかたち 随筆かごしま no.182, 46-
49pp

2010年度演習論文テーマ

安達ゼミ

フロイトの自我防衛機制の観点からみた人の心の動き

末吉 真由美

アンタッチャブル山崎弘也のすごさ

犬塚 康太郎

マイケル・ジャクソンが「King of Pops」と言われる理由

樋高 裕之

マイケルジョーダンについて

神代 潤

音楽と人間の心

宇都 千奈津

教育環境と子どもの問題行動～子どもの問題行動は親だけの責任なのか～

佐土原 千枝

老人保健施設実習で学んだこと

松葉 貴之

ピーターパンシンドロームと犯罪の関連性について

石田 麗奈

性同一性障害を持つ人が過ごす生活・人生とは

山内 見峰

実習を振り返って～今、自分たちに出来ることは～

勝部 亮

実習に関する考察～体験を通して見えた課題～

末永 達二

摂食障害～本人たちが抱くおもしろい～

濱村 文香

ソーシャルインクルージョン社会の実現に向けて～知的障害者のソーシャルインクルージョンを考える～

横山 美菜子

人間の性に関する知識について～障害者の性～

福森 沙代

天羽ゼミ

貧困の連鎖と格差社会

鵜瀬 綾菜

海外の児童労働について

大山 志穂理

デートDV～あなたの身近でこんなこと起こっていませんか～

島田 佳世子

性的虐待を受けた子どもへのケア～性的虐待の事例を通して～

新城 優二

精神障害者の地域生活への支援～A氏における地域社会での現状と課題～

上野 早葵

岡田ゼミ

貧困について～ホームレス調査～

大村里 沙

児童虐待における、その背景、及び現状について

吉松 多敬紘

認知症高齢者の現状と課題～施設の視点・家族の視点～

堀田 真紀

精神障害者家族の困難と回復支援の課題

阿久根 法子

裁判員裁判について

佐野 亮介

アルコール依存症と回復について

山本 悠介

加害者家族の心理～小説「手紙」を読んで～

山岡 那恵

崎原ゼミ

なぜ私はここにいいのか～その軌跡とこれから～

田代 圭祐

大学祭パンフレットを通してみえてきたもの

坂元 美子

高木ゼミ

スティグマ

平田 志穂

認知症高齢者とのコミュニケーション

徳直 樹

日本の生活保護のあり方について

江籠平 結衣

認知症の方と接する際の専門職のコミュニケーションに関して

中村 友也

映画「レインマン」が伝えること～自閉症との関わり～

印南 あゆみ

障害者と健常者がともに暮らしやすい環境とは

北ノ園 文

モラル・ハラスメントについて

永田 麻実

地域における高齢者の独居

菅野 裕人

無縁社会

田中大 輔

高橋ゼミ

商店街が行う高齢者の生活支援～宇宿商店街の取り組み～

前島さゆり, 永里 春佳

日高有里菜

田中(顕)ゼミ

音楽療法について

中城 悠輔

アニマルセラピーについて 木佐貫 大地

田中(安)ゼミ

対人援助におけるコミュニケーション～絵を通してのコミュニケーションについての一考察～

阿部 翔太

施設入所者における生きがいについて 黒木 五月
一人暮らしの高齢者の特異な行動に対する家族の気付きについての一考察～もの忘れについて考える～

平川 なつき

コミュニティケアにおける声かけについての一考察

有馬 理文

認知症高齢者に対するコミュニケーションの一考察

五十嵐 直樹

社会福祉の国際比較についての一考察—スウェーデンの介護福祉制度との比較を中心として—

徳重 琢也

老いと生きがいについての一考察 中村 彩子

家庭でも介護を楽しくするための考察 外蘭 駿

認知症にならないための予防策 前迫 星也

在宅介護者の心身の健康状態における一考察

永井 千晶

認知症という疾患における正しい知識と理解について

今村 祐太郎

動物が人に与える影響 村山 翔平

小規模多機能ホームについて 山口 明美

脳梗塞とその後のケアについての一考察

山元 成一郎

入所施設の利用者にとっての理想の住施設環境を提供するその一考察 四元 由梨奈

ムーブメントセラピー～重症心身障害児(者)に対するムーブメントセラピーの一考察～ 湯ノ口 正晃

田畑ゼミ

高齢者虐待と認知症について 黒瀬 義央

介護保険制度 吉崎 功太郎

介護保険制度—その仕組みと課題— 坂元 友樹

介護保険制度～制度の成立・概要・現状～

上之 智志

生活保護制度～制度の概要・現状・課題～

中山 信広

生活保護の受給の在り方に関する日独比較～濫救・漏救の視点から～ 川辺 真智子

医療保険制度～国民健康保険の現状と課題～

田ノ上 由香

生活保護と自立支援 萩元 良昭

生活保護とワーキングプア 宮川 龍弥

アメリカ医療保障制度—無保険者問題とオバマ改革—

橋口 駿介

地域包括ケアシステムの実現に向けて—介護保険制度

下の高齢者支援— 長崎 徳子

労災保険—その仕組みと事例から学ぶ現状と課題—

橋口 直樹

中山ゼミ

乳幼児心理・発達について 山元 和紀

スポーツ選手における摂食障害 遠矢 翔太

アルコール依存症について 石神 洋昭

高次脳機能障害—症状の良好化に向けて—

宮崎 志織

自殺とマスメディアの関係についての卒論

池元 祐樹

音楽療法 鮫島 佑佳

医療事故について 泊 奏行

性同一性障害について 伊牟田 翔也

高齢者の食事について 桑原 優太

セックスボランティアについて 畦地 綾香

現代におけるうつ病の傾向 永吉 拓也

施設における問題行動とその対応について

山手 麻弥

中高年・高齢者の自殺

柿木 雄太

高齢者の性生活について

畦地 翔太

いじめについて

濱田 一穂

高齢者虐待

原田 隆一

堀田ゼミ

映画の中に映し出されている障害者像 肥後 龍大

いじめとメディアの関わりについて 立石 朋也

福祉を通じた音楽活動 福園 力斗

養毛ゼミ

スペシャルオリンピックスの歴史と自分たちの活動を通しての一考察 川路 航太, 山邊 友寛

上蘭 絃生

特別支援教育における自立活動に関する一考察

岩神 太郎

摂食障害について 増満 和哉, 山口 晴香

重症心身障害者のコミュニケーション方法

今 村 仁 美

入院中の子どもの現状とその後

小畑安里那, 執印 愛花

人間関係と自己防衛との関係 小松 史織, 竹上さやか

障害者スポーツについて 恵島 光美, 木村 香澄

音楽療法について 是 枝 李 沙

重症心身障害児における療育の課題 萩 元 めぐみ



社会福祉学会自主研究助成の募集

標記の件について下記の要領で公募いたします。

1. 助成の目的

鹿児島国際大学社会福祉学会・学生会員の自主的な学習・研究活動の活性化を図る。

2. 助成の対象

自主研究（ゼミを含む）や特色あるボランティア活動・実習活動報告等とする。

3. 助成額

1件あたり5万円を上限として、総額30万円までとする。

4. 申請受付期間

2010年5月24日(月) - 6月25日(金) (2010年度の場合)

5. 申請手続方法

個人申請の場合……本人名で申請する。 共同申請の場合……研究代表者名で申請する。

申請書に必要事項を記入のうえ、田中(顕)研究室（5号館735研究室）に提出する。

予算内容も記入すること。

また、助成の対象は、研究活動に必要な文献の複写、資料の印刷、文具等の各種消耗品の購入および交通費等とする。（書籍および換金性の高いテレホンカード等は不可）

交通費の支出は公共交通機関（1人あたり運賃と利用した人数を書いた明細でよい）に限り、ガンリン代は不可とする（詳細については、自主研究助成担当教員・田中(顕)まで）

※申請者は、別紙申請書を提出後 tanakak@soc.iuk.ac.jp まで、次の要領によりメールの送信をお願いします。（①件名・表題＝「2010年度自主研究助成申請の件で」・本人＝申請者の学籍番号・氏名および連絡先の電話番号）

6. 採否の決定

申請順に申請内容を審査し、採否について随時、申請者に通知する。

7. 活動成果発表

研究報告書と、年度末に発行する学会誌『ゆうかり』に掲載するための要旨を学会運営委員会に提出する。2011年1月22日(土)にポスターセッションによる研究活動報告会を開催（2010年度の場合）
研究報告書 様式：A4用紙にて作成。

枚数・字数等、特に制限は設けませんが、研究内容に関して可能な限り詳細な報告を記載すること。

要 旨 様式：A4用紙にて作成。（研究報告書の要旨を3,000字～3,500字以内で作成）

※研究報告書および要旨とともにワープロ文書ファイルを必ず添付すること。

8. 助成金の執行

採用通知を受けてから、立て替え払いをして領収書を保管しておき、指導教員の承認を得た上で、研究報告書および要旨とともに提出すること。

（詳細は、自主研究助成担当教員・田中 顕悟 <tanakak@soc.iuk.ac.jp>）

自主研究助成成果報告会・要項

鹿児島国際大学社会福祉学会

1. はじめに

昨今の社会情勢の分析を待たずとも、それぞれ厳しい条件の中、社会福祉学科に在籍し勉学やアルバイトに励みながら、自主研究に取り組んでいる皆さん、お疲れさま。

本学社会福祉学会では、鹿児島国際大学社会福祉学会・学生会員の自主的な学習・研究活動の活性化を図るべく、自主研究（ゼミを含む）や特色あるボランティア活動・実習活動報告等を対象にして自主研究助成を行ってきました。

その成果の一部は、社会福祉学会機関紙「ゆうかり」に掲載し、公表してきました。さらに成果の公表を通じてテーマの共有、さらにはそれを出発点として今後の課題や新たなテーマの検討を行う機会を設けた方がよいと考えました。具体的には自主研究助成成果報告会を行うことにしました。初めて行う試みゆえ、発表方法や形式において、様々な負担をかけることもあるかと思いますが、本学社会福祉学会活動の活性化によりしくご協力下さい。

2. 開催日時と場所

2011年1月22日（土） 13時00分～15時00分 510教室（2010年度の場合）

発表者は、13時30分までに所定の場所に、発表内容をまとめたポスターを掲示して下さい。当日は学会運営委員が会場に待機していますので、不明な点はお尋ね下さい。

3. 発表方法

ポスター発表によります。4の要領で作成したポスターの前に1時間立ち、その内容を参加者とやりとりしながら、発表内容についての考え方を深めます。

具体的には、最初に一通りそれぞれのポスターについて発表者が簡単な紹介をしてから、一斉にそれぞれの持ち場で自由質疑応答に入ってもらいます。

口頭発表のような一方的な報告ではありません。参加者とのやりとりを通じて、他者と発表内容について話題をどのように共有したらよいか、さらには率直な意見を受けることが自分の気づかなかった視点から研究を見直す機会になり、今後の課題を検討する良い契機になります。

なお、共同研究の場合は、発表担当者をグループ内であらかじめ選出してください。ただし、発表担当者だけに一任するのではなく、グループ全員、報告会に出席し発表者のサポートをお願いします。

4. ポスターの作成要領

発表者は、提出したゆうかり掲載用の原稿をさらに分かりやすくまとめ、その内容を説明できるように準備するとよいです。

発表するためのポスター台紙として、横90cm×縦120cmの巻クラフト用紙1枚を配給しますので、その台紙に下記の(1)(2)を貼って下さい。

- (1) 上から横80cm×縦15cmの幅のスペースに、タイトルと発表者氏名を別紙にワープロ印字して貼って下さい。タイトル文字サイズは80ポイント、発表者氏名（共同研究者がある場合は連名で）の文字サイズは48ポイントにして下さい。
- (2) その下に発表内容として、28ポイント以上の文字サイズでA4判用紙にワープロ印字したものを、例として、縦に4、5枚位つなげ、横に3列並べて貼ることができます。レイアウトはその並べ方に縛

られるものではありません。図や表、箇条書きを→でつなぐなどの工夫が、発表内容に対する見直しにもつながります。用紙はA4判以外でも構いませんが、なるべく台紙の横にははみ出さないようにして下さい。

レイアウトのイメージは、70-100cm離れても、大まかな内容が見える位が目安です。

5. 問合せ先

不明な点は、右記メールアドレスまで sakihide@soc.iuk.ac.jp

社会福祉学会誌『ゆうかり』への投稿のお願い

『ゆうかり』は、鹿児島国際大学福祉社会学部社会福祉学科並びに福祉社会学研究科に所属する学生と教員で構成される学内社会福祉学会の機関誌です。学生間、OB・OGを始めとする学科に関わった先輩達と学生間、学生と教員間の学問的および地域の交流を促進する企画を、誌面で展開したいと計画しています。具体的には以下の内容を予定しています（字数は応相談）。皆さんの執筆を通じた積極的な参加をお願いいたします。

合格体験記

社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士の資格試験や教員採用試験合格体験記を募集します。内容は合格に向けた試験勉強スケジュール、工夫した方法、苦心談などを、後輩に向けてメッセージとしてまとめて下さい。

実習体験記

社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士の実習や教育実習の体験記を募集します。実習報告書等を見るまでは見えてこない実習体験について、具体的な内容を、体験から得られた反省点や公開可能な裏話も含めて、後輩に向けてメッセージとしてまとめて下さい。

エッセイ・その他

上記のテーマ以外で、学生生活やサークル活動、そしてアルバイト等の体験やそれらを通じて考えさせられたことを書いたエッセイを募集します。また教員が推薦する授業関係のレポート等も募集します。

先輩達は、今・ここで

社会福祉学科に関わったことのある先輩達の学生時代、仕事の中で見つけてきたこと、そして現在についてなどを、後輩に向けてのメッセージとしてまとめて下さい。

社会福祉学科開設30周年に向けて

1982年4月に開設された本学社会福祉学科は、間もなく30周年を迎えます。シンポジウム等、社会福祉学科の歴史を振り返り、今後を展望するのによい企画があれば、提案して下さい。大まかな内容で構いません。

(詳細は、投稿原稿担当教員・崎原 秀樹 <sakihide@soc.iuk.ac.jp>)

鹿児島国際大学社会福祉学会会則

[総 則]

第1条 本会は、鹿児島国際大学社会福祉学会と称し、本会の事務所を鹿児島国際大学福祉社会学部社会福祉学科に置く。

第2条 本会は、学術研究を推進し、会員相互の学問的交流を促進するとともに、地域社会の文化的発展に寄与することを目的とする。

第3条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (ア) 会報ならびに機関紙の編集・発行
- (イ) 研究会・講演会等の開催
- (ウ) その他、本会の目的を達成するために必要と認められる事業

[組 織]

第4条 本会は、福祉社会学部社会福祉学科並びに大学院福祉社会学研究科に在籍する学生および両科の専任教員をもって会員とする。

2 準会員については、別に定める。

第5条 本会に次の機関を置く。

- (1) 会長
- (2) 総会
- (3) 運営委員会
- (4) 監査委員

2 会長は、社会福祉学科長とする。

3 運営委員（教員4名、学生8名以上）および監査委員（教員2名、学生2名）は、社会福祉学科で選出し、総会の承認を得るものとする。

4 前項の各位委員の任期は、教員については2年、学生委員については1年とする。ただし、再任は妨げないものとする。

[機 関]

第6条 会長は、本会を代表する。

2 会長は、年1回の定期総会を招集しなければならない。

3 会長は、運営委員会の議決に基づいて臨時総会を招集することができる。

第7条 総会は、本会の最高議決機関である。

第8条 運営委員会は、総会の承認により、学会の運営にあたる。

2 運営委員会は、委員長（教員）と副委員長（学生）の各1名を互選する。

(1) 運営委員長は、運営委員会を代表し、定期および臨時に運営委員会を招集する。

(2) 運営委員会は、そのもとに必要に応じて委員会を置くことができる。

3 運営委員会は、教員委員および学生委員のそれぞれ過半数の出席によって成立する。

- 4 運営委員会は、次の事項を審議決定しなければならない。
 - (1) 年間事業計画
 - (2) 予算案および決算書
 - (3) 会則の改正ならびに諸規定承認・改廃
 - (4) その他必要な事項
- 5 運営委員会の議決は、出席した教員委員および学生委員のそれぞれの過半数の賛成で決する。

[財 政]

第9条 教員会員の会費は、年額2,500円とし、年度初めに納入する。学生会員の会費は、年額2,500円とし、入学時に一括納入する。

第10条 本会の経費は、会費・補助金・寄付金でまかなう。

- 2 会計年度は、4月1日から翌年3月31日までとする。

第11条 会費の徴収、保管および支払いについては、大学事務局に委任するものとする。

第12条 運営委員会は、毎年会計年度終了後2ヶ月以内に決算を行い、監査委員の監査を受けたうえで総会に報告し、その承認を得なければならない。

[改廃手続]

第13条 本会則の改廃は、運営委員が発議し、総会の決議を経なければならない。

附 則

1. この会則は、昭和57年4月1日から施行する。
2. この会則は、平成13年7月27日に改正し、施行する。
3. この会則は、平成15年7月4日に改正し、施行する。
4. この会則は、平成18年4月1日に改正し、施行する。
5. この会則は、平成20年4月1日に改正し、施行する。

2009（平成21）年度鹿児島国際大学社会福祉学会・決算報告

収入の部

項 目	予 算	決 算
前年度繰越金	6,829,141	6,829,141
会 費		
2009年度学部新入生分（@10,000）	1,210,000	1,210,000
2009年度大学院新入生分（@5,000 @7,500）	75,000	75,000
留年生分（学部・大学院 @2,500 @1,250）	0	31,250
2・3年次編入（@10,000 @5,000 @6,250）	30,000	10,000
転学科（@7,500）	0	0
復学生（@2,500 @1,250）	0	7,500
教員分（@2,500 @1,250）	52,500	50,000
雑収入	0	18,888
普通預金利息	0	2,625
合 計	8,196,641	8,234,404

支出の部

項 目	予 算	決 算
会 議 費	100,000	21,000
事 務 費	30,000	0
通 信 費	10,000	4,415
交 通 費	10,000	0
コ ピ ー 費	10,000	0
事 業 費	2,030,000	1,806,652
1) 『 ゆ う か り 』 発 行 費	500,000	449,885
2) 自 主 研 究 助 成 費	300,000	324,089
3) 演 習 論 文 抄 録 印 刷 費	300,000	286,650
4) 講 演 会 ・ シ ン ポ ジ ウ ム 開 催 費	450,000	253,008
5) 新 入 生 歓 迎 行 事 他	120,000	100,000
6) 卒 業 パ ー テ ィ ー 費	360,000	390,520
予備費（入学辞退・編入・転学科学生等への一部返金）	50,000	2,500
支 出 小 計		1,832,067
次 年 度 繰 越 金		6,402,337
合 計	2,240,000	8,234,404

編集後記

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。社会福祉学科を或いは福祉社会学研究科を巣立ち、それぞれの分野で、ご活躍されることをお祈りいたします。

さてご覧のように「ゆうかり第10号」は大変充実したものとなりました。原稿を寄せて下さった学生、大学院生、先輩の皆さん、自主研究助成に応募して研究された学生、大学院生の皆さん、そして原稿を集め、本に編むための連絡調整や作業をして下さった運営委員の皆さんのおかげです。ありがとうございました。

今号では、不定期ながら学生や先輩による編集委員会と連携して機関誌「ゆうかり」作りができました。編集にかかわった皆さんに一言ずつ頂き、編集後記としたいと思います。

原稿を書いたり、話し合ったり、ゆうかりの編集は大変な作業でしたが、同じ編集委員の方々や先輩、先生と支え合い楽しみながらできました。とても良い経験ができました。ありがとうございました(梶原智代)。ゆうかり編集委員になった時、最初は不安だらけでした。しかし編集を通じてしか得られない経験がいろいろありました。今ではやってよかったと心から言えます。編集する中で知り合った多くの方々に感謝します(安持はるな)。ゆうかり編集を通じて多くの方々の経験、生き方に触れることができてとても勉強になった。一人ひとりが異なる生き方をしているが、その中で喜びを感じたり、悩みを抱えながら今の自分へとつなげているのはどの方にもあてはまることだと思った。これからも様々な壁にぶつかることがあると思うが、先輩方の体験から学んだことを自分なりにいかしていきたい(久留千佳)。挿絵とマンガ、描かせていただきました。やっちゃった感大売出しです。読んでくれた方が、くすっと笑ってもらえたら幸いです(川路美紗)。久しぶりに筆を握ることができてよかったです(柴田麻衣子)。昨年に引き続き編集に関わらせていただき、ありがとうございます。昨年書かせていただいたプチエッセイの反響を聞いて、恥ずかしいやら、嬉しいやら。今年も素敵な思いの詰まった「ゆうかり」が、誰かの心に届きますように(三棹(烏丸)みなみ)。

最後に優れた論考であるから面白い読み物が満載の「ゆうかり」は、大学ホームページを通じPDFファイルで閲覧できます。1982年4月開設の社会福祉学科は2011年4月以降30年目に突入します。学科に関わった者同士という緩やかな結びつき、つまりネットワークを起点にした各自の持ち場からの皆さんの企画提案を含む参加をお待ちしております。(S.H)

2010(平成22)年度 鹿児島国際大学社会福祉学会 運営委員

田畑 洋一 鱒淵 祐一 田中 顕悟 崎原 秀樹

1年生 安楽侑哉 笹平彩矢香 村山奈津子 浮田瑞紀 前村勇馬 上畝絵里 安持はるな 原田絵麻
中島亮 奥村誠 中村建斗 中村沙織 八木未央 鮫島有佳 穂山茜奈 末満紗希 山下廣大
前野貴彦 福和樹 梶原智代

3年生 濱崎太陽 山口大貴 森園菜々恵 溝口修平 長濱啓太 横手智成 下堂園将人 相星孝明
東陽平 西佑磨 山下弥未 中村愛 迫田佳奈 久留千佳 井上智美 福永千紘 分領春佳

大学院生 大野さおり 陳琨

鹿児島国際大学社会福祉学会誌

ゆうかり 第10号

発行 2011年3月18日

編集 鹿児島国際大学社会福祉学会

住所 鹿児島市坂之上8-34-1

〒891-0197 ☎099(261)3211(代)

印刷 斯文堂株式会社 ☎099(268)8211(代)

